e+FICTIONS
SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

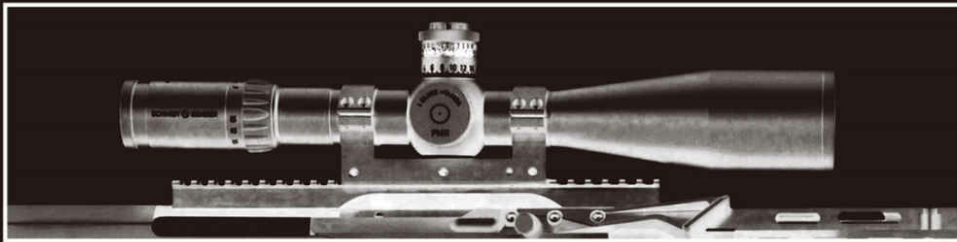
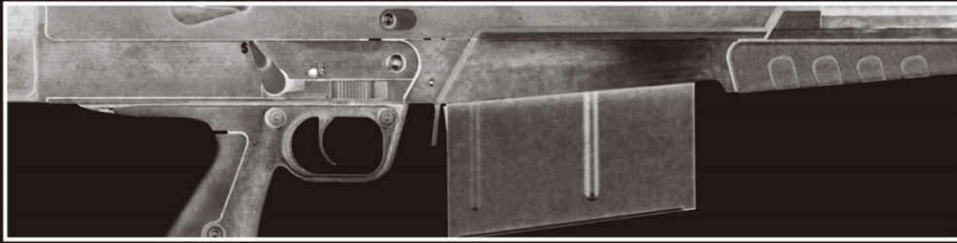
ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

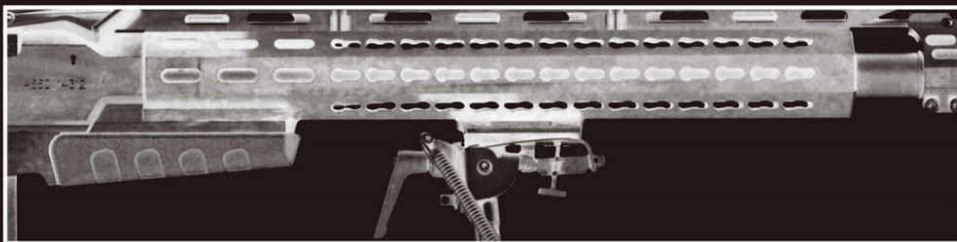
ダンガンロンパ霧切　6

北山猛邦
Illustration／小松崎類

星海社

Contents

6
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
霧切
KIRIGIRI

第 一 章

Shoot down the angel

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所	ウェーデルン山荘	3億
凶器	ロープ	1〇〇〇万
凶器	ナイフ	5〇〇〇万
トリック	足跡	2〇〇〇〇万
その他	密室	2億
その他	スキー道具一式	5〇〇万
	総コスト	5億4〇〇〇〇万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

鈴槍元介

現在——AM 06:30

　標的までの距離、２９２メートル。
　気温マイナス５度、湿度72パーセント。
　追い風、風速7メートル毎秒。
　雪は夜明け間際に小降りになった。
　霧切(りり)は白いコートを羽織って、雪の上に伏せている。標的側からこちらの姿は見えないはずだけど、相手の能力を考えればけっして安心はできない。
「霧切ちゃん、手」
　わたしは彼女の右手を取って、両手で包み込む。彼女の指先は雪と同じくらい冷たかった。
　少しの間、わたしはそうして彼女の指を温めた。
「ありがと……結お姉さま。もう大丈夫よ」
　霧切の手がわたしから離れて、銃のところへ戻っていく。わたしは不安な気持ちでそれを見送る。
「──装填」
　彼女はボルトハンドルを押し込んだ。
　運命という名の弾丸が薬室(し)に送り込まれる。
　そして彼女の小さな指がトリガーにかかった。
「いつでもいけるわ」

少し遡(さか)って——AM 04:44

　暖炉の火が弱まり始めると、ラウンジに集まった男たちの顔に陰りが差し出した。窓を震わせる風の音に怯(び)えている者もいる。
　雪はまだ、降り続いていた。
「もう薪がない。燃やせるものなら、この際なんでもいい。とにかく暖炉の火だけは確保しておこう」
　男たちは立ちあがり、それまで座っていた椅子を床に叩(たた)きつけて壊し始めた。静謐な雪夜の山荘に破壊の音が響き渡る。バラバラになった木片が次々に暖炉に放り込まれていった。

一方で、そういう力仕事は男がするものだと云わんばかりに、一人の女がソファで膝を抱えて、彼らを眺めている。暖炉を巡る男たちの狂騒は、影絵となって床に描かれ、女の目にはいっそう滑稽なものに映って見えた。
しかし女の興味は、彼らよりもむしろ、自分と同じようにソファで丸くなっている子供に向けられていた。
性別も国籍もよくわからない不思議な印象の子だ。
小柄で手足は細く、血が通っていることを感じさせないほど肌が生白い。よほど寒いのかと思えば、上着を羽織るでもなく折り畳んで胸に抱えている。その場違いなベストにネクタイ姿は、古い外国映画に出てくる上流階級の子供を思わせた。
彼――あるいは彼女――は視線に気づくと、柔らかな微笑みを女に返した。
謎めいていて、神秘的な笑顔。
「……寒くないの？」
気まずくなって、女が疑問を投げかける。
彼はただ肯いて、深い泉のような瞳で女を見返した。
「何処から来たの？」
「遠いところです」
初めて声を発した。
それでもやはり性別はよくわからない。
「名前は？」
「必要ですか？」
「え？」
「僕の名前」
「……そうね、別にいいや。この調子じゃ生きて帰れるかどうかもわかんないし。もしここを出られるってなったら、その時にあらためて訊くことにするよ」
冗談めかした女の言葉に、彼は無邪気に微笑むだけだった。この状況でよくそんなふうに笑えるものだと女は思った。
「そういえば君と一緒にいた、あの人は？　ほら、外国人の。さっきから姿が見えないけど……もしかしてあれ、君のお父さん？」
「まさか。そう見えたのだとしたら心外です」
彼は大げさに肩を竦めてみせる。
――違うのか。

だとしたら彼らの関係は一体？
「暖炉で燃やすものを探すって何処かに行ったきり戻ってきませんね。僕、ちょっと様子を見てきます」
　彼は立ち上がった。
　ふわりといい香りがする。
「ああ、うん、そうね。そうした方がいい。暗いけど、一人で大丈夫？」
「ええ。これがありますから」
　彼は手品みたいに、何処からともなくペンライトを取り出す。
　そして薄暗い廊下へと一人で消えていった。
「……へんな子」
　女は煙草に火をつけながら、彼の背中を見送った。

　彼——御鏡霊はペンライトを頼りに廊下を進む。
　この山荘は数十年前までペンションとして経営されていたが、今は見る影もなく、荒れ果てた無人の廃墟と化していた。スキーブームの過ぎ去った雪山には、似たような建物が点在していて、これもその一例に過ぎない。当時の名残として、土産物のキーホルダーがラウンジで販売されていたことを示す看板がかかっていたが、誰の悪戯か、『絶賛発売中』の文字が一部塗り潰されたうえに書き換えられて、『絶望中』になっていた。
　御鏡は細い階段を上がって、近くの部屋の扉をノックした。返事はない。鍵がかかっていたが、ネクタイピンに仕込んであるピッキングツールで五秒とかからず解錠した。
　ペンライトを消し、誰もついてきていないことを確認してから、するりと部屋に入る。うしろ手に素早く鍵をかけた。
　小さな空き部屋だ。もとは宿泊者用の客室と思われるが、今は何もないがらんどうで、横倒しになった衣装棚が奥の窓辺に一つあるだけだった。
　その棚を台にして、上に男が座っている。
　膝を立てて三角形を作り、そこに肘をついて、親指と人差し指で作った輪から外を覗いている。一見すると子供じみた姿勢だが、それはまさしく、膝で肘を支える狙撃姿勢の一つであり、標的を探す時の彼の癖だった。今は銃こそ手にしていないが、窓の外に向けた目つきは研ぎ澄まされた狙撃手のまなざしだ。
　彼こそ『法執行官』と呼ばれるトリプルゼロクラスの探偵、ジョニィ・アープである。
「鍵、かけておけよ」

彼は振り返らずに云う。
「かけました」
「good」
「いよいよ惨劇にふさわしい雰囲気になってきましたね。無人の山荘に迷い込んだ七人の男女……これで何も起きなかったら嘘ですよね。はぁ、ときめいてきました」
　御鏡はジョニィの背中に話しかける。
　しかし彼は反応を示さず、窓の方を向いたまま。
「何か見えましたか？」
　御鏡は一緒になって窓の外を覗き込む。
　ほとんど真っ暗で何も見えない。
「雪を見ているのさ」
　ジョニィが云う。
「まるで詩人ですね」
「そう、１６０グレインの火薬をインクにして描く弾道こそがオレの詩だ。狙撃手は詩人のように、空と大地を身体に感じることができなければならない。肌に触れる風の向き、強さ、空気の密度、温度の変化、重力、そしてコリオリの力――狙撃は宇宙だ」
　無精ひげの生えた口元が笑う。
「宇宙なら僕も好きですよ」
「レイ、お前は話のわかる相棒だよ」ジョニィは指で作っていた輪を解いて、親指を立てた。「もちろん、ただ雪をぼんやり見ていたわけじゃないぜ。見ろよ、雪の結晶の角が丸くなりはじめている。上空の気温が上がった証拠だ。予報では昼まで降ると云っていたが、この様子なら夜明け頃にはやむだろう」
「……雪の結晶が見えるんですか？」
「見えないのか？」
　ジョニィは不思議そうに訊き返す。
　――いくら目がいいといっても、夜空に舞う雪の結晶の形まで見えるものだろうか。
　御鏡は今まで多くの信じられないものを目の当たりにしてきたが、ジョニィという男の存在も、その一つに数えられそうだった。
「そんなことより、レイ。そろそろ髭を綺麗さっぱり剃ろうかと思うんだが、どう思う？　その方がクールに見えるんじゃないか？」
「今でも充分クールですよ」

「そう云うと思ったぜ」ジョニィは無精ひげをさすりながら云う。「まるで狼男みたいだろ？　孤高のウルフガイだ」
「ふふ、狼男さん、ところでクールよりもホットはいかがです？」
　御鏡は腕にかけた上着の下から、魔法瓶の水筒を取り出した。カップに液体を注ぐ。暗闇の中に湯気が立ちのぼり、豊かな香りが広がった。
「お、コーヒーか？　気が利くな、レイ。まさかアメリカ人にアメリカンを飲ませるっていうジョークじゃないだろうな？　ハハッ、云っとくけどそれ、オレの国じゃ伝わらないぜ？　Umm……なかなか美味いじゃないか。じいちゃんが作ってくれたコーヒーを思い出すよ。オレの家族はみんなそれを『アリゾナの乾いた風の味』と呼んで――」
「事件が起きるまで、もう少し時間がかかりそうですね」
　御鏡はジョニィをやり過ごすように話題を変える。
　今回の『黒の挑戦』が開封されてから約２８時間が経過した。
　事件はまだ始まってもいない。やっと舞台に登場人物が揃った段階だ。
　今からおよそ二時間前、スキー旅行客を乗せたバスがスリップし、崖の上で立ち往生した。さいわいけが人はなく、車体の損傷もなかったが、バスが崖に向かって不安定な状態で傾いていたため、乗客たちはバスから降りざるをえなかった。外は吹雪で視界もままならない状況だったが、雪山をさまよううちに、彼らはやがて無人の山荘を発見する。そして藁にも縋る気持ちで山荘に飛び込んだ。
　もちろんこれらはすべて、復讐者に完全犯罪の機会を与える組織――犯罪被害者救済委員会のお膳立てによるものだ。バスの運転手は組織の関係者か、組織に雇われた者だろう。事実、山荘までの道のりの途中で運転手は姿を消した。何も知らない乗客たちは、不幸にも運転手は吹雪の中ではぐれたのだろうと考えている。
　山荘に逃げ込んだ乗客は七人。
　御鏡とジョニィはスキー客を装い、彼らの中に紛れ込むことに成功した。
「ところで今回の探偵役である鈴檎元介がスキー客の中にいたのには気づいていますか？」
「毛深い山男みたいなやつだろ？　雪山サバイバルでは一等賞取れそうだが、はたして事件解決の方はどうかな。というかあいつ、オレと少しキャラ被ってないか？　主にワイルドな方向で」
「探偵図書館分類によるランクは『５』――一般的にいえばまあまあできる方です。挑戦状を受け取り、それを見過ごさずにここまで乗り込んできているという点からみても、頼りがいのある探偵といえるでしょう。ジョニィさん、あなたは気をつけた方がいいかもしれませんね。このあと実際に殺人事件が起きたら、

真っ先に疑われますよ。だって、とても怪しいですから」
「ハハハ、面白いことを云うじゃないか、レイ」ジョニィは大口を開けて笑いながらも、窓から視線を外さない。「事件が起きたあとのことなんてどうにでもなるだろ？　オレたちにとってclimaxは、今この瞬間、事件が起きる前の静 寂にこそ存在する。そしてその静けさの中で、オレたちがすべきことはただ一つ――小鹿ちゃんたちを狩る。それだけだ」
　霧切響 子と五月雨結の二人は必ず現れるだろう。
　その小さな肩に銃を携えて。
　彼女たちには、『黒の挑戦』を阻止するという目的がある。人命を守るために。あるいは探偵としての誇りを守るために。
　――必ず現れる。
　そんなことはわかっている。
　だからジョニィは彼女たちを待っている。
　事件の関係者の中に紛れ込んだのもそのためだ。事件を阻止しようとする霧切たちに対し、現場に先回りして待ち伏せし、カウンター・スナイプを決める。
　任意に選ばれた『黒の挑戦』を舞台に、阻止か存続かをかけて、水面下で行なわれる狙撃戦――それがジョニィのゲーム『Shoot down the angel』だ。
　舞台となる『黒の挑戦』の事件内容については、霧切はもちろんジョニィも知らされていない。ゲームとして公正を期するため、双方にとって未知の戦場が選ばれる。
　両者に与えられる情報は、挑戦状の文面だけ。
　もちろん挑戦状の文面から、どのような事件が起き、誰が犯人かを推理することは可能だ。
　その推理こそが狙撃戦の命運を分ける要素となる。
「響子さんの狙撃の腕はどれほどですか？」
「あいにく、まったくの未知数だ。オレが銃のいじり方を教えたのはもう何年も前の話で、当時の彼女はたった今保育器から出てきたんじゃないかっていうくらい小さかったからな。撃てるのはせいぜい二十二口径まで。それ以上のやつをぶっ放したら、おそらく反動で大気圏まで飛んでいって、火星の周りをぐるぐる周ることになっていただろうよ」
「そうは云っても、こんなゲームを始めるくらいですから、腕を買ってはいるんでしょう？」
「期待している、と云った方が正しいな。なにしろこのオレが教えた相手だぜ？　オレにとって、この世でもっとも恐るべき相手は、湖面に映ったオレ自身の影だけだが――もし他に敵がいるとしたら、それはオレから教えを授かった人間だけだろう」

ジョニィはにやりと笑った。

霧切たちがいつ現れるかはわからない。もしかしたらすでに、この吹雪の白い闇を暗躍し、最適な狙撃ポイントを探しているところかもしれない。

「夜が明ける頃、必ず小鹿ちゃんたちは動き出す。それまでは休んでていいぜ、レイ」

「撃つのもあなた、見張るのもあなたじゃ、僕のやることがないじゃないですか」

「ラウンジで連中に愛敬振りまいておけよ。オレ、カッコイイ担当、お前、カワイイ担当」

「そんな退屈な仕事、死んでしまいます」

御鏡はバッグから双眼鏡を取り出して、窓の外を眺めた。米軍仕様のサーマルビジョンにより、雪山の様子がモノクロ映像として浮かび上がって見える。熱を感知して、その部分をより色濃く映し出すものだが、周囲一帯に熱をもった生物の姿は確認できなかった。

山荘の周囲は白樺の林に囲まれており、見通しはさほどよくない。建物はちょうど窪地の中心に位置しているので、索敵の点からいえばこちらが不利だ。

「夜のうちに撃ってくるとは考えられませんか？　彼女たちも当然、夜間装備を整えているはずです」

「もちろんだ。だからオレはこうしてずっと、公園のベンチで人生を振り返ってるじいさんみたいに、身じろぎもせずじっとしているんだよ。だが彼女たちはきっと夜明けを待つだろう。わざわざ命中率を下げるような賭けに出るほど愚かではないはずだ」

「彼女たちならやりかねませんよ」

「その時は拍手で讃えるさ」

ジョニィは大げさに手を叩いてみせる。

「一つ確認しておきますけど、ジョニィさんは本当に今回の『黒の挑戦』の内容を知らないんですよね？」

「ハハッ、オレを疑っているのか？　それならオレの名前を思い出せ。『法執行官』のジョニィ・アープ様だぜ？　その名前が示す通り、オレはルールには厳しい男だ。この国のことわざで『Call may say die』ってやつさ」

「それはことわざじゃなくて、四字熟語です。正確には『公明正大』です」

「とにかく最初に云ったように、オレは事件の中身を何も知らない」

「では今のうちに、判明している事実について、情報共有しておきましょう」

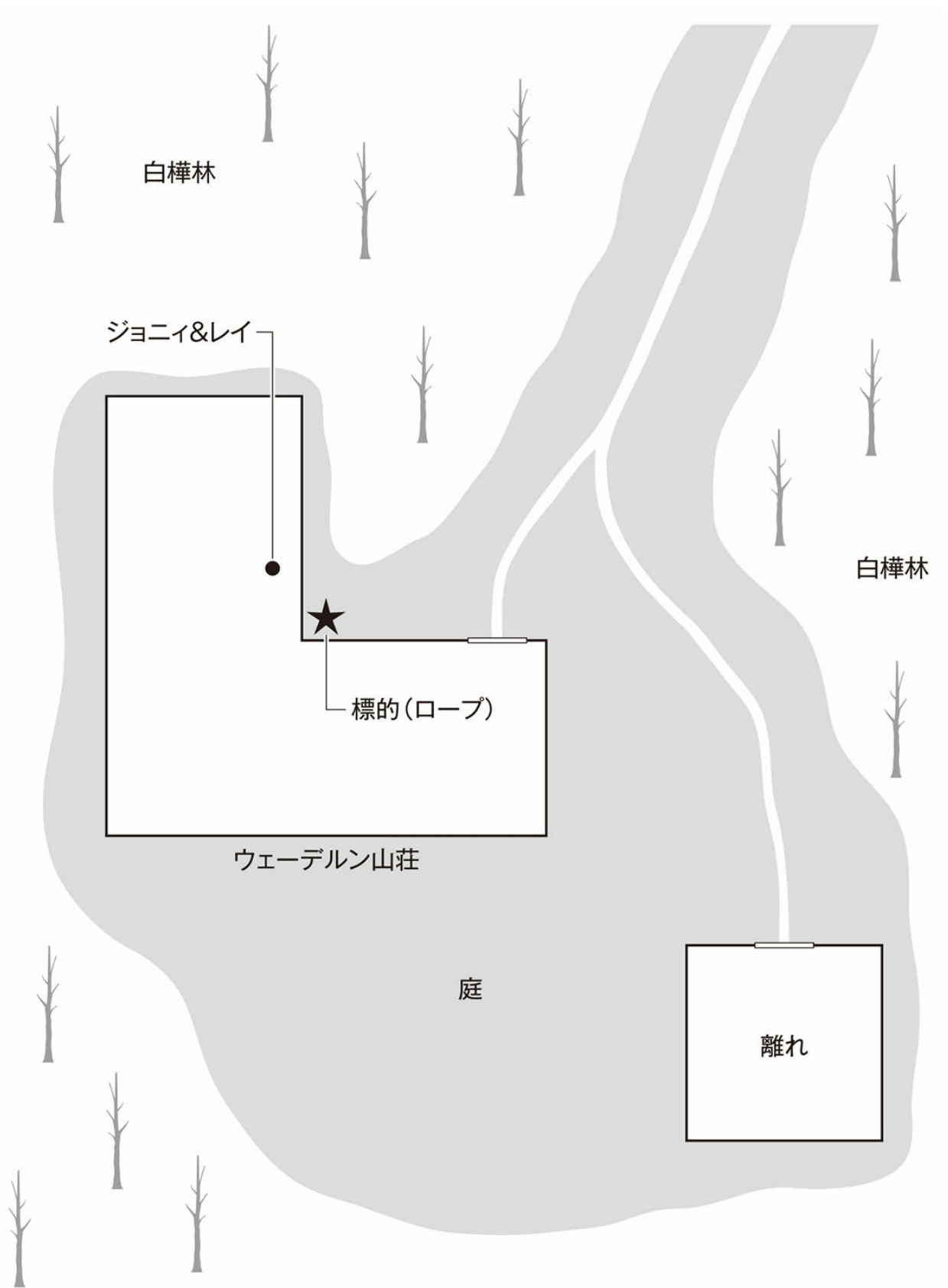
「情報共有？　新手の四字熟語か？」

「あるいは——ブリーフィングという名の解決編です。このあと事件がどのように展開するのか、お互いの推理をすり合わせておいた方がいいと思うんです。何しろ相手は響子さんと結さんの二人組ですから

ね。僕たちも足並みを揃えておかないと、文字通り足元をすくわれますよ」
「対戦相手へのrespectを忘れないその姿勢、まるでオレみたいで嫌いじゃないぜ」
「では、まず犯人についてですが――」
「赤いスキージャケットを着たやつだろ？」
「僕もそう考えます」
「『凶器』のロープは隣の部屋にあったぜ」
「隣の部屋の窓の外でしょう？」
「exactly」
「屋根から垂れさがった状態で凍りついている？」
「yes.　見た目はほとんどつららだ。長さはおよそ１フィート（約30センチ）。幅はせいぜい１インチ（約２・５センチ）。氷に覆われているせいで、一見ロープだとわからない」
「一つだけ不自然に大きなつららがあるので気になっていました」
「山荘に入る前に気づいていたのか？」
「便利な双眼鏡を持っていますから」
「完全に凍りついたロープなら釘だって打てるし、フルスイングで頭部に叩きつければ致命傷を与えることもできる。鈍器としては特殊警棒に近い」
「ロープを使って絞殺するのではなく、撲殺するのですね」
　御鏡とジョニィは『ウェーデルン山荘』殺人事件をこう推理する――
　委員会が用意したその奇妙な凶器を、犯人は事前に屋根から取り外して室内に隠しておく。この気温ならすぐに溶けて使い物にならなくなるということはないだろう。
　その後、標的を部屋に呼びつけ、隙をみて撲殺する。
　次に用いる手札は『足跡』トリックだ。
　犯人は被害者を殺害したあと、靴を脱がす。そうして手に入れた靴を、今度はスキー用ストックの先端に履かせるようにして固定する。固定する方法は紐でもビニールテープでもなんでもいい。
　これで長さ一メートル程度の靴スタンプができた。さらにストックの長さを延長するために、別のストックを結びつけていく。片足につきストック三本もあれば充分だろう。
　犯人はこの靴スタンプを、二階の窓から地面の雪面に押しつけていく。ちょうど被害者が一人で裏口を出て、軒下を歩いていったかのように、足跡を偽造するというわけだ。
　足跡が完成したら、スタンプを分解し、靴を被害者の足に戻す。
　あとは屍体(したい)を窓の外へ突き落とせばいい。

そして最後に、屋根に残ったつららや雪をストックでつついて、屍体めがけて落とせばトリックの完成だ。
　これにより『被害者は裏口を出て一人で軒下を歩いている最中に、不幸にも屋根から落ちてきたつららの直撃を受けて死亡した』という構図ができあがる。
　見立てのうえでは偶発的な事故死だ。はたしてそんな事故が起こり得るのかと疑惑が生じるのは当然だが、事実寒冷地では屋根から落ちた雪やつららが事故を引き起こす例がある。地元の人間にとっては、軒下が危険な場所であることは常識だ。しかし都会から来たスキー客にとってはどうだろう。その無頓着ぶりが招いた事故だった——と結論づけられたとしても、不自然とは云えない。そもそも屍体周辺には、本人以外の足跡が存在しないので、誰かが殴って殺したとは考えにくい。
　事故にみせかけるという手法自体は、第一の殺人ではとくに効果的と云える。何も知らない客人たちは、まさかそれが殺人事件だとは疑いもしないだろう。探偵だけが疑惑の目を向けるはずだが、挑戦状に書いてある『凶器』と、被害者の死の状況が一致しないことに困惑するに違いない。ひょっとすると本当にただの事故なのではないかという考えに囚われることになる。
　事件解決の鍵になりそうな物証があるとすれば、犯行後、犯人の手元に残された『凶器』だ。おそらく血痕も付着している。
　しかし探偵がその存在に気づく頃にはもう、犯人の手によってそれは暖炉の中に投げ込まれているだろう。
「僕以外はみんなスキーバッグを持っていましたが、赤いスキージャケットの男だけ、ストックを複数揃えていました。犯人はあの男で間違いないでしょう」
「コストの割に簡単なトリックだと思わないか？」
「メインはもう一つの『密室』の方でしょうね。コストの面からみてもそれは明らかです。けれど第二の殺人以降に関しては、我々の狙撃戦とは無関係なので、答え合わせの必要は——」
「この建物の近くにある『離れ』を見たか？　見た目は普通の山小屋みたいだが、たぶんあれ、全部氷でできてる。いかにも委員会っぽい派手な『密室』になりそうだぜ」
「ああ、もう」御鏡は不機嫌そうにため息を零す。「それって重大なネタバレじゃないですか。せっかくの『密室』がもったいない。これからゆっくり考えるつもりだったのに」
「情報共有とか云い出したのはそっちだろ？」
「楽しみはあとにとっておく方なんです」
　御鏡は口を尖らせた。
　この狙撃戦は、『黒の挑戦』を阻止するために介入しようとする『攻撃側＝霧切チーム』と、滞りなく

進行しようとする『防衛側＝ジョニィチーム』とに分かれて行なわれる。
　もし当初の計画通り第一の殺人が行なわれ、被害者が出た場合、その時点で『事件を未然に防ぐ』という霧切たちのチャレンジは失敗となり、ジョニィたちの勝利となる。そのため、第二の殺人以降は消化試合でしかない。御鏡はその消化試合で遊ぼうと考えていたが……
「響子さんたちも当然、『足跡』トリックの方が第一の殺人だと推理するでしょう。挑戦状に記されている順番が関係あるかどうかはわかりませんが……論理的に考えれば、『足跡』トリックは雪がやんだ直後、なるべく地面が踏み荒らされていないタイミングで行なわれる必要がありますからね。事故死に見せかけるという内容から考えても、全員が疑心暗鬼になっていない段階で行なわなければ効果がありません」
「小鹿ちゃんたちがそこまで推理を組み立ててくると思うか？」
「ええ。間違いなく」
「good……結論は導かれた。彼女たちが一発の弾丸でこの『黒の挑戦』全部を台無しにしようとするのなら、狙う場所は一つしかない」
　犯人を狙撃すれば終わる話だが、彼女たちが人を撃ち殺してまでゲームに勝利しようとする可能性はゼロに等しいだろう。
　だとすれば――
「『凶器』の破壊――外のつららですね」

白樺林
ジョニィ&レイ
白樺林
標的（ロープ）
ウェーデルン山荘
庭
離れ

ふたたび、現在――AM 06:30

　御鏡は窓の外を確認する。

　ジョニィの予告通り雪は今にもやみそうなほど小降りになり、遠くまで見通せるほど周囲が明るくなってきた。しかし相変わらずの曇天で、さわやかな夜明けとはいかないが、狙撃には申し分ない天候だ。

　ジョニィはいつの間にかスキーバッグから取り出した銃を、例の座り射ちの姿勢で構えていた。高精度スコープを載せたスナイパーライフルを構える彼の姿は、彫刻のように完成されていて、呼吸の微動を感じさせないほど静止していた。もはや完璧な静けさといってもいい。彼という存在が銃とセットになることで、本来の姿を取り戻したかのように、静寂を身にまとっていた。

　弾丸はすでに装填されており、指先はトリガーガードにかかっている。

　霧切たちが標的とするであろう『凶器』は、隣室の窓の外にある。ジョニィはそちらの部屋を狙撃ポイントには選ばず、一つ隣の部屋に留まった。

　その理由についてジョニィは特に説明しなかったが、御鏡にはおおよそ推察できた。隣室の窓のすぐ前には大きな白樺の木が立っていて、正面視野が十パーセントほど覆われる。そのため少しでも広く視野を確保するために、あえて隣の部屋の窓を選んだのだろう。

　他にも幾つか理由は考えられる。隣室はこのあと犯人が『凶器』を調達するために訪れることになっているので、ジョニィたちが占領するわけにはいかない。雪がやんだ今、殺人を実行するために犯人がいつ動き出すともわからないのだ。間違っても邪魔だけはしてはならない。

　御鏡たちの目的は『黒の挑戦』を滞りなく進行させることであり、犯人に余計な疑念を抱かせないように配慮する必要がある。たとえば、外にある『凶器』をあらかじめ御鏡たちの手で回収しておき、霧切たちに狙撃されないように保護する、といった作戦は使えない。外にあるはずの『凶器』が自分以外の何者かによって移動させられているのを犯人が目の当たりにしたら、間違いなく動揺するだろう。戸惑っているうちに犯行が先延ばしになり、１６８時間のタイムリミットを迎えるなんてことになりかねない。

　霧切たちを倒すのに小細工は無用だ。

　純粋にカウンター・スナイプを決めることにだけ集中していればいい。

　しかし――

　御鏡は双眼鏡を距離計に持ち替えて、窓の外を警戒する。

　視界をゆっくりと右から左へスライドさせていく。

　依然として姿は見えない。

　そろそろ現れてもいい頃だ。

当然、彼女たちは雪山に溶け込むようにカムフラージュを施しているだろう。
それでも何かが動けば見逃さない自信が御鏡にはあった。
ところが動くものの気配一つない。風にあおられた林道の雪が、きらきらと立ちのぼっては消えていく。まるで幻影を見せられているかのようだ。
林道のさらに先を窺(かが)う。
直線上に遮(さ)るものがほとんどないので、ここは相手にとってもっとも狙撃に適した場所といえる。
だがそれは逆に、こちらからも狙いやすい場所でもある。わずかな影も見逃しようがないが、ここにも姿は見えない。
道を外れれば白樺の林だ。
隠れる場所はたくさんある。
もし木々の陰に隠れながら移動したとすれば、その痕跡が雪上に残るはずだが、辺り一面にそれらしい痕跡はない。
丘の稜(り) 線の向こう側なら、こちらからは目視できないので、悟られずに移動することができるだろう。およそ300メートル先の稜線——すなわちそのラインが接近可能な境界線と云える。
さらに建物の構造を考慮すると、狙撃可能な位置は絞られてくる。この山荘は『L』字型になっており、ロープのつららは内角近くに位置している。そのため、つららを視認できるのは内角側の開けた九十度方向のみ。それ以外の場所からは建物の陰に隠れてしまうため、そもそも狙撃ポイントにはなり得ない。
この限られた状況で、はたして霧切たちは監視をかいくぐり、標的を射貫くことができるのか——
御鏡は距離計を下ろし、肉眼で外を眺めた。
暗雲のたちこめる冷たい景色だ。
まるで風景画のようにすべてが静止している。
霧切たちの姿はない。
『黒の挑戦』は間もなく動き出す。
この状況に至ってもなお、いるべき場所に彼女たちがいない。
それはつまり。
「期待通りですか？」
「ああ、お手並み拝見だ」
その時——
外で何かが弾けた。

ほんの一瞬遅れて、遠雷のように空に響き渡る銃声。
　限りなくデクレッシェンドの。
「さあ、始まったぜ！」
　ジョニィは嬉しそうに云う。
　見ると、外の建物近くにある白樺の枝が激しく損傷し、木くずを宙に散らしていた。

――AM 06:31

「惜しい！　あと５、６センチ下っ」
　わたしは三脚で固定した双眼鏡で標的の状態を確認する。
　弾丸は白樺の枝に当たり、大きな穴をあけていた。
　残された弾丸はあと二発。
「修正するわ。次で落とす」
　霧切がライフルのボルトを引く。
　空になった薬莢が飛び出して、湯気を上げながら雪の上に落ちた。
　霧切はすかさずボルトを押し込み、二発目の弾丸を薬室へ送り込む。
　その一連の動作はなめらかで、まるで楽器を奏でているかのようだ。
　息を止め、再び射撃体勢に。
　静寂――
　引き金を引く。
　撃針が雷管を打つ。
　その間、わずか千分の三秒。
　７・６２ミリの弾丸が高速回転しながら飛び出す。
　衝撃波で粉雪がふわりと舞った。
　霧切の身体が白く包まれる。
　それは彼女の肩に食い込んだ銃床の無機質な印象とは裏腹に、あまりにも清らかで幻想的だった。

――同時

「道を開けます！」

　御鏡は素早く扉を開け放した。

　同時に、ジョニィは窓に向けていた身体を反転させ、銃を構えたまま振り向く。

　正面に敵がいないのなら――

　背後だ。

　事前に話し合ってはいなかったが、二人の息はぴったりだった。

　扉が開かれたことにより、ジョニィの銃口の先には――室内から戸口を経て――廊下を横切り――開いたままの扉からもう一つ部屋を越えて――さらに奥にある窓から外へと繋（な）がる――射線が生まれる。

　窓の向こうには白樺の丘が広がっていた。

　束（か）の間、明けの明星のごとく、雪の中に光が瞬く。

　それは狙撃手にとって導きの光。

　敵のマズルフラッシュだ。

「Lock on roll――」

　ジョニィが引き金を引く。

　ジョニィの弾丸が空気を引き裂き、対面の部屋の窓硝子に穴を開けた。そして冷たい朝の空気を切り裂いていく。

　相手のマズルフラッシュとほぼ同時の射撃ではあったが、しかし音速を超える戦いにおいて、数瞬の遅れは埋めようのない差を生んだ。

　両者の弾丸は交錯するどころか――

　その時にはもう、相手の弾丸はすでに着弾していた。

　御鏡たちの背後、建物のすぐ外で、何かが弾ける。

――同時

「命中！」

　わたしは思わず声を上げる。

　弾丸は再び白樺の枝に当たった。

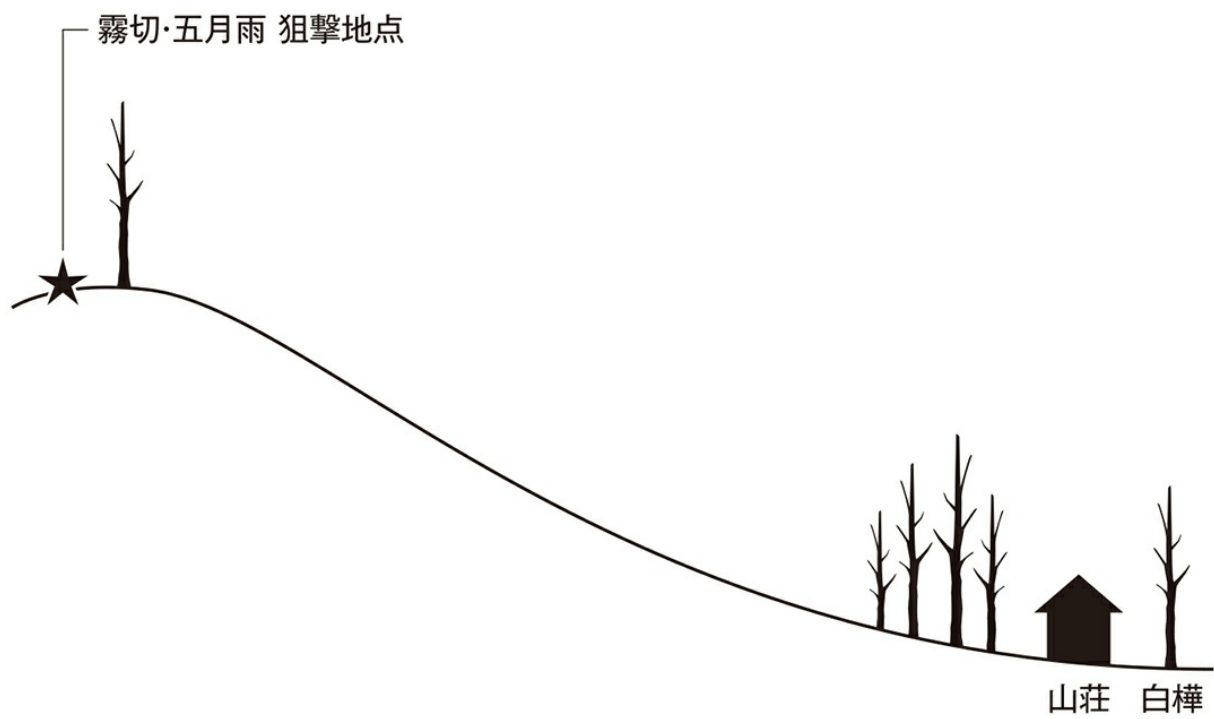
　枝の根元が大きくえぐられ、枝先が皮一枚で繋がった状態のままぶらぶら揺れる。そしてまもなく自重

に耐えられずに落下した。

——同時

　白樺の枝だ。
　論理的に考えて、彼女たちの標的がつららであることは間違いない。
　しかし建物の正面に狙撃位置を取らなかったということは、標的を直接撃ち落とすつもりがないということ。
　彼女たちは建物の裏から、つららを間接的に落とすために、白樺の木を狙ったのだ。
　建物の近くに生えている白樺を屋根越しに撃つ。屋根の上に伸びている枝を撃ち落とせば、その落下の衝撃と重みで、屋根の上の雪に雪崩を起こし、つららを落とすことができる。
　正面からの狙撃戦では太刀打ちできないと考え、彼女たちなりに作戦を練ったのだろう。建物の反対側から、いかにして『凶器』を撃ち落とすか。
　その結果、彼女たちはうってつけの白樺を発見し、見事に狙撃してみせた。
　推測通り、御鏡たちの頭上、屋根の上に何かが落ちる音がして、まもなく屋根に積もった雪が雪崩を起こした。
　ドサドサと音を立てて、つららを含む雪が地面に落ちていく。
　もはや『凶器』のロープは使い物にならなくなっただろう。
　もう勝負は決まった。
　あっけない幕切れだ。
　ところでジョニィの撃った弾は——
　双眼鏡で確認する。丘の稜線に見える白樺に着弾した様子だが、周囲に霧切たちの姿を見つけることはできなかった。
「cuteなおさげを掴んでやったぜ」ジョニィは満足そうに云って、銃をバッグにしまい始めた。「オレからの挨拶は届いたはずだ」
「本当ですか？」
「この世でオレを疑うのはオレだけで充分だ。さあ、そんなことより、レイ。銃声を聞きつけてお客さんたちが来るぜ」
　ジョニィはスキーバッグを背負うと、それまで台座にしていた横倒しの衣装棚を持ち上げ、引っ繰り返

した。
　そこに小型のスノーモービルが隠されていた。
「わあ、こんなところに」
「さあ、乗れよ。オレは女しか乗せないなんてケチなことは云わないぜ。ガキも大統領も殺し屋も、乗りたいやつはみんな乗せてやる。もちろんオレのカワイイ相棒もな」
「最後まで見ていかないんですか？　この事件がどうなるか」
「もう続かないだろ。Round1は終わりだ」
「切り替えが早いんですね」
「レイ、戦場の鉄則を教えてやる」ジョニィはスノーモービルにまたがり、エンジンキーを回した。「リロードは速いに越したことはない」
　やがてスノーモービルはジョニィと御鏡の二人を乗せて、キャタピラで床板の上を疾(しっ)駆し、山荘の裏口扉をぶち破って雪の中に消えていった。

霧切・五月雨 狙撃地点
山荘
白樺

——AM 06:32

　ジョニィが撃ってきた弾丸は、わたしたちの頭上をかすめて、近くの白樺の枝に当たったようだ。枝先が折れて、雪の上に落ちている。
「何処から撃ってきたの？　彼らの姿はまったく見えなかったのに」
「建物の窓が一枚、割れているわ」霧切はライフルスコープを覗きながら云った。「屋内から撃ってきたみたい。マズルフラッシュで位置がばれたのね。二発目を撃たれる前に、早く退却しましょう」
　そう云うと、彼女は伏せたまま後退して、安全を確保してから、身体を起こした。
　わたしたちが狙撃ポイントに選んだのは、稜線を遮蔽とする、山荘の裏側を見下ろすことができる地点だった。ここなら姿勢を低くしている限り見つかる心配はない。それでもジョニィは、霧切の銃口から吹く一瞬の炎に気づいて、こんなに近い場所を撃ってきたのだ。彼にもう少し狙いをつける時間があったら、カウンター・スナイプをくらっていたかもしれない。
　でも今回はわたしたちの勝ち。
　あのトリプルゼロクラスの探偵に勝ったのだ。
「すごいよ霧切ちゃん、わたしたちでも勝てたんだね！　あっちから勝負を仕掛けてきたわりに大したことないね。この調子なら次も楽勝かも！」
「そんなにうまくいくとは思えないわ」
「いけるよ！　だってこの二週間、手のひらが擦り切れるほど、みっちり特訓してきたじゃない。きっと霧切ちゃんの射撃の才能が開花したんだよ。あのふざけた自信家も腰を抜かすほどにね」
　わたしの賛辞に対して、霧切はさほど興味がなさそうに、いつもの無表情で銃を片づけていた。
　彼女は最後に見落としがないか周囲をぐるりと確かめる。
　ふと、雪の上に目を止めた。そこに白樺の枝が落ちていた。さっきジョニィに撃ち落とされた枝だろう。
　霧切はそれを拾いあげるなり、急に顔色を変えた。
　押し隠してはいるけれど、表情に動揺が窺える。
「何？　どうしたの？」
　尋ねると、彼女は黙ったままわたしに枝を差し出した。
　枝の表面に無数の引っかき傷のようなものがある。
　最初それは、着弾の際にできた傷かと思った。
　けれどよく見ると違う。

ナイフで彫られた文字だ。
そこにはこう書かれていた。

『NICE SHOT!!』

「何これ？」
わたしはわけがわからず首をひねる。
「彼からのメッセージよ」
「えっ……う、うそっ」
そんなはずはない。
だって、それじゃあ……彼はわたしたちより前にここに来て、枝にメッセージを彫り込んでおいたということになる。
まるでわたしたちがこの場所を狙撃ポイントに選ぶことを見抜いていたみたいじゃないか。
「ハンデのつもりかしら」霧切の表情が悔しそうにわずかに曇る。「それとも私たちを試していた？　どちらにしても傲慢ね」
「ちょ、ちょっと、どういうことなの？」
「この一回戦は練習だった。チュートリアルといえばわかりやすいかしら。次からが本番ということよ」
「れ、練習？　そんなあ……」
浮かれていた自分が馬鹿みたいだ。
考えてみれば、相手は探偵の称号における最高峰、トリプルゼロクラスなのだ。簡単に勝てる相手ではない。しかも一人ではなく、リコ＝御鏡霊というもう一人のトリプルゼロクラスがタッグを組んでいる。『OOO』に『OOO』をかけたら一体いくつになるんだろう？　そんなの学校では習っていない。
「いいわ、この一勝はありがたくもらっておきましょう」霧切は白い毛糸の帽子を取って、前髪をかきあげる。「そして次で後悔させてやるのよ。ねえ、お姉さま」
「う、うん……そうだね」
わたしは彼女の肩にかかった雪を払って、冷え切った指先をもう一度、わたしの手で包んであげた。彼女の左手の甲には、先日の事件で負った一筋の傷痕が、まだ痛々しく残っている。それが探偵として名誉の勲章だとしても、彼女の清らかな手にはあまりにも不似合いだった。
「どうしたの？　結お姉さま」
霧切の声で、わたしは我に返る。気づけばじっと彼女の手を見ていた。

「がんばったね」
　わたしは彼女の頭をぽんぽん叩く。
「まだ終わってないわ」
　霧切は銃を入れたバッグを背負い直すと、雪の中を歩き始めた。
　わたしは慌てて彼女を追いかけた。

かなり遡って——二週間と一日前

　学校近くのファミリーレストランで、わたしと霧切はテーブル席のソファに並んで腰かけた。
　放課後の時間帯、客はそれほど多くはなく、お喋りに興じる子連れの主婦とか、参考書を広げる学生とかがまばらに席を埋めている。店内はうるさすぎもせず、静かすぎもしない、居心地のいい環境だった。
　けれどわたしには、この日常風景が何処か嘘っぽくて、切り貼りされたニセモノであるかのような非現実感を覚えずにいられなかった。わたしもだんだんと、隣の彼女の世界に足を踏み入れ始めている証拠だろう。
　わたしは少し迷ってから、デザートの中でも一番値段の高いグランドパフェを注文した。霧切はコーヒーだけだった。
　テーブルに運ばれてきた巨大なパフェを見て、霧切は目を丸くした。
「……そんなに大きいの、食べられるの？」
「こんなの一瞬だって。君も食べる？」
「お腹が一杯になってしまうわ」
「じゃあ分けっこしない？　霧切ちゃんは食べたい分だけ食べていいよ。残りをわたしが食べるから」
「いらない」
「ほんとは食べたいくせに……ほら、あーんして」
　スプーンでクリームをすくって、霧切の口元に運ぼうとする。彼女はそっぽを向いて断固拒否の姿勢だ。

「相変わらずですね、お二人とも」

　声に気づいて、正面を見ると、テーブルを挟んだ向かいの席に、いつの間にかリコが座っていた。

「リコ！」
　わたしは驚きと戸惑い、それから再会の嬉しさと、ちょっとの怒りが入り交じった複雑な感情で、彼の名を呼んでいた。
　彼はいつものようにお澄ましさんの恰好をしていて、独特ないい香りがした。彼がそこにいるだけで、何故だかこの場所が周囲とは別の次元に包み込まれたような空気になる。霧切にもそういう雰囲気があるけれど、リコはもっと異質だ。
「お二人の間に座ってもいいですか？」
「こっちに君のスペースないから」わたしはぴしゃりと云う。「そこに座ってなさい」
「はーい……」
「どういうつもりなの？」
　霧切はいっさいの感情を殺したような顔つきでリコを見据えて云った。
　一方、リコは穏やかな笑みを浮かべてそれをやり過ごす。
「ラブレター、届いたみたいですね」
「百年の恋も醒めたよ」
　わたしはバッグからピンク色の封筒を取り出して、彼の前に投げるように置いた。
　消印は近所の郵便局。そこまで来たのなら直接届ければいいものを、わざわざ郵便ポストに投函したのだろう。宛名は五月雨結、わたし。送り主の名前は、ジョニィ・アープ。子供が書いたような、いびつなカタカナで書かれている。
　封筒の中には便箋が一枚。

『拝啓
　トンビがタカを生む季節になりましたね。
　さみだれ様はお変わりなくお過ごしでしょうか。
　さて、来たる一月二十日、あなたの学校近くのファミレスに集合してください。

かしこ
ジョニィ・アープ』

　手紙が届いたのは昨日、十九日。

龍造寺月下との戦いからわずか一週間しか経っていないのに、早速次のトリプルゼロクラスからお誘いが来たというわけだ。
　確かにジョニィは、別れ際に『手紙を送る』と云っていたけれど……
　ジョニィ・アープといえば、ワイルド系のハンサムなアメリカ人で、見た目から女子人気も高い。捜査機関の間では『法執行官』と称され、人狩り能力の高さでも有名だ。公的に銃の携帯が許可されているという特殊な立場の人間でもある。
「想像していたよりも、はるかに変な人みたいね。ジョニィ・アープって」わたしはため息交じりに云う。「このふざけた文面は何？　いろいろ間違ってるし……ツッコミ待ち？」
「彼なりに心を込めたつもりでしょう。わざとじゃないんですよ。天然っていうんですか、素でこんな感じです」
「へえ、そう。オモシロガイコクジン枠？　お気の毒に。そんな面倒そうな相手とのチームなんかとっとと解消して、こっちに戻ってきたら？」
　冗談めかして云うと、リコは急に哀しそうな顔で俯いた。
「……戻りたいって云ったら、結さんたちは僕を受け入れてくれますか？」
「えっ？　本気？」わたしは予想外の返答に驚く。「ど、どうしようかなあ、ねえ、霧切ちゃん」
「結お姉さま、だまされないで。リコは楽しんでる」
「ふふっ」
　リコは悪戯っぽく笑う。
　ああ、もう、うっとうしい。彼もまた、人智を超えたトリプルゼロクラスの一人なのだ。普通の感覚で彼を理解することも、共感することもできるはずがない。
「それで」わたしは苛立ちを隠さずに云う。「ジョニィ・アープは何処？」
「もうすぐ来ます」
　彼がそう云うと同時に、わたしの背後、店の奥の方から、盛大に硝子の砕け散る音が聞こえてきた。まるで爆発でも起きたような音だ。
　振り向くと、道路に面した大きな窓硝子が割れ、そこに黒い大型バイクが突っ込んでいた。
　店内の客たちは騒然とし、遠巻きに様子を窺う。バイクは獣の唸り声のようなエンジン音を上げていた。見たところ衝突に巻き込まれた客はいないようだ。排気ガスの臭いが周囲に立ち込め始める。
　デニムのジャンパーを着た背の高い男が、エンジンを切ってバイクから降りた。ヘルメットを脱いでその場に放り出す。ブロンドで青い目の外国人。
　紛れもなくジョニィ・アープだ。

「だ、大丈夫ですか？　お怪我は？」
　ウェイトレスが彼に駆け寄って尋ねた。
「I'm　fine」彼はウェイトレスの手を取ってキスをする。「オレのために熱いコーヒーを淹れてくれ。それからフライドポテトを頼む。塩は多めに」
「か、かしこまりました……」
　ウェイトレスは顔を赤らめながらそそくさと厨 房へ戻っていった。
　ジョニィはわたしたちに気づき、手を上げながら悠然とテーブルに近づいてきた。できることなら近づかないでほしかった。
「待たせたね」にっこりと笑って云う。「そこに座ってもいいかい？」
　ジョニィはわたしと霧切の間を指差す。
「冗談だよ」
　すぐにそう云って、リコの隣に腰かけた。
　霧切と対峙する。
　一瞬の沈黙が何時間にも感じられるような、張り詰めた空気。
　けれどジョニィは気にする様子もなく、外国のホームドラマに出てくる父親みたいな笑顔で、霧切のことを指差して、云った。
「そのリボン、カワイイね」
「私たちを呼び出した理由は？」
　霧切は無表情で本題を切り出す。
　ジョニィは肩を竦めて、やれやれというようにリコに目配せした。さすがに霧切相手では、自分の思い通りのペースにはならないようだ。
「ほら、前に云ったろ。ゲームをしようって。その準備が整ったんだ。題して――ジョニィのゲーム『shoot down the angel』だ！」
「また人の命をもてあそぶゲームですか」
　黙ったままの霧切に代わってわたしが尋ねる。
　ちょっと前のわたしなら、あのジョニィ・アープを目の前にして怖気づいていたと思うけど、今は不思議と落ち着いていた。
「そんなに難しそうな顔をするなよ。ゲームとは本来楽しいものだろ？　楽しくて、面白くなきゃあ、ゲームじゃない」ジョニィは云いながら、テーブルの上のコーヒーを勝手に飲んだ。「なんだこりゃあ……随分砂糖を入れたな。ブラックにはまだ早すぎたか、キョーコ」

「今まであなたたちには散々な目に遭わされてきました。それなのに『ゲームをしよう』と云われて、はいやりましょうなんて云うわけないじゃありませんか」
　わたしは早口でまくしたてる。
「『あなたたち』とは？」
「犯罪被害者救済委員会です。あなたも幹部の一人でしょう？　今さらごまかしたって無駄です」
「確かにオレは委員会の仕事を引き受けてはいるが、彼らの意思で今ここにいるわけじゃない」
「えっ？」
「そもそもオレは彼らの宗教にはまったく興味がないよ」
「宗教って……」
　委員会をそんなふうに表現する人は初めてだ。確かに彼らは一人のリーダーを頂点とするカルト集団と云えなくもない。
「君たちがどう考えているかは知らないが、犯罪被害者救済委員会は結局のところ、ミカドの純粋なspiritが肥大して、この世に形状を獲得した単一の構造体にすぎない。そこには他の何者の意思も意図も介在せず、組織の人間はすべて、ミカドの脳をmasterとするslaveでしかないのさ」
「云っている意味がよくわかりませんが……委員会と無関係だというのなら、あなたは敵ではないんですか？」
「率直な質問だね。そういう真っ直ぐなところ、オレは好きだな、sweetheart」
　ジョニィは頬杖をついて流し目を送ってくる。
　一瞬、どきっとしたけれど、わたしはにらみ返してそれをやり過ごした。
　そこにウェイトレスがコーヒーとフライドポテトを運んできた。ジョニィはチップだと云って、百ドル札を彼女に握らせた。
「あの……あちらのバイクはいかがいたしましょう……」
「そのまま少し休ませてやってくれないか」
「かしこまりました」
　ウェイトレスは頭を下げて戻っていった。
　周囲の客たちはちらちらとこちらを窺いつつも、店を出て行く様子はなく、平然とさっきまでの日常風景を続けている。特に危険はないと判断し、和を優先することにしたのだろう。異様な光景だった。
「君たち少女二人と、委員会のミカド、どちらを応援するかと云われれば、もちろん君たちの方だね。そういう意味では、むしろオレは、君たちの味方と云ってもいいんじゃないかなあ」
「そんなの信じられません！」

わたしはすかさず返す。今さらそんなこと云われても、信用できるはずがない。
「ハハッ、信じられないってさ、レイ」
ジョニィは笑いながらリコの方を向く。
リコは肩を竦めて、困ったような顔をした。
「お二人が今まで出会ってきた探偵や、事件の数々を考慮すれば、当然の反応です」リコは云う。「でも考えてもみてください。ジョニィさんはともかく、僕が委員会の命令で動くような人間だと思いますか？　僕が今ここにいること——それ自体が、委員会とは無関係だということの証明です」
「う……確かに……」
何処の組織にも属さず、ただ自由に謎解きをするためだけに姿を隠してきた彼が、今さら委員会に与するとも考えられない。
彼らが味方だというのは本当なのだろうか。
わたしはあらためて、テーブルの向かいに並んで座る二人の男を観察する。
どちらも無邪気な笑顔でにこにこしていた。
——やっぱりまったく信じられない。
「味方だっていうのなら、なんのためにゲームなんかするんですか」
「おかしなことを訊くね」ジョニィは食べかけのフライドポテトでわたしを指すようにしながら云う。「友だち同士だってゲームくらいするだろう。ゲームはそれ自体、楽しむためにするものだ」
「目的は？」
霧切が短く尋ねる。
「だから、ゲームを楽しむのが目的であって……」
「僕が説明します」リコがジョニィを遮って続ける。「響子さんと結さんにはなかなか理解できないかもしれませんが、この件に関しては本当に、裏も秘密も隠し事もないんですよ。龍造寺月下のケースとは正反対だと考えてください。とてもシンプルな、たった一つの子供じみた動機——ただ一緒にゲームをして遊びたいというだけなんです」
「『子供じみた』なんて云われるのは心外だな」ジョニィが不服そうに口を挟む。「pureな駆け引きを楽しめるのは大人の特権だよ。そもそもゲームとは高度な知的生命体にのみ許されたものであって——」
「ね、わかったでしょう？　こういう人なんです」
リコは小さく両手を広げる。
なるほど……なんとなくジョニィ・アープという男のことがわかってきた。『素でこんな感じ』なのだ。
「委員会と関係ないなら、戦う理由もないわ」

霧切は無表情でそう云って、立ち上がろうとする。いつになく淡白でそっけない。

　ジョニィは慌てて彼女を押さえるようなしぐさをした。

「wait,　wait——当然そう云うだろうと思って、素敵な賞品も用意している。年頃の女の子は欲しがりで困るよ。賞品は何かって？　今、君たちが一番欲しがっているものだ」

「欲しがっているもの？」

　わたしは尋ねる。

「ミカドへの近道切符」

　ジョニィは上着のポケットから黒い封筒を取り出した。見慣れた委員会の封筒だけど、いつもの赤い封蠟は押されていない。

「なんですか、それ」

「中身はオレたちに勝ってからのお楽しみだ。どうだい、やる気になっただろう？」

「がっかりね」霧切は首を小さく横に振る。「私たちはそんなものに頼らなくても、自分たちの力で新仙にたどり着く。もう行きましょう、結お姉さま」

「wait, wait——」

「ほら、云ったじゃないですか」リコは薄笑いを浮かべている。「そんなものでは釣られないって」

「せめて最後まで話を聞いてくれ。君たちにもし、探偵としての誇りがあるなら——」ジョニィはとうとう立ち上がってわたしたちを押し留めようとする。「絶対にこのゲームに挑もうとするはずだ」

「探偵としての誇り……？」

「聞く気になったかい。まあ座れよ」

　わたしたちはそれぞれ座り直した。

　ジョニィはコーヒーを飲んで一息つく。

「yareyare——では、これからゲームの内容を説明するけど、その前に一つ確認だ。君たちに渡した銃は大事にしてくれているかな？」

　わたしは肯く。龍造寺月下との戦いのあとで、ジョニィがわたしたちに投げて寄越したライフルは、今寮のベッドの下に押し込んである。

「good.　拾ってきた子猫みたいにかわいがってくれ。寝る時は腕の中に抱いて眠るといい。銃は愛情を注いだ分、きちんと返してくれる——それじゃあ、レイ、あれを」

「はい」

　リコは片手にかけていた上着の中から、平べったい銀色の小さな箱を二つ取り出した。シガレットケースというやつだろうか？

二つの箱をテーブルの中央に並べる。
リコは宝箱でも開けるみたいに、片方の箱をそっと開けた。
中には先端の尖った単四乾電池のようなものが九本、並んでいた。わたしにはすぐにそれがなんなのかわかった。
弾丸だ。
「.308ウィンチェスター弾。ごく一般的なライフル弾だ。もちろん君たちの持っている銃で撃つことができる」
ファミレスのテーブルに置かれた弾丸は、コーヒーとフライドポテトの間にあって、妙に違和感なく溶け込んで見えた。
「おおよそ見当はついただろう。このゲームでは、銃と弾丸を使う。そう、狙撃戦だ」
「ちょっと待ってください。そんなのゲームとは云えません」わたしは声を上げる。「あなたは銃のプロでしょう？　こっちは素人です。小学生がメジャーリーガーと試合するようなもので、勝負になりません」
「彼女は、撃てる」ジョニィは霧切を指して云う。「そうだろ？」
「ええ」
霧切は肯く。
「き、霧切ちゃん……」
「説明を続けて」
「good.　それではルールを説明しよう！」ジョニィは興奮気味に云う。「このゲームは観測手と狙撃手、二人一組のチームで戦う。もちろん君たち二人はチームメイトだ。異存は？」
「ないわ」
「good. こっちはオレとレイのチームだ」
「ふふっ、負けませんよ」
リコはわざとらしい笑みを浮かべて云う。
「ゲームの舞台は、これから行なわれる『黒の挑戦』の現場だ。たとえば孤島、たとえば閉ざされた館——そこでは数人の男女が集まり、今まさに殺人事件が起きようとしている。殺人犯は彼らの中の一人。その人物は犯罪被害者救済委員会からトリックを買い、復讐に臨もうと、息を殺してその瞬間を待っている。もちろんコストに見合った探偵も召喚されているだろう」
「わたしたちが探偵役ではないんですか？」
わたしは尋ねる。
「そう、君たちはまったくの部外者だ。同様にオレたちも部外者。その点が、このゲームの面白いところ

だ」
　ジョニィは楽しそうに云う。
　わたしには何がどう面白いのかわからない。
「説明を続けよう。これから数日後、君たちのもとに『黒の挑戦』の挑戦状が届く。君たちにとってはお馴染みの展開だが、いつもとは違う点が一つある。文面に君たちの名前はなく、召喚されている探偵役は見知らぬ誰かだ。さて、君たちならどうする？　自分には関係ないから見過ごすか？」
「これから起きようとしている殺人事件を見過ごせるわけがないでしょう」わたしは即答する。「手元に挑戦状があるのなら、書かれている現場に向かうことができますし、文面から事件の手口を推理することもできます。ルール上の探偵役ではないけど、探偵として事件に臨むことはできるはずです」
　それに委員会の事件を解決することは、彼らに近づく一歩にもなる。
「いい答えだ、sweetheart.　しかし一方その頃、同じ挑戦状が、オレたちのところにも届く。挑戦状の中身を知るのは、オレたちもこの時が初めてだ。まずはお互いに、これから起きる事件について推理するところからゲームが始まる」
「挑戦状の中身を知るのが初めて？　そんなことってあり得るんですか？　あなたは委員会の人間なのに」
「何もおかしくはないよ。委員会におけるオレの役割は、主に事後処理だ。ルールから外れた者や、ゲームに負けた者を裁く。事件の中身なんか知らなくても掃除屋は成り立つんだ。まあこればっかりは、『法執行官』の名にかけて、不正はないと信じてもらうしかないがね」
「わかりました。続けてください」
「now　then――勝負はここからだ。『黒の挑戦』を推理すること自体は、君たちもだいぶ慣れてきて、今となってはもう造作もないことだろう。君たちは探偵として、さっそうと事件現場に現れる。だがそれは犯人にとってはいい迷惑だ。敵が増えるんだからな。どう考えてもフェアじゃない。そこでオレたちの登場だ。オレたちは犯人の守護天使として事件に臨む」
「犯人の味方をするってことですか？」
「そう、まさにそういうことだよ、sweetheart.　だが勘違いするなよ。別に委員会のために犯人を守るんじゃない。あくまでゲーム上の立場だ。赤チームと青チーム。君たちが事件を未然に防ぐために現場に介入する『攻撃側』チームだとすれば、オレたちは現場から邪魔者を排除して事件の円滑な進行を見守る『防衛側』チームってことになる」
「だいたい理解したわ」霧切が云う。「でも事件を未然に防ぐだけなら銃はいらない。あなたの望むような狙撃戦にはならないと思うけど」

「その通り。おそらく君たちなら、先回りして犯人を拘束したり、トリックが作動しないように細工したり、実に冴(さ)えたやり方で犯行を未然に防ごうとするだろう。だが今回のゲームのテーマはあくまで狙撃だ。一発の銃弾によって、運命を決める戦いにしたい。そこでだ、レイ」
「はい」
　リコは上着の中から、小型ラジオのようなものを四つ取り出して、テーブルに並べた。そのうち二つは赤いビニールテープが巻かれ、もう二つは青いビニールテープが巻かれている。
「これはビーコンだ。チームごとに色分けしてある。一人一つずつ、ゲーム中は常に携帯すること。手放したり、何処かに隠したりするのはルール違反とする」
「なんなんですか、これ」
「両チームの距離を知らせる機械だよ。同じ色のビーコン同士はとくに反応しないが、赤と青、色の違うチーム別のビーコンが２００メートル以内に近づくと、音と光で知らせるように設定されている。点灯するＬＥＤの位置で、相手がいる方角もだいたいわかる。これがどういう意味かわかるね？」
「２００メートル以内に近づけばあなたに撃たれる」
　霧切が表情を変えずに云う。
「exactly.　それではいよいよ勝利条件について説明しよう！　君たちの勝利条件は、『黒の挑戦』による事件を未然に防ぐこと！　それだけだ。挑戦状に予告された殺人をとにかく一つでも完遂不能に陥らせることができたら勝ち。手段は問わない！　つまり何を撃ってもいい」
「犯人を撃っても？」
　霧切が尋ねる。
「もちろん。できるのなら」ジョニィは笑って云った。「ただし使用できる弾丸は三発までだ」
　ジョニィはシガレットケースから弾丸を三つ手に取る。それぞれ弾丸の先端に薄く色が塗ってある。
　赤、青、黄。
「本来ならone shot one killの戦いにしたいところだが、君たちのために三発までとした。色がついているのは、お互いに不正がないようにするためだ。着弾した場所から弾丸を掘り出せば、それが何発目の銃弾かわかる仕組みになっている。もちろん、いちいちそんな面倒な確認をするつもりはないが、ルールはルールだ。三発以上撃てばすぐにばれると認識しておくこと。一発目に使うのが青。次が黄。最後が赤。信号機と同じだよ。赤を使うような事態にはならないことを祈るね」
「あなたたちの勝利条件は？」
　霧切が尋ねると——
　ジョニィは指で銃の形を作って、ゆっくりと霧切に向けた。

彼らの目的は、邪魔者の排除――

それってつまり……霧切を撃ち殺す？

だめだ！

やっぱりこのゲームは危険だ。

たとえ防げるかもしれない事件があって、救えるかもしれない命があったとしても……自分たちの命を危険にさらしてまでやることじゃない。

いや、たぶん彼女ならやるんだろう。

だからこそ、わたしは止めなきゃいけない。

「霧切ちゃん、やっぱりこんな誘いに乗っちゃだめだ！」

「オレたちの勝利条件は――」ジョニィはわたしの言葉を無視して続ける。「カウンター・スナイプを成功させること。カウンター・スナイプとは、敵の狙撃手を排除することだ。おっと、そんな恐い顔するもんじゃないぜ、sweetheart.　さっきから云っているように、オレたちはあくまで君たちの味方だし、委員会の意向なんて頭にない。面白いゲームをしたいだけなんだ。だから、ゲームの相手を殺すなんてことはしない」

「それじゃあ……」

「キョーコのリボンを撃ち抜いたら、オレたちの勝ちってことにしよう」

彼女の両耳のうしろあたりから垂れる、幅数センチの紫色のリボン。

これを２００メートル以上先から、小指の爪先ほどの弾丸で撃ち抜く？

そんなことが可能なのか？

いや、むしろ当てられるのなら当ててもらわなければ困る。弾丸がちょっとでも的をはずれたら、頭部をかすめることになるのだ。下手したら頭を撃ち抜くことにだってなりかねない。

「こんな危険な遊びに付き合う必要ないよ！　霧切ちゃん！」

「彼らにとっては遊びでしょうけど、殺人事件に直面する人たちにとっては、命がかかっているわ」

「そりゃあそうだけど……」

「事件を解決するのが探偵の役目」霧切は頬にかかる髪を払う。「戦う理由はそれだけで充分だわ」

彼女はごく当たり前のように云う。

けれども凍りついた表情の裏に、燃え盛る激情を隠しているのが、わたしにはわかった。

戦う理由――

探偵として生まれた彼女にとって、事件に立ち向かうことは生きることと同じだ。戦う理由など、事件がそこにあるということ以外に必要ない。

確かに今まではそうだったのだろう。

けれど委員会との戦いの中で、彼女はあまりにも多くのものを失ってきた。事件の被害者はもちろん、探偵の仲間たちや、家族……

きっと彼女は認めないと思うけど、今となってはもう、戦う理由は一つではなく、失ったことへの後悔や怒り、失われたものへの弔い(とらい)や贖(し)罪が込められていると思う。そのけなげさを表に出すことは、けっしてないけれど。

「ルール説明は以上だ」ジョニィは手のひらを伏せるようにして、テーブルの上に置く。「そうそう、一つ云い忘れた。ここに三色の弾丸が三セット、合計九発あるのを見て想像はついたと思うが、この狙撃戦は三セット勝負で行なう。テニスと同じように、先に二セット取った方が勝ち」

「わたしたちが勝ったら、新仙の情報をくれるんですよね？」

「ああ」

「じゃあわたしたちが負けたら？」

「戦う前から負けた時のことを考えるなんて、カウガールらしくないな」

「カウガールじゃありませんから。わたしたちが負けたら、何を要求するつもりですか」

「要求なんてない」ジョニィはおおげさに肩を竦める。「まだわかってもらえていないようだね。オレには金も勲章も賞状もいらない。ましてや君たちの命だとか、未来だとか、希望だとか、そういうのもいらない。楽しくゲームができたらそれでいいんだよ」

「うーん……」

わたしは思わず唸ってしまう。

このジョニィ・アープという男、かなり厄介だ。悪意や敵意をむき出しにしてかかってくるならまだわかりやすいんだけど、本当に、楽しいことがしたいという動機しか見当たらない。『黒の挑戦』を舞台に選んだのも、ただ事件をエサにして霧切を引きずり込むためだろう。自分が楽しむためなら委員会さえ利用する。それどころかボスを売ろうとさえしている。

──他人の迷惑をかえりみない、壮大な構(か)ってちゃん？

「ゲームがしたいというのなら……ゲームセンターで一緒に遊ぶっていうんじゃだめですか。銃を使ったガンシューティングとかあるし……」

「oh, いいね。それはそれで、やろう」

云うんじゃなかった。

「『黒の挑戦』はいつ届くの？」

霧切が尋ねる。

「キョーコ、その質問は参加表明と考えていいんだね？」

「いいわ」
「ちょっと、霧切ちゃん……」
「excellent!　最初の『黒の挑戦』は二週間後くらいに届くように調整しておく。それから——レイ」
「はい」
　リコは上着の中から液晶画面のついた小さなキッチンタイマーのようなものを取り出した。
「通常、探偵役が挑戦状を開封した瞬間からカウントダウンが始まるが、オレたちは探偵役ではないから、そのタイミングがわからない。そこでこのタイマーだ。探偵の封筒にあるチップと連動していて、開封されたらカウントダウンが始まるようにしてある」
「便利な道具ですね」
　わたしは皮肉を込めて云う。そんなものがあるなら、『黒の挑戦』を受け取る探偵全員に渡しておいてほしいものだ。
「カウントダウンが始まったら、それが合図だ。オレたちのゲームも同時に始まる。このタイマーを肌身離さず持っておくべきだな」
「授業中にカウントダウンが始まったら？」
「『先生、トイレ』とでも云って席を立つんだね。ハハハッ」
　ジョニィは大声で笑い出す。
　二週間後には学校を休んでおいた方がいいだろう。
「あなたが寄越した銃だけど」霧切はあくまで冷静に質問を続ける。「カスタマイズの形跡が窺えたわ。その点もフェアだと信じていいのかしら？」
「さすがだね、キョーコ。気づいたかい。あれはレミントンＭ７００、アメリカじゃありふれたライフルの一つで、おそらく五百年後の歴史家をうんざりさせることになる代物だ。何処を掘っても出てきやがる！　ってね。君たちに渡したやつは、市販されているものから、特に質のいいものを選んである。しかしそれでは不十分だ。鹿を撃つだけならそのままでも問題ないが、精度の高い狙撃をするなら、より洗練させる必要がある。たとえば撃針と引き金を中継する部品をシアと呼ぶが、これにガタつきがあったり、研磨が不足していたりすると、引き金を引いた時のキレに影響する。狙撃手を名乗る人間が出荷状態のシアをそのまま使うなんてことはしない。他にもエキストラクターをより強度のあるものに換装したり、ストックの重さを調整したり……」
「要するに？」
「要するに、女王様への献上品並みに、お行儀のいい銃に仕上がっているってことだ。尖った性能はないが、精確性は抜群」

「余計な細工をしていなければそれでいいわ」
「銃に対してオレがそんな不誠実な真似をするわけないだろ。まあ、いい。練習用の弾丸がケースの二重底に隠されているのは見つけたか？　ゲームの本番までによく訓練しておくことだ。弾丸が足りなくなったらオレに云え。用意してやる」
「訓練って……」
　そんなことしてたらすぐに通報されてしまう。
　けれど訓練もなしに彼らに勝てるとも思えない。霧切はともかく、わたしは銃というものがどういう仕組みで動いているのか、基本的なことからあまりよくわかっていないのだ。
「他に質問は？」
　ジョニィが尋ねる。
「委員会の活動の目的は？」
　霧切が訊いた。
「ゲームについての質問にしてくれよ。オレは委員会についてはあまり詳しくないんだって。ただの雇われ掃除人だぜ？」
「『黒の挑戦』による復讐劇が娯楽として一部の人間に提供されているというのは本当？」
「……この子は本当に扱いが難しい女の子だなあ。君の苦労が思いやられるよ」ジョニィは同情するようにわたしを横目に見る。「『黒の挑戦』を観覧するための権利が高値で売られているのは事実みたいだな。じゃなきゃあ、山ほどある資金の出所が説明つかない。だがそれはあくまで資金集めのためであって、本来の目的とは違うと思うぜ」
　そういえば龍造寺月下も同じようなことを云っていた。
　龍造寺月下——探偵として、誰よりも多くの人を救うことに命をかけてきた人——彼は確かこうも云っていた。
『委員会がその程度の組織だったら、我輩は初めから協力などしていなかっただろう』
　彼は彼なりに、委員会の活動に別の意味を見出していたのだと思う。彼はより多くの人を救済するためのシステムとして、委員会を利用していた。
「それなら……あなたにとって委員会とは？」
　わたしは尋ねた。
　ぜひ訊いてみたかった。
　ジョニィは迷う様子もなく、すぐに答える。
「楽しいことができる場所」そう云った彼の顔は子供のように無邪気だった。「ミカドも、Mr.ゲッカも、難し

いことを考えすぎだとオレは思うね。楽しくもないことに人生かけられないよ、普通は。そうだろ？　君は探偵をやってて楽しくないのか？」
　探偵をやってて楽しい？
　そんなの考えたこともない。
　むしろつらくて大変なことの方が多い。
「そもそも探偵って、楽しいかどうかでやることじゃないと思います」
「oh……見た目のまんま優等生発言するんだね、君は。なんてこった。いいかい、眼鏡の優等生君。楽しくなきゃ探偵なんかやる必要ないんだよ。謎を解くのが楽しい。犯人を捕まえるのが楽しい。誰かを助けるのが楽しい。それでいいし、それがすべてだ」
「人の命がかかっていても？」
「だからこそ楽しいんだろ？」
　ジョニィは当然のように云う。
　楽しいだけで探偵が務まるはずがない。探偵が呼ばれる時、必ず誰かが泣いている。哀しんでいる人がいる。その状況を楽しめるのだとしたら、探偵にふさわしい倫理観とは云えないと思う。
　それでも少し……わたしはその感覚がうらやましくも思えた。心の底から「探偵をやってて楽しい！」と云ってみたい。
　でも……振り返った時に、たくさんの屍体が横たわっているのを見てもなお、そう云えるだろうか。
「新仙帝(か)もあなたと同じタイプですか？」
　尋ねると、ジョニィは小さく肩を竦めた。
「彼の考えていることはオレにはよくわからないね。ただ、謎を解く時の彼は楽しそうだった。密室とか、暗号とか、そういうものが彼にとっておもちゃみたいなものなんだろう。オレにとって銃がそうであるようにね。その点では、似た者同士かもしれないな」
「新仙は霧切ちゃんを敵と考えているみたいですけど、何故なんです？」
　それについて、ある人はこう云っていた。
　霧切の名を襲名するはずだった新仙は、霧切響子が生まれたことで梯(し)子を外されたという。彼はかつて、霧切響子の祖父、霧切不(ふ)比等(と)の弟子(し)にして相棒だった。本来なら、彼が霧切の名を継ぐはずだったのに……
　ただしそれは、ある側面からみた一方的な推測にすぎない。新仙本人が云っていたことではないので、実際のところはわからない。
「何故、キョーコを狙うかって？　そりゃあ、カワイイからじゃない？」軽い調子で云う。「ハハハ、冗談だ

よ。いやいや、カワイイというのは冗談ではなくて――というか、そもそも彼がキョーコだけを特別狙っている
ふうには見えなかったけど？」

「え？　そうなんですか？」

「あれだけの規模の組織が、たった一人の女の子をいじめるために存在しているなんて馬鹿げてるだろ。それに委員会ができたのは十年くらい前だ。その頃、キョーコは探偵としてもよちよち歩きのヒヨコちゃんで、ちょっかいかけるにしても手応えなさすぎるだろう？」

　うーん……わからなくなってきた。

　新仙は何を目指しているのだろう。

　犯罪被害者救済委員会はなんのためにあって、何処へ行こうとしているのか。

「――ジョニィさん、まだゲームで負けたわけでもないのに、情報を与えすぎじゃありませんか？」

　横からリコがツッコミを入れる。

「おっと、そうだな。このままだとうっかり、賞品の中身まで喋ってしまいそうだ」

「リコ、余計なこと云わないでよ」

　わたしは口を挟む。

「ズルはいけませんよ、結さん」

「君は味方なの？　敵なの？」

「さあ？」

　リコはとっておきの笑顔で首を傾（かし）げてみせる。

「さっき味方だって云ってたじゃない」

「ジョニィさんは、ね」

「そうだよ。オレは味方だ」

　ジョニィもとっておきの笑顔で応じた。

　厄介者が二人、意気投合してしまったということか。

「さて、それじゃあオレはガールフレンドと予定があるからそろそろ出るけど……」ジョニィは腰を浮かしながら、最後にコーヒーに口をつける。「ん？　待てよ、一ついいアイディアを思いついた」

　そう云って椅子に座り直した。

　どうせろくなことじゃない。

「このゲーム、何かが足りないとずっと感じていたんだが、それがようやくわかった」

「……なんですか？」

「緊張感だよ。お互いになんのリスクもなく、部外者として事件に携わり、安全地帯で一（いっ）喜一憂するだ

け……さすがにゲームだからといっても、それじゃあ温すぎる」
　ああ、嫌な予感――
「こうしよう」ジョニィは赤色の弾丸を一つ手に取った。「三発目の赤い弾丸だけは、お互いを撃ってもいいことにしよう」
「はあっ？　そんなの、そっちにだけ有利な条件じゃないですか。そもそもこっちは人を撃つつもりなんてないんだし！」
　わたしは声を荒らげる。
「いや、むしろ君たちにとっては救済措置と云えるんじゃないか？　君たちは多くの標的の中から最適かつ決定的な獲物を見つけ出さなければならないが、『黒の挑戦』の状況によっては、そういう標的が見つからない可能性だってある。見つけたとしても狙撃するには難しすぎるかもしれない。そういう時は、ビーコンを頼りにオレを見つけ出して撃てばいい」
「あなたを撃ち殺せっていうんですか？」
「殺せとまでは云わないけど、戦闘不能にしたらクリアってことでいいよ」
「銃を破壊した場合は？」
　霧切が尋ねる。
「オレが予備の銃を持っていないとでも？」ジョニィは不敵な笑みを浮かべる。「オレを戦闘不能にしたいのなら、致命的な一撃をくわえるしかない。云っておくが、オレは足の指一本あれば、引き金を引けるからな」
　結局のところ、殺すしかないということか。
「さあ、時間だ」ジョニィはパンパンと合図のように手を叩きながら立ち上がると、ポケットから百ドル札を出してテーブルの上に置いた。「釣りはいらないよ」
　彼はそう云って、バイクのところへ歩いていく。それに跨（た）るかと思いきや、バイクの横にネットで留めてあったスケボーを下ろし、店内をすいすいと滑って正面の入り口へ向かった。
　そこで振り返って、わたしたちに向かって親指を立てる。
「Good luck!」
　そう云って、自動ドアから外へ出ていった。
　わたしを含めて、店内にいる客たち全員が、彼のうしろ姿を呆然と見送った。
「なんていうか……さすがトリプルゼロだね。ダブルの人とは違って太っ腹」
　わたしはテーブルの百ドル札を手に取った。あとで両替しなきゃいけないけど、これで心おきなくパフェを食べられる。

「あの人についていかなくてよかったの？　リコ」

「ええ。もう少しお二人と話がしたくて」

「そんな気もないくせに」

「会えるのはこれで最後かもしれないんですから」

　リコはいつもと変わらない柔らかな微笑みを浮かべて云う。

「それ、どういう意味？」

「そういう生き方をしている十二歳も世の中にはいるということですよ」

「ふうん……」わたしは話半分に聞き流す。「それよりも一つ気になったんだけど……『レイ』って呼ばせてるんだね」

「他の呼び方が気に入らなかっただけです」

　少しすねたような顔でリコは云った。あるいは恥ずかしがっているのかもしれない。

「ねえ、リコ」霧切が珍しく問いかける。「このゲームが終わったら、どうするつもりなの」

「……わかりません」

「ジョニィ・アープとズッコケ保安官ごっこを続けるつもりはないんでしょう？」

　わたしが尋ねると、リコは苦笑した。

「行くあてがないなら、わたしたちのところに戻ってきなよ。怒ったりしないから」

「そういうふうに云ってくれる人が僕にもできたんだと思うと嬉しいです。でも……そんな未来は僕には描けません」

「どうして？」

「お二人は探偵として、これから先もずっと、才能を維持し続けられると思いますか？　あるいはこれからも探偵として成長していけると思いますか」

「うーん……どうだろう。というかそもそもわたしにはたいした才能なんてないし……でも霧切ちゃんはこれからもずっと探偵だと思う」

「響子さんは、そうでしょう。でも僕はたぶん、そうじゃない」

「違うの？」

「自分にとって才能のピークは今で、これから先は過去以上の何ものも得られない――僕にはそんな予感がするんです。いえ、予感というよりは、もっとはっきりとした……予測ですね。この僕が予測するということは、それは真実と云ってもいい」

「そんな……」

　リコがそんなふうに悲観的なことを云うのを初めて聞いた気がする。

それとも、いつもの気まぐれ発言だろうか？
「子供の頃に使えた魔法は、大人になるにつれ使えなくなっていくものです。それが嫌なら、死ぬしかありません。たとえばそう……十代で数学史に名前を残し、二十歳で死んだガロアのように」
「まさか自殺でもするつもり？」
「とんでもない。ガロアは自殺なんかしていませんよ。一人の女性を巡って決闘し、負傷した際の傷が原因で死にました」
「……君も決闘で死にたいわけ？」
「結さんがその女性の役をやってくれるのなら」
　そう云って、彼はいつものように柔らかな笑みを浮かべた。
　彼らしいといえばらしいけど、何処まで本音を隠しているのか、わたしには推し量ることさえできない。
　わたしは今まで、彼らの才能が失われることについて考えたことはなかった。それはずっと彼らの中にあって、少しずつ成長していくものだとさえ思っていた。けれど考えてみたら、どんな優れたアスリートもいつかは引退する。才能が衰えることもあれば、失われることもあるだろう。もちろん探偵の才能も例外ではなく。
　あらゆる点で超越的なリコにも、彼なりの悩みや葛藤があるのかもしれない。けれどあまり哀しんでいるように見えないのは、探偵であることにこだわりがないからだろうか。
「とりあえず、このゲームが終わったら、大人しく勉強でもしようと思っています」
「勉強？」わたしは思わず訊き返していた。「今さら君が勉強しなきゃいけないことなんてあるの？」
「この世界に解明されていない謎はまだまだたくさんありますからね。反物質の消滅や、暗黒物質の存在……宇宙に残された謎を解き明かすために、天文学や宇宙物理学を勉強しようと思っています」
「へえ……意外と真面目なんだ」
「ええ。まずはジョニィさんの持っているルートを使ってエリア51に潜り込み、地球外知的生命体がかくまわれているのかどうか、真実を探りたいと思います」
「勉強するのも宇宙人に会いに行くのも好きにしたらいいと思うけど……それってわたしたちと戦ったあとじゃないとできないこと？　君がこのゲームに乗る意味って何？」
「その点については、ジョニィさんと一緒ですよ。楽しいからです」
「自分が楽しむためなら他人を犠牲にしても構わないって、それはもう犯罪者の考え方だよ」
「それならむしろお二人にとって好都合では？　どうせ撃ち落とすなら、天使より悪魔の方が心も痛まないでしょう？」
　リコは悪そうな顔でウインクしてみせる。きっと悪魔の真似をしたつもりなのだろう。

「それでもまだ、ゲームに乗り気になれないというのなら……今から僕が、ここにいる客を二、三人殺しましょうか。それならさすがに結さんも――」
「やめて」わたしは大声で遮る。「冗談だとしても笑えない」
「ふふっ、それなら一緒にゲームを楽しみましょう。ただ純粋にね」
「楽しいだけで終わるかしら」霧切が冷めたような目で云う。「場合によっては、あなたでも撃つわ」
「そうこなくっちゃ」
　リコは飛び跳ねるように立ち上がった。
　テーブルの上に置かれていた弾丸入りのケースやビーコン、タイマーを半分ずつ回収して、半分をわたしたちのために残す。
「次はスコープ越しに会いましょう」
　彼は手を振りながら、歩いて店を出ていった。
　わたしと霧切はしばらく無言のまま、テーブルの上に残された弾丸を見つめた。

――それから数日後

　霧切はコンクリートの上にラグを敷いて、その上にうつ伏せになる。
　顔のすぐ前に枕を置いた。眠るためのものではなく、銃を載せて安定させるためのものだ。銃を支える道具はバイポッドやライフルレストなどいくつか種類があるけれど、いろいろと試してみた結果、わたしが普段から部屋で使っていたソバ殻の枕がもっとも安定性と衝撃吸収性に優れていることがわかった。霧切はこれを好んで使うようになった。精神的にも安定するらしい。
　学校から歩いて十五分の山中に、偶然にも古い射撃場があり、わたしたちはそこを狙撃訓練の場所とすることにした。戦時中には新兵の射撃訓練場として、戦後はクレー射撃の練習場として利用されてきたらしい。けれどもう何年も前からクレー装置が使えない状態で、訪れる客も年に数人、しかも冬場は閉鎖されているという。ところが霧切がオーナーに電話をかけたところ、あっさりと貸し切りで使わせてもらえることになった。彼女とオーナーとの間でどんな交渉があったのかはわからないけど、たぶん金銭的なやり取りで多くの問題は解決したのだと思う。
　屋根つきの射撃地点から的までの距離は、最大で２００メートル。ジョニィのゲームでは、最低でもその距離で弾を当てられなければ話にならない。
　わたしは霧切の横で、彼女と同じようにうつ伏せになって、三脚で固定した双眼鏡を覗く。
　わたしたちが用意した標的は、杭にぶら下げた直径15センチのフライパン。２００メートル離れたところ

から見ると、小さな点にしか見えない。
「今日は風が強いね」
　わたしは耳元で暴れる髪を押さえながら云う。
「訓練にはちょうどいいわ」
　霧切はスコープを微調整しながら云った。
　周囲を取り囲む山々の向こうを、灰色の雲の塊が高速で流れていく。木がざわめきながら大きく揺れている。
　観測手は自然の動きを読んで、一撃必中の条件を整えていかなければならない。
　……といっても、最終的には機械頼りだ。
「7センチ左に流される」
　計算ツールに表示された数値を伝える。
　霧切は照準を補正して、銃床を肩で固定した。
　ボルトハンドルを押し込み、弾丸を装填する。
　その横でわたしは、防音と防寒を兼ねたふわふわのイヤーマフを耳に当てた。
　霧切が呼吸を止める。
　その瞬間、まるで自然の中に溶け込むように、彼女の気配が消える。全身で風や重力を感じているのだろう。自分の全存在を、引き金にかけた指先に集中させる。
　そして——引き金を引いた。
　銃声が鳴り響く。
　横にいても身体全体に衝撃波がぶつかってくる。
　次の瞬間、双眼鏡の中で標的のフライパンが小さく跳ねた。
　鉄底の中心に丸い着弾の痕跡が見える。
「命中！」
　わたしは声を上げる。
　霧切は無言でボルトハンドルを引き、空になった薬莢を排出した。
「思っていたよりも流されなかったわ」
「確かに」わたしは標的を確認しながら云った。「向こうは山際だから風が弱いのかもね。次は2センチ右に」
「了解」
　霧切は次の弾丸をボルトに押し込んだ。

わたしは双眼鏡を覗き込む。

観測手の仕事は、標的の発見や周辺状況の把握だけではない。もっとも重要なのは、狙撃手が撃った弾丸の着弾を確認すること。狙撃手は銃の反動により着弾の瞬間をスコープで捉えることが難しいので、観測手が確認する必要があるのだ。

観測用の双眼鏡、レーザー距離計、風速計、夜間用のナイトビジョンなどなど……狙撃に必要と思われる装備はすべて霧切がインターネットで買い集めた。

「いまだにAKを使っているような非正規軍の分隊程度の相手なら、圧倒的にアドバンテージが取れる装備よ」

というのは霧切の言葉だけど、それがどの程度すごいことなのかよくわからない。問題はジョニィ・アープに対して有効なのかどうか。

霧切は休みなく十発の弾丸を撃って、すべて命中させた。確実に腕が上がっている。

「もうプロ並みだね、霧切ちゃん」

「こんなのまだ素人レベルよ」霧切は身体を起こして云った。「この銃と弾丸なら、300メートルまではスコープなしで当てられるくらいじゃないと」

「さ、300メートル？」

「スナイパーではない一般兵が通常、訓練する距離がそれくらい。スナイパーであれば、この弾丸の有効射程距離、800メートルは当てて当然よ」

「800？　そんなに？」

「ええ。その範囲なら、ジョニィ・アープは確実に当ててくると考えておいた方がいいわ」

「それじゃあ、もっと遠くから狙撃しないと撃たれるってこと？」

「彼を上回る長距離射撃なんて不可能よ。ましてや800メートル級の狙撃なんて、今すぐ身に付くようなものではないし……それでも、たとえば十発のうち一発でも当てればいいゲームなら挑戦する価値はあるけど、三発しか弾がない条件で、そんな長距離射撃に挑むのはリスクが大きすぎるわ」

「えー……じゃあ、どうすれば？」

「相手に見つからないように狙撃可能な位置まで近づく。狙撃手にとって、射撃の腕と同じくらい重要な技術よ」

近づけるのは200メートルまで。それ以上近づけば、ビーコンが作動して位置を知られてしまう。

「つまり……200メートルの狙撃を確実に決められるようにしておけば、勝算もあるってことだね」

「そう」

霧切は小さく肯く。それから足を横に投げ出すようにして座ったまま、しばらく遠くを眺めていた。集中

しすぎて見失いかけた自我を、そうして取り戻そうとしているかのようだった。
「霧切ちゃん、疲れた？　少し休もうか」
「平気」
「だめだよ、こんな調子で本番を迎えたら、最悪の結果になる」
　わたしはリュックから水筒を取り出して、霧切にコップを差し出した。温かいお茶を注ぐ。
「ハーブティを作ってみたんだ。レモンバームっていうの。いい匂いでしょ。精神安定にも効果があるんだって」
「……ありがとう」
　霧切はコップを両手で握って、指先を温めるようにして飲んだ。緊張で張り詰めていた目もとがわずかに安らぐ。
　わたしたちは数分のハーブティ休憩をとった。傍目から見れば、わたしたちは学校の庭でおしゃべりしている女の子たちと何も変わらない姿に見えたはずだ。狙撃銃を傍らに、空の薬莢が散らばる射撃場で、ピクニックのような時間を過ごす。これがわたしたちの青春だ。
　それから何発か撃ったあと、陽が落ち始めたので、わたしたちは帰ることにした。
　細長いケースに銃を詰めて、肩にかける。そうして緩やかな坂を霧切と並んで歩いていると、部活帰りの生徒と何人かすれ違った。
「わたしたち、まるで部活帰りみたいだね」
「……射撃部？」
　霧切がわたしの方を見上げて云う。
「うーん……それより探偵部というべきじゃない？　そうだ、学校に申請して部員集めてみようか」
「探偵はそんなにおおっぴらにやるものじゃないわ」
　霧切は眉間にかわいげのある皺を寄せて云う。
「これからは情報がものを云う時代だよ。広報活動にも力を入れていかないと」
「霧切家はそもそも、そういうやり方では仕事しないの。本来なら探偵図書館に登録すること自体、避けるべきだったのに」
　彼女を探偵図書館に登録したのは、おそらく彼女の祖父に変装していた新仙帝だ。おおやけでの活動をほとんどしないという霧切家の探偵が、活動記録を公開されている時点で、前代未聞なのかもしれない。けれどそれでもなお、霧切が探偵図書館から名前を取り下げようとしないのには、彼女なりの理由があるようだ。
「名前を売るのに利用させてもらう」

というのが彼女の主張だけど、結局のところ名前を知られたくないのか、売りたいのかよくわからない。とりあえずはランク0を目指しているようだ。

ところでこの前、わたしの探偵図書館カードを更新してみたら、『887』だった数字が、『886』になっていた。こんなダメ探偵でも『6』がもらえるなんて、何かの間違いじゃないかと思う一方で、先日の龍造寺月下の件を考えると、もっと数字が減っていてもおかしくないとも思う。わたし自身のファイルを調べてみると『リブラ女子学院』の事件については、わたしが解決したことになっていた。他の事件は、それぞれ直接携わった探偵たちのファイルに収まっていた。

ちなみに霧切は『917』から、また飛び級で『915』になっていた。『武田幽霊屋敷』と『双生児能力開発研究所』の二つの事件を解決したことが、新たにファイルに追加されていた。

数字のうえではついに霧切に追い抜かれてしまったけれど、それは当然のことだし、わたしは自分のことのように嬉しかった。

ランクで『5』といえば、同業者からも一目置かれるくらいの数字だ。でも霧切の実力はもっと上だと思う。栄誉ある『0』もそう遠くないだろう。

学校の塀沿いに並ぶ街路灯が灯(と)る頃、わたしたちは寮に帰ってきた。

霧切と一緒に、わたしの部屋に入る。

霧切は数日前からわたしの部屋で暮らすようになっていた。

部屋に来た当初、彼女は慣れない寮暮らしに困惑していた。けれどそれは、警戒心や緊張感のせいではなく、図(か)らずも庶民の生活に紛れ込んでしまったお姫さま、という構図で見るのが正しいようだった。考えてみれば、そもそも彼女はお手伝いさんのいる家に生まれて、物心ついた頃からホテル生活をしているような人間だ。知らない場所で過ごすことには順応できても、低俗な環境には慣れていない。

さすがにお姫さまを床で寝かせるわけにはいかないので、ベッドは彼女に譲った。その日からわたしの寝床は床の布(ふと)団になった。でも疲れている時などはベッドに横になり、気づくと霧切の横で眠っていることもあった。彼女も特に文句は云わなかった。

そんな庶民の生活にも彼女はすぐに慣れて、やがて自分から掃除や洗濯にもチャレンジし始めた。料理に関しては知識だけが優先していたけど、実際にやってみると要領がよく、味も上出来だった。

もし――わたしの妹が生きていたら、こんな平凡な生活があったのかもしれない。

けれどそういう想像はすぐに振り払った。妹が戻ってくることはないし、目の前にいるのは妹ではなく霧切響子だ。そしてわたしたちは、平凡な日常とはかけ離れた戦いのさなかにいる。

――それからさらに数日後

「霧切ちゃんは昔、ジョニィ・アープから銃の撃ち方を習ったことがあるんでしょう？　その時はどうだったの？　昔からあんな感じ？」

　わたしは部屋で仰向けに寝転がって、今ではすっかり手に馴染んだ双眼鏡で、ぼやけた天井を眺めながら霧切に尋ねる。

　霧切はわたしのすぐ横で伏射の体勢を取り、壁に貼った鴉のステッカーに銃を向けていた。弾丸を込めずに、標的を狙って、実射さながらに引き金を引く。これを何度も何度も繰り返す。射撃の上達には欠かせない訓練の一つだ。

「そうね……別に悪い印象はなかったわ。銃についても一から丁寧に教えてくれたし」

　カチン——

　カラ撃ちの音で、彼女が引き金を引いたことがわかった。

「敵意があるわけでもないし、委員会に忠誠を誓ってるわけでもない。それなのになんで、わたしたちはあの人と戦わなきゃいけないんだろう」

「『楽しいから』でしょう」

「理解できる？」

　わたしは双眼鏡を目に当てたまま、霧切の方に寝がえりをうつ。ピントのぼやけた彼女が映る。

「理解はできるけど納得はできない」

「彼は『楽しくなきゃ探偵なんかやる必要ない』って云ってたけど……楽しくなくたってやらなきゃいけないのが探偵だよね」

「どうかしら」

　カチン——

　訊かなくてもわかってる。彼女は楽しいとか楽しくないとか、やりたいとかやりたくないとか、そういう次元で探偵をやっているのではない。ただ戦場に産み落とされ、戦うことで生きてきた——それが霧切響子だ。

「でもさあ、ジョニィ・アープって、探偵としては尊敬できないけど、新仙帝や龍造寺月下と比べたら親近感あると思わない？　それに見た目だけなら、かなりかっこいいし……」

「結お姉さま」霧切が少しだけ頭を起こして、こちらを向く。「リコの時のように、彼を味方にできると思っているのだとしたら、考え直した方がいいわ」

「ま、まさか、そんなこと思ってないよ！」

「ふうん。そう」

「そもそも今回のゲームだって、あの人がこんなこと思いつかなきゃ、やらずにすんだわけでしょ。いい迷惑だよ」
「そうね。けれど彼らは本気になれば、わたしたちをいつでも好きな時に、好きなようにできたはずよ。それにもかかわらず、わざわざルールを用意して挑んでくるんだから、その点ではフェアと云ってもいいかもしれない」
「中学生の女の子に四キロの銃を持たせて遊ぼうとするのがフェア？」
「中学生の女の子でも十日あれば狙撃手になれるのよ」
「そりゃあ、君だけだよ」
　わたしは思わず噴き出して云った。
　けれど確かに彼女は、狙撃手として実力をつけ始めていた。２００メートルの狙撃では、確実に当てられるほどの腕前だ。
　たった十日でここまで成長できたのは、もとのセンスがいいのはもちろん、努力の積み重ねのおかげだろう。学校にいる時以外は、寝る時でさえ、銃を片時も手放さない毎日だ。彼女が生まれながらの天才であることは間違いないけれど、けっしてめげない、ひたむきな努力家でもあることを、わたしはあらためて知った。
　わたしも彼女の足を引っ張らないように、できる限り狙撃について学習した。銃の仕組みももちろん、今では「もっとも狙撃に詳しい女子高生」と云えるくらいには詳しくなった。
「ところで今回のゲームのこと、新仙は知ってるのかな？」
「『黒の挑戦』を舞台にする以上、知らないはずはないと思う」
「じゃあ知ってて黙認してるってこと？」
「そうね……ジョニィ・アープたちは委員会と無関係だと云っていたけれど、委員会の方が彼らの動きを察知して、裏で何か企んでいる可能性はある」
「やっぱりそうなるか……」
　単なるゲームで終わりそうにないことはわかっていたけど、もし新仙が絡んでくるとしたら、想像よりも最悪の事態になりかねない。
　今回も霧切と一緒に、ここに戻ってこられるだろうか……
「ねえ、霧切ちゃん。もしもの話だけど……新仙に『霧切の名を捨てろ』って云われたら、君は捨てられる？」
「……どういう意味？」
　刺々しい訊き返し方だった。

「いや、あの……わたしの冴えない推理だから、聞き流してもらっても全然構わないんだけど……もしかしたら新仙は霧切の名前を手に入れようとしているんじゃないかと思って」
　それはわたしの推理というより、新仙の過去を知るある人物の推理だ。けれど、その人と会ったことは口止めされているので、霧切には云えない。
「どうしてそういう考えに至ったのか興味深いわね……」
「ほ、ほら、新仙は明らかに君を狙い撃ちしているし……探偵に強いこだわりがあるみたいだから……探偵図書館で『OOO』を手に入れた次は、誇りある『霧切』の名前を狙ってるんじゃないかな……って」
「私を殺して、名前を奪おうとしている？」
「そう！　殺すつもりかどうかはわからないけど……君を探偵として敗北に追い込んで、『霧切』の名前だけを奪っていくつもりなのかもしれない。たとえば世界的なスポーツにはタイトル戦とか、メダルを懸けた戦いとかあるけど、探偵にはそういうのってないじゃない？　でも新仙は六万人以上が登録されている探偵図書館でたちまち一位になって、味をしめたんだよ。探偵としてトップに君臨することに」
「面白い推理ね。思いも寄らなかったわ」
　カチン——
　こんな状況でも、彼女の引き金を引く指は止まらない。
　わたしは双眼鏡を下ろして、銃を構える彼女の横顔を眺めた。射撃前の集中した顔つきは、澄みきっていて美しかった。
「だから新仙は——最終的に『霧切の名を捨てろ』と君に要求するんじゃないかと思うんだ」
「そして新仙が霧切を名乗るようになるのね？」
「そういうこと！」
「結お姉さま」
　カチン——
　引き金を引いてから、彼女は銃を置いて、ゆっくりと身体を起こした。
「いくつか勘違いしているみたいだから云っておくわ。まず、霧切の名前には、結お姉さまが思っているような価値はない」
「えっ……でも、代々探偵として受け継がれてきたって……」
「ええ、それは事実よ。私自身、霧切家の探偵として誇りを持っているわ。でも仕事の性質上、私たちは素性を隠して行動することが多いから、霧切の名前が表に出ることはないの。つまり、奪ってでも手に入れなければならないようなネームバリューなんてないし、手に入れたところでなんの意味もないのよ」

「でも新仙にとっては違うかもしれないでしょ。同じ探偵として、霧切の名前に価値を見出しているのかもしれない。あるいは君の云う『誇り』がほしいのかもしれない」
「新仙帝が霧切の名にそこまで執着する理由があるとは思えないわ。それとも……結お姉さまは何か心当たりがあるの？」
　霧切はいつもの冷たい視線でわたしを窺う。
「えっ、いや、別に……」
「結お姉さまの推理は、霧切の名に重みを感じている人間でなければ、出てこない発想よ。それってもしかして――」
　霧切はわたしの目を覗き込みながら呟く。
　彼女に追いつめられる犯人の気持ちが、少しだけ理解できた。この突き刺さるような視線から逃げられる気がしない。
「まあいいわ」
　彼女はそっけなく云って視線を外した。
　彼女の前で隠し事は難しい。
　けれど彼女もまた、実家が新仙に乗っ取られていたことや、祖父が殺されていたという悲劇をわたしに隠して、平気なふりをしている。
　わたしはわたしで、それを知っていることを隠している。
　話してしまえば楽なのに。
　親友なら。相棒なら。あるいは家族なら、隠し事について話し合えていたかもしれない。
　でもわたしたちは、探偵だった。
　お互いに秘密を飲み込んで、それでも信頼できるかどうか、神様が試しているみたいだ。
「霧切の名がほしいのならあげるわ。それでも、私が探偵であることを否定はできない」
「霧切ちゃんがそんなふうに云えるのなら安心だね」わたしは寝転がったまま、ごろごろと彼女の方へ転がっていった。「それじゃあ、そろそろ一緒にお風呂入りに行こっか」
「へんなことしない？」
「す、するわけないだろ」
「どうして動揺するの。怪しい」
「いいから、ほら、早く準備して。銭湯閉まっちゃう」

──それからさらに数日後

　二月二日。
　登校する前にポストを確認すると、黒い封筒が入っていた。いつもの封蠟は押されていなかった。中身はやはり『黒の挑戦』の挑戦状だった。召喚される探偵にわたしの名前はなく、知らない人の名前が記されている。
　すぐに霧切に封筒のことを伝え、その日は二人とも学校を休むことにした。これでまた事件解決までは休学しないといけない。
「二週間後っていうから明日だと思ってたけど、ジョニィ・アープたちとファミレスで会った日を含めると、今日がちょうど十四日目か……うっかりしてた」
「見て、タイマーがもう動いているわ」
　探偵役が封を開けた時に作動するタイマーが、残り約１６０時間を示していた。『黒の挑戦』はもう始まっている。
「今朝零時頃に開封されたみたいね」
　いよいよ戦闘開始だ。
　たった一枚の挑戦状から事件を推理して、犯行を未然に防がなければならない。しかも現場に近づくことはできず、遠距離から弾丸を撃って、犯行計画を破壊しなければならない。
　予報では、今夜は雪だ。
「行くわよ、結お姉さま」
　霧切はカムフラージュとなる白いコートを羽織る。

そして、現在──AM 07:15

　こうして最初の狙撃戦ではジョニィ・アープたちに勝利することができた。たとえそれが彼らのシナリオ通りだったとしても、一勝は一勝だ。
　勝負を終えたあと、わたしたちは丘を下りて『ウェーデルン山荘』へ向かった。
　たとえトリックを破壊しても、犯人が別の方法で標的を殺害する可能性がないとは云いきれない。ジョニィのゲームのルール上では、『挑戦状に予告された殺人』を『完遂不能』にした時点でわたしたちの勝利となるけれど、犯人にとって、そんなことは無関係だ。『黒の挑戦』には命がかかっている。なりふり構わず、復讐を遂げようとするかもしれない。事件はまだ終わってはいない。

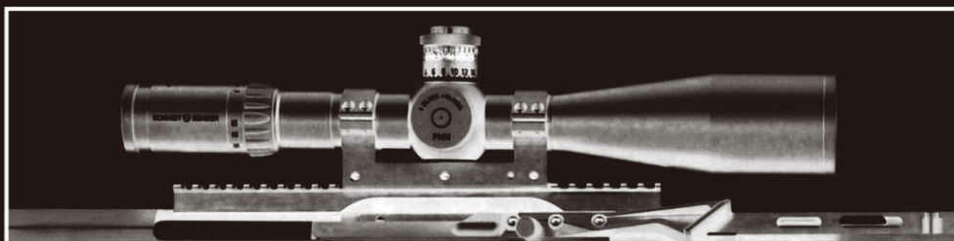
ビーコンに注意しながら建物に近づく。
２００メートル圏内に入っても、ビーコンは鳴らなかった。建物の裏口を見ると、雪をかきわけて丘へと延びる一筋の痕跡が残されている。スノーモービルの跡だ。そういえばさっき、エンジン音のようなものが聞こえてきたけど、これがそうか。ジョニィとリコはすでにこの場所を離れたようだ。
建物の正面に回る。
するとそこには、複数のスノーモービルの痕跡が雪の上に残されていた。
「もしかして……」
霧切は愕然とした様子で呟く。
わたしたちは山荘の入り口のドアを叩いた。
一人の女性が出てくる。
「あなたたち……誰？」
女性は困惑している様子だ。
わたしたちは探偵であることを告げ、予告された事件について説明した。
「わざわざ来てくれたのはいいけど、事件なんて起きないと思うよ。もう救助隊が助けに来てくれたあとだし……」
「救助隊？」
「ええ、さっきスノーモービルの救助隊がきて、赤いスキージャケットを着た男の人を乗せていったの。順番に一人ずつ運ぶんだって。でもさあ、こういう時、普通はレディファーストじゃない？」
女性は呆れたように云う。
わたしと霧切は顔を見合わせた。
「委員会だわ」
「なんで委員会が？」わたしは首を傾げる。「一体、誰を連れ去ったの？」
「もちろん犯人よ」
「ってことは、探偵が犯人の告発に成功したの？」
今までのケースで云えば、霧切によって告発された犯人はいつの間にか委員会の連中によって連れ去られている。
しかし探偵の鈴槍に事情を聞くと、犯人を告発するどころか事件一つ起きていないという。
「どうやらゲームが事件に影響を及ぼしたようね」
霧切が云う。
つまり狙撃戦の結果が、そのまま『黒の挑戦』の成否に反映されるようだ。わたしたちが勝てば、犯人

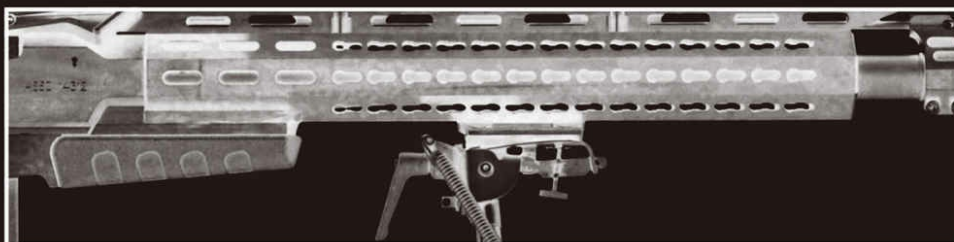
は告発されたのと同じ末路をたどる。
　この配慮がジョニィによる指示なのか、委員会の裁量によるものなのか、わたしたちには判断がつかない。ゲームが終わった後の処理をしなくて済むので都合がいいけれど、わけもわからずゲームオーバーになった犯人は気の毒としか云いようがない。殺人を決意したとはいえ、まだ実行に移してすらいないのに、委員会に裁かれることになるのだから。
　はたして、わたしたちは正しいことをしたのだろうか……
　逆に、ジョニィたちが勝った時のことを考えると恐ろしい。
「次も勝って、こんなゲームは早く終わらせてしまいましょう。結お姉さま」
「そうだね」
　勝てないゲームじゃない。
　次のセットを取ればこちらの勝ちだ。
　ジョニィ・アープには、とっとと退場願おう。

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所	形代島	9億
凶器	ナイフ	5〇〇万
凶器	シアン化合物	5〇〇万
トリック	密室	3〇〇〇万
トリック	アリバイ	4〇〇〇万
トリック	毒殺	1〇〇〇万
トリック	消失	2〇〇〇万
トリック	屍体移動	2〇〇〇万
トリック	人物誤認	5〇〇万
トリック	動物	3〇〇〇万
トリック	自然発火	5〇〇〇万
トリック	自殺	2〇〇〇万
総コスト		11億35〇〇万

以上のコストから、次の探偵を召還する

西湖彩子

第 二 章

Demonic virtuoso

次の戦いの始まりを告げる黒い封筒は、三日後に届いた。
前と同じように、登校前にポストを覗いたら、封筒が入っていた。切手もないし、宛名もない。誰かがこっそりと女子寮に侵入して、直接ポストに投函(とか)しているとしか考えられない。
委員会の人間だろうか？　ということは、彼らはすでに霧切響子の所在を把握しているとみていい。それでも手出しをしてこないのは、ゲームのルールに反するからだろうか……
霧切はベッドでまだぼんやりしていた。封筒を見せる。彼女はのそのそと起き出し、ぼさぼさ頭のままハミガキしたり着替えたりして、覚醒するまでしばらく時間を要した。
テーブルのコーヒーを一口飲んでから、彼女はようやく封筒の中身に目を通した。
「……随分と買い込んだわね」
さすがの霧切も面喰らっている。
「トリックの安売りでも始めたのかな」
わたしはベッドに腰かけて、床に座る霧切の髪を梳(と)かしながら三つ編みにしていく。
「タイマーはまだ作動していないわ」
「前回よりは時間に余裕がありそうだけど……挑戦状を見ただけでめまいがするよ」
髪を結い終えて、最後にリボンを結ぶ。勝負の運命を左右するリボンだ。心を込めて、結び目を固くする。
「これだけトリックを揃えたら、一体どんな事件になるのかな……さっぱり想像もつかない」
「そう？」霧切はライフルを胸に抱き寄せるようにして云う。「想像すること自体は難しくないわ。むしろ簡単すぎて、ブラフやひっかけを疑うくらい……」
「えっ？　簡単？」
「ええ。トリック一つにつき被害者が一人と考えると、トリックは全部で九つあるから、被害者は九人。プラス、探偵を入れて十人。島で十人の登場人物といえば『そして誰もいなくなった』しかないでしょう」
「ああ！」
アガサ・クリスティの名作にして、クローズド・サークルの基本だ。わたしと霧切が出会うきっかけになった『シリウス天文台』の事件でも、招待主がU・N・オーエンという登場人物の名前をもじった偽名を使っていた。
「島の名前にある『形代(かたしろ)』というのは依代(よりしろ)のことでしょうね。一般的に、神社では和紙をヒトガタに切り抜いた形代が使われるわ。おそらく『形代島』には十人の訪問客に模した十枚の形代が用意してあって、

誰かが殺されるたびに、一枚ずつ減っていくという寸法になっているはずよ」
「なるほど……これは間違いなく『そして誰もいなくなった』だ」
　しかし物語の犯行をそのままなぞるだけでは、すぐに探偵にばれてしまう。もちろん委員会風のアレンジが施してあるだろう。
「それじゃあ、事件の前に形代を撃って使えなくしてしまうというのはどうかな？　本来なら十人分用意されていないといけない形代が、事件前に減っていたら、犯人は動揺するでしょ？」
「動揺はするでしょうけど、すぐ元に戻せるのではないかしら。紙の形代なら、切り抜くだけで済むもの」
「そっか……」
　事件を阻止するのであれば、犯行の要となる何かを修復不可能な状態にするしかない。
「前回みたいに凶器を破壊するのが確実だけど、ナイフや毒物の容器を狙撃できる場所に置いておいてくれるとは限らないわね」
　霧切はライフルのボルトを引き抜いて、薬室を覗き込む。精確な射撃には銃のこまめな手入れが必要だ。
「うーん……一発の銃弾で十人を救う方法……」
　わたしは腕組みして唸る。
「あっ、そうだ」
「何か思いついたの？　結お姉さま」
「ねえ、霧切ちゃん。『百発百中の猟師』の話、知ってる？」
「知らない」
「あるところに百発百中の腕前を持つ猟師がいました。猟師は電線にスズメが十羽とまっているのを見つけ、狙いを定めます。弾は三発だけ。さて、猟師はスズメを何羽落とせたでしょうか」
「待って、その話はおかしいわ」霧切は深刻そうな顔で云う。「普通、猟師はスズメを狙わない」
「いや、そこは重要じゃないから……カラスでもキジでも、鳥ならなんでもいいよ。ああ、あと君は細かいこと云いそうだから先に注釈つけておくけど、猟師のライフルはボルトアクション式とします」
「答えは『一羽だけ』でしょう。最初の銃声を聞いて、他の九羽は飛び立ってしまうから」
「その通り。で、何が云いたいかっていうと——この話って、わたしたちがこれからやろうとしていることの参考になるんじゃない？」
「どういうこと？」
「島にいる人たちのことを考えてみてよ。突然、何処からともなく銃声が聞こえて、壁に弾丸の痕(と)ができたら、普通その場から逃げ出さない？　少なくとも現場は大混乱になるはず。そうなったらもう、犯人の

計画なんかめちゃくちゃでしょ。だから、わたしたちが特に何かを狙撃する必要はなくて、ただ何発か銃を撃つだけで、事件は未然に防げるんじゃない？」
「確実とは云えないわね……」霧切はゆるゆると首を振る。「今回の舞台は島だから、標的とされる人たちに逃げ場はないし、犯人だって彼らが混乱状態に陥ることを前もって予期しているはずよ」
「それもそうか……孤島の殺人計画だもんね」
　混乱状態に陥ることが前提の計画になっていてもおかしくない。いや、間違いなくそうなっているだろう。
「あ、でもよく考えてみたら、ここに並べられているトリック全部を相手にする必要はないんじゃない？
だってほら、トリックを一つ壊せば、『完遂不能』っていう条件を満たせるわけだから、前回みたいに『黒の挑戦』はそこで打ち切り終了になるはず」
「そう都合よくいくかしら。委員会がいつ、どの段階で『打ち切り』を判断するのか、私たちには知る術がないわ。たとえばトリックを一つ壊すことができたとして、それが四人目の被害者を殺すためのトリックだったとしたら？　三人目までの殺害は見過ごされ、四人目の段階ではじめて『打ち切り』になるかもしれない。その場合、私たちは三人の被害者を見殺しにすることになる」
「うーん……そうか……」
　たとえゲームに勝っても、被害者を出してしまったら、探偵としては敗北だ。
　数名の犠牲を覚悟で、どれか一つのトリックの阻止に集中するか。
　それとも、ゲームに負けるリスクを承知で、一人も被害者を出さない方法を模索するか。
　わたしは当然、後者を選ぶ。
　その決意は霧切も一緒のはずだ。
「まずは『形代島』を見つけましょう」霧切が云う。「地形の把握をしないことには、作戦の立てようがないものね」

　情報処理室のパソコンを使って調べると、すぐに『形代島』の位置がわかった。東北のリアス式海岸に点在する無人島の一つで、千年以上前から、漁や航海の安全を祈る社のある場所として知られているらしい。正式名称は『平島』。いかにも平凡な名前だ。地元ではむしろ『形代島』という名前の方が有名なようだ。
　新幹線を使えば今から二時間で行ける。
　わたしたちは銃を入れたケースを背負って、最寄りの駅から電車に飛び乗った。

港町に着いた時には、午後六時を過ぎていて、辺りは真っ暗だった。唯一、駅前のロータリーの中央で、オレンジ色の常夜灯がぼんやり光っている。観光地としてはそれなりに知られた場所だけど、にぎわいは陽の出ているうちに限られるようだ。海の方に目を向けると、溶けたような闇があって、そこから海鳴りが聞こえてきた。
　暗いうちは船が出せないというので、わたしたちは近くの旅館に宿泊して、朝を待つことにした。
　通された和室の窓からは、遠い海岸沿いの町明かりを眺めることができた。浴衣は水色と薄いピンク色の二つ。霧切がピンク色の方を選んだので、わたしは水色にした。
　夕食には魚介類をメインにした料理が出てきた。なんということだろう！　事件が目前に迫っているとはいえ、はしゃがずにはいられない。
　まるで二人だけの修学旅行だ。
　露天風呂があるというので、わたしたちは一緒に入ることにした。
　広い岩風呂に、わたしたちだけ。
　当然、泳いだりお湯をかけあったり、思いつく限り素敵なことをしようと思っていたのだけれど、お湯につかった霧切の右肩に、紫色のアザがあるのを見つけて、わたしの観光気分は湯気とともに霧消していく。
「霧切ちゃん、それ……」
「大丈夫」
　彼女は手で痣を隠すようにする。
　前に一緒に銭湯に行った時は、そんなアザはなかったのに――
　おそらく、ここ数日間の訓練によるものだろう。狙撃の際に、銃床を右肩に当てて固定するため、発砲の衝撃をそこで受けることになる。それでなくとも、肩づけの射撃姿勢を繰り返すことで、彼女の白い肌は傷つき、痕が残るはずだ。
　そのアザについて、わたしはそれ以上何も云えなかった。彼女のためにわたしができることはほとんどない。だから精一杯優しく、湯上りで濡れた髪を拭ってあげた。
　それから部屋の電気を消して、並んだ布団の上で、わたしたちはうつ伏せになって顔を寄せ合い、遠い波の音を聞きながら、ひそひそ話をした。もちろん思春期の乙女の会話ではなく、事件の捜査会議だ。
「前回は先回りしてる余裕なんかなかったけど、今回はかなり先行できてるんじゃない？　タイマーもまだ動いてないし」
「そんなに甘くはないわ」霧切は小さく息をつきながら云った。「私たちがたどり着ける程度のことなら、彼

らもすでにたどり着いていると考えるべきよ」
「そりゃあそうだけど……」
「それに今回は地理的にも私たちの方が不利みたい」
　霧切は枕元の照明を灯すと、『形代島』の俯瞰図を広げる。
　島は港からおよそ3キロ東に位置する。あまり大きくはない。島の長さ（東西）およそ500メートル、幅（南北）およそ700メートル。神社とそれに連なる屋敷はほぼ中央に位置していて、標高はそこが一番高い。
「拠点になりそうな建物が高台にあるのか……」
　つまり敵の方が高所を陣取ることになる。前回とは逆のパターンだ。
「島に自生している植物はあまり多くなくて、低木ばかり。ほとんど身を隠す場所もないわ。島の中心からもっとも遠い海岸線でも350メートル。ジョニィ・アープの腕なら、島の全体が射程範囲と云えるわね」
「難問だね、こりゃあ……どうする？　霧切ちゃん」
「そうね……」
　霧切もすぐには答えを出せないようだ。
　わたしたちはまだ、何を標的にすべきかも決められずにいる。
「事件が起きる前に島に乗り込んで、高台を陣取っておくっていうのはどう？」わたしは思いつきで云う。「ついでにトリックに使われそうなものを片っ端からめちゃくちゃに壊しておくという手も――」
「それは不可能よ」
「え？　どうして？」
「彼らはもう島にいると思う」
「そんなまさか……わたしたちだって最速でここまで来たじゃない」
「『まさか』と思うなら、それが真実よ。彼らの場合はね」
　……彼女の云う通りだ。
　トリプルゼロクラスのコンビに対しては、常に最悪を想定して行動すべきだろう。たとえば彼らが米軍基地からジェット機を飛ばして現地まで移動していたとしても驚かない。
　そして彼らはすでにベストな狙撃位置にいて、わたしたちが島に上陸するのを待っている。今回は本気で勝利を取りにくるだろう。
「まるで打つ手なしだ」
　わたしは仰向けに寝転がって、文字通り天を仰ぐ。

「そんなことはないわ」
　霧切の心強い言葉に、わたしは思わず身体を起こす。
「んっ？　もしかして何か秘策があるの？」
「方法は二つ」
「二つも？」
「一つは、狙撃戦で勝つ方法というより、事件を未然に防ぐ方法。もう一つは、それがだめだった時の最終手段」
「なになに？　教えて」
「一つ目は――『形代島』に行こうとする人たちを港で引き止める、というやり方。事件の登場人物たちが現場に移動する前に、全員を拘束してしまうの」
「なるほど、まさに水際作戦だ」
「この港で見張っておいて、島に渡ろうとする人たちを見つけたら、説得して引き止める。説得に応じない場合は、多少強引にでも拘束する。全員が無理なら、数人だけでも構わないわ。そしてしばらくこの旅館に留まってもらう」
「その場合、狙撃戦はどうなるんだろう？」
「タイムリミットまで何も起きなければ、事件を未然に防いだと解釈してもいいはずよ。ただし、彼らが何もせず黙って見過ごすとは思えないけど」
「霧切ちゃんを狙いにくる？」
「ええ、間違いなく」
　となると、前回は『攻撃側』だったわたしたちが、一転して『防衛側』になるわけか。ジョニィたちは事件を進行させるために、島に渡る予定だった人たちを奪還しに来るはずだ。
「でも霧切ちゃんは隠れていれば撃たれることもないよね？」
　狙撃するためにあえて顔を出す必要がない――つまり相手にカウンター・スナイプの機会を与えずに済むということだ。
「前回よりも勝算の高い作戦じゃない？　これならきっと勝てるよ！」
「そうだといいけど」
「何か心配ごと？」
「ジョニィ・アープが狙撃を捨てて、強襲作戦を仕掛けてきた場合、私たちだけでは到底太刀打ちできないわ」
「それはないでしょ。あれだけ狙撃戦にこだわってた人が、狙撃を捨てるなんて。自分でゲームを台無し

にするようなもんだよ」
「私もそう思う。でもそれは彼に対する印象の話。論理的に否定できるものではないわ」
「難しく考えすぎだと思うけどなあ……」
「それからもう一つ、そもそも島に渡る人たちを引き止められるかどうかという問題があるわ」
「説得が難しい？」
「そうではなくて……この港に現れるかどうか、確証がないの」
「え？　でも島に一番近い港はここで間違いないでしょ？」
「多少遠回りでも、船さえあれば別の港から島に行ける」
「あ、そうか……」
「ヘリコプターを使う可能性もあるわ」
　それもそうだ。今までの事件を考えると、犯人が全員を気絶させてから島に運ぶというパターンもあり得る。
「水際作戦が失敗した場合は？」
「二つ目の方法、最終手段に出るしかない」霧切は無表情のまま云う。「ジョニィ・アープを狙撃する」
「――できるの？」
「ええ。ただし彼を撃ち殺すつもりはないわ。わたしは暗殺者ではなく、あくまで探偵だから」
「それじゃあ……」
「彼の銃を狙う」
「たとえ銃を壊しても、替えの銃がいくらでもあるんじゃない？」
「そうね。でも――弾丸は三発しかない。三発目の赤い弾丸を装填したところで狙撃して暴発させる。その結果相手は弾切れを起こして、試合終了」
「ああ！　その手があったか！」わたしは思わず声を上げる。「あ、ちょっと待って、それならわざわざ三発目まで待たずに、最初から弾倉を狙えばいいんじゃない？」
「彼がすべての弾丸をあらかじめ弾倉に込めているとは限らないわ」
「それもそうか……」
　ボルトアクションライフルであれば、一発ずつ直接ボルトに押し込んで装填するやり方も珍しくない。あるいは青と黄色の弾丸だけを弾倉に込めておいて、最後の赤い弾丸は手で装填するという可能性もある。つまり赤い弾丸が弾倉にあるとは限らないのだ。
　やはり赤い弾丸を暴発させるには、それが装填されたのを見届ける必要があるだろう。
　ということは、少なくともジョニィに青と黄色の弾丸を撃たせなければならないことになる。一流のスナイ

パーが撃つ弾を、わたしたちは二度もやり過ごさなければならないのだ。
　そんなことが可能なのか——
「最初から説明するわ」
　霧切が地図上にボールペンを走らせる。
　海上に二つ、船の形を書き込んだ。
「まず船を二艘用意して、片方に私、もう片方に結お姉さま、それぞれ分かれて乗り込む。結お姉さまは島の西側へ、私は大きく周り込んで南側へ。そして先に結お姉さまだけ、島に近づく」
「わたしだけ？　それってもしかして……」
「そう、オトリよ」
「やっぱり」
「結お姉さまの役割は、ジョニィ・アープに最初の青い弾丸を使わせること。少なくとも一発、受けてもらうわ」
「死んじゃうよ！」
「安心して。弾丸を身体で受ける必要はないわ。結お姉さまの船には、いかにも私がひそんでいるように細工しておくの。何かに布を被せて、ふくらみを作っておく程度でいいわ。ついでに布が風で飛ばないように、紐で船に結びつけて固定する。そうすればきっと、ジョニィ・アープはその紐を弾丸で撃ち抜いて、まず布を剝ぎ取ってくるでしょうね」
「そんな器用な真似……あいつならできるか。それで、次はどうする？」
「結お姉さまの船がオトリだと気づかれたあと、すぐに私がもう一艘の船で島に近づく。私は撃たれないように布を被って隠れておく。向こうから見た限りでは、布の中身がオトリなのか、それとも本物なのか判断はできない」
「うん」
「普通だったらオトリかもしれないと考えて、二発目を使うことに慎重になるけど……彼ならためらいなく撃ってくるはずよ」
「だろうね。容易に想像できる」
　使用できる弾丸を三発までとしたのはわたしたちのためだと、ジョニィは云っていた。つまり彼は一発で事足りると考えている。彼にとって、一発目と二発目は『余り』みたいなものだろう。『余り』を使うことに躊躇するとは思えない。
「これで彼に二発使わせることができたわ」
「でも布が剝ぎ取られたら、霧切ちゃんが丸見えになるってことでしょ。大丈夫なの？」

「ええ。ジョニィは私に気づいて、三発目の赤い弾丸を装填するでしょうね。排莢から装填、再照準まで、たぶん一秒もかからない。その一秒間が私たちに与えられたチャンス」
「チャンスって――君は船に乗ってるんだよね？」
「ええ。もちろん、銃を構えてね」
「揺れる船の上から、一秒の合間を縫って、ジョニィの銃をカウンター・スナイプするってこと？」
「そうよ」涼しい顔をして云う。「この作戦、どうかしら」
「どうかしら、って――」まったく、彼女の度胸には呆れるしかない。「もちろん、君を信じるよ」
「期待には応えてみせるわ」
　霧切は少しだけ嬉しそうな表情を見せた。
「張り切るのはいいけど、あくまで最終手段だからね。今回は銃を使わなくて済むことを祈るよ。まずは島に誰も行かせないことだね」
「夜明け前に港へ行きましょう。いつ、誰が来てもいいように張り込みするのよ。もしかしたら持久戦になるかもしれない」
「張り込みか……そういえば今までそういうのなかったね」
「そうね……サンドイッチとコーヒーでも用意していく？」
「え？」
　あんぱんと牛乳じゃなくて？　西洋風？
「冗談よ」霧切は布団の中にもぐっていった。「もう寝るわ。結お姉さまも早く寝た方がいいわよ」
「あ、ああ、うん」
　冗談なんてめったに聞かないものだから、あっけに取られてしまった。
　それはともかく……
　わたしは旅館の天井を見上げながら考える。
　作戦に何か見落としはないだろうか。
　そもそもこの作戦は本当にうまくいくのか？
　もやもやと考えているうちに、わたしはいつの間にか眠っていた。

　まだ夜が明けきらないうちに、わたしたちは着替えて外に出た。
　昨夜は暗くて見えなかった島々が、日の出の淡い薄明かりを背に、海のあちこちにシルエットを浮かびあがらせていた。観光地にふさわしい絶景だ。
　コンクリートの護岸に沿って歩く。

空気は冷たく、荒々しい。潮風だ。風速7メートル毎秒。もし弾丸が横向きの風を受けた場合、かなり流される。標的までの距離にもよるけれど、５メートル前後のずれを想定する必要があるだろう。
　手元のタイマーを確認する。
　残り１６３時間——
『黒の挑戦』の開封を告げるタイマーは、わたしたちが眠っている間にカウントダウンを始めていた。逆算すると、探偵は午前零時きっかりに開封したようだ。
「今回の探偵役も『黒の挑戦』経験者じゃないかしら。タイムリミットを把握しやすいように、わざと零時に開封したのね」
　そういえばわたしたちも以前、正午ちょうどに封を開けて時間を調節したことがある。経験者でなければできないことだ。
「いよいよ始まったね」
『Shoot down the angel』の第二回戦が幕を開ける——
「さあ、霧切ちゃん。張り切って張り込みだ！」
　わたしは潮風に負けないように大きな声で云う。
　するとその時。
　なんの前触れもなく。
　空気を切り裂くような音がして。
　霧切の右側に結んでいたリボンの片端が、見えない何かで焼き切られるかのように千切れた。
　千切れ落ちたリボンの切れ端が、はらりと風に舞って、波の上に落ちる。
　遅れて——

　遠雷のような銃声が聞こえてきた。

　わたしと霧切は完全に硬直したまま、波間に消えていくリボンの切れ端を、ただ見送る。
「……はっ？」
　わたしはようやく意識を取り戻し、すぐさま双眼鏡で『形代島』の方角を覗いた。
　嘘だ。
　絶対に信じられない。
　双眼鏡の中で、島は小さな影でしかない。
　距離計の数値は計測不能。

それもそのはずだ。

だって――3000メートル以上離れている。

「うかつだったわ」

霧切は髪に残ったリボンをほどいて、切れ端を確認する。切断面は弓型にえぐれていた。弾丸が通り抜けた跡だろう。

「撃たれた方向から考えても、彼らが『形代島』にいるのは間違いない……信じられない話だけど、ワールドレコードクラスの超長距離狙撃だわ」

霧切の言葉はほとんど称賛に近かった。

2000メートル級の狙撃になると、どんなに条件を揃えても、最終的には運を味方につけなければ難しいと云われる。静止している目標ならともかく、動いている標的ともなれば、なおさら不確定要素が計算の邪魔をする。まして風に揺らぐリボンを撃ち抜くなんて、奇跡に近い。

ケータイが鳴った。画面には非通知と出ている。

「もしもし」

『結さん？　僕です』リコの声だった。『二回戦の勝負がついたみたいですね。おつかれさまでした。次の最終戦で、また会いましょう。次も負けませんよ。それじゃあ』

「ちょっ、ちょっと待ってよ――」遮ろうとしたけど電話はすぐに切られた。「これで終わり……？」

わたしは愕然として呟く。

何もかも一方的な勝負だった。こちらの計略なんてお構いなしの、力技による一点突破。狙撃手は一発の銃弾で戦況を変えると云われるけれど、まさにその力を目の当たりにさせられたようだ。

「ジョニィ・アープが使ってる弾はわたしたちと同じはずだよね？　7・62ミリの弾丸で3000メートル超の狙撃なんて可能なの？」

わたしは未だに目の前の出来事を受け入れることができない。

「そうね、私もあり得ないと思って油断していたわ。7・62ミリの有効射程距離は800メートル程度。けれど命中率や破壊力を度外視した最大射程距離は4000メートル――あり得ないけど不可能ではない。気を抜くべきではなかったわ」

あらためて、相手がどれだけ規格外なのか思い知らされる。射程距離も『000』クラスというわけだ。

「結お姉さま、しょんぼりしている場合ではないわ。急いで『形代島』に渡りましょう」

「え？　なんで？　もうゲームは終わって――」

ふと気づく。

前回の『黒の挑戦』では、狙撃戦の決着によって事件が強制終了させられていた。はたして今回、

わたしたちの敗北によって事件はどう処理されるのだろうか。
「嫌な予感がするわ」
　霧切は青ざめた顔で云う。
　わたしも同感だった。

　昨日のうちに話を取りつけておいたので、すぐに漁船を借りることができた。霧切は船の操縦もできるらしいけど、今回は漁師の船長に任せて、島に急いでもらった。
　波を切って船が進む。視界の中で、黒い点でしかなかった島が、次第に大きくなっていく。お椀を伏せたような形だ。その一番高いところに、和風の屋敷が見える。
　船はやがて『形代島』に着いた。
　コンクリートの小さな波止場に船を停め、わたしたちは上陸する。
　そこから走って島の中央へ向かった。足元は緩やかな坂になっていて、数メートルおきに小さな鳥居が建てられている。顔を上げると、鳥居の向こうに屋敷が見えた。
　もう少しで屋敷に着くというところで、霧切が足を止めた。
　鳥居の傍らに人が倒れている。
　路傍から道に戻ろうとしたところで倒れたような状態だ。うつ伏せで、顔を向こうに向けているので人相はわからないが、おそらく男性だろう。ジーンズに白のポロシャツ。この季節に、上着もなく半袖姿というのは少し異様に思えた。
「大丈夫ですか？」
　わたしは声をかけながら駆け寄る。
　近づいた瞬間、血の臭いを感じた。
　霧切も異変を感じたらしく、警戒しながら男の横に屈んで、首筋に触れた。首を横に振る。すでに亡くなっているようだ。
「死んで間もないわ」
　霧切は立ち上がり、男の顔を確認しようと反対側へ回った。
　男の顔を見下ろすなり、絶句して目を細める。
「どうしたの？　まさか、知り合い？」
　様子を窺う。
「待って、見ない方が――」
　遅かった。

男の顔は、一見すると赤い仮面でもつけているかのようで——のっぺりとして凹凸がなく、顔の輪郭に沿って丸く縁取られていた。しかしそれは仮面などではなく。
「顔が……ない……」
顔面が切り取られているのだ。
今までにも無惨な殺され方をした屍体を目の当たりにしてきたけれど、今度ばかりは精神的にショックが大きかった。人間のもっとも人間らしい部分が失われたことで、それは屍体というより、壊された人形のようで、余計に不気味さを増していた。
霧切も最初こそ驚いてはいたが、すぐに探偵としての責任をまっとうするため、屍体を調べ始めた。
「不自然なほど何も持っていないわね。ポケットは全部カラ。時計や指輪などの装飾品もなし」
「犯人が持ち去った？」
「どうかしら……」
屍体の身元を特定するようなものは何も見つからなかった。顔と同様に、個性はすべて犯人によって奪われてしまったようだ。
「とりあえず屋敷へ行ってみましょう」
霧切は道の先へ歩き出した。わたしもズキズキと痛むこめかみを押さえながら、彼女を追う。
社殿を改築したような和風の屋敷が見えてきた。
そこでまた、わたしたちは息を呑む。
玄関の引き戸の前に、誰かが倒れていた。
しかも幻かと見間違うほど、さっきの屍体とそっくりだった。ジーンズに白のポロシャツ姿で、うつ伏せに倒れている。身長や体格もほとんど同じだ。
もしやと思い、近づいて確認してみると、やはりさっきと同じように顔面が切り取られていた。
わたしたちはそれから屋敷の中を探索し、他に七体の屍体を発見した。
そのいずれも、まるでコピーしたのではないかと思うほどそっくりな屍体ばかりだった。ジーンズに白のポロシャツ、そして失われた顔。身元を知るための手掛かりもなく、見た目で個人を見分けることすらできない。
そっくりな屍体が九つ。
こんな異様な事件は初めてだ。
わたしと霧切は血なまぐさい空気から逃れるように屋敷を出て、新鮮な海風を吸った。
「挑戦状が開封されてからまだ六時間程度しか経ってないのに……」
わたしたちがジョニィとの狙撃戦に負けたせいでこんなことになったのか、それともはじめからこういう事

件として計画されていたのか、それはわからない。しかし屍体はいずれも、数時間から数分以内に殺害されたのは間違いなさそうだった。
　島には屍体となった九人の他には誰もいない。
　ビーコンが鳴ることもなかったので、ジョニィたちはすでに島を離れたようだ。
「『そして誰もいなくなった』を模した事件だと考えていたこと自体、間違いだったのかもしれないわね……」
　霧切は珍しく気を落としているようだった。
　無理もない。こんな不気味で意味のわからない事件――
「どうする？　霧切ちゃん。犯人がまだこの島にいるとは思えないけど……」
「一応、島の隅々まで調べてみましょう。もしかしたら何処かに犯人が隠れて――」

「こらーっ、待て待てーっ」

　突然、何処からともなく女性の声が聞こえてきた。見ると、鳥居の坂道の下から、スーツにスカート姿の女性が上がってくる。スーツの上には何故か白衣を羽織っていた。
「漁船のおじさんから聞いたけど、二人組の若い探偵ってあんたたちね」
　女性は風に負けないくらいの大きな声で云う。なんだか怒っているような剣幕でわたしたちのところへ近づいてきた。
　フレームのない眼鏡に切れ長の目。長い髪をシニョンにして、白衣を着ているところからみても、実験室の似合う理系女子といった印象だ。
「あの……あなたは……」
「ん！」
　彼女はストラップで首から下げた入館証のようなものを手に取って見せつける。
　探偵図書館の登録カードだ。
　名前は西湖彩子。
　ナンバーは『950』――
　すごい、ゼロナンバーだ。しかも頭の『9』は殺人事件専門。霧切の先輩に当たる。
「今回の『黒の挑戦』の探偵役ですね！」
「そういうこと」
　西湖は皮肉っぽい笑みを浮かべながら、わたしの胸の辺りを人差し指で強くつついた。

「な、何するんですか」
「穴が開けばいいなと思って」西湖は云う。「云っとくけど、これ、私の事件なんだから、横取りしないでくれる？」
「ええっ？　よ、横取りって……」わたしは両手を振って否定する。「そんなつもりは……」
「あんたたちのつもりなんてどうでもいいの。私の現場で、私の屍体をいじくりまわしている時点で、やってることは横取り行為なの。わかる？」
「誰が事件を解決してもいっ——」
「一緒じゃないのよ」西湖は霧切の言葉を遮って、彼女の胸をトントンとつつきながら云った。「私が解決しなきゃ、ポイントが入ってこないでしょーが。ポイントが」
「ポイント？」
　わたしは尋ねる。
「探偵図書館のランクの話よ。事件を解決してポイントを稼がなきゃ、トリプルゼロになれないでしょ。私はね、四十になるまでにトリプルゼロになって、今まで私を馬鹿にしてきた男たちを見返してやるんだから。そんで大富豪と結婚して——」
「あの……それならわたしたちも解決に協力しますので……」
「い・ら・な・い・っつってんの！」
　西湖は人差し指でわたしの胸をほとんど刺すようにつつきながら云う。人のことをつつく行為に、何か執着のようなものすら感じる。
「わ、わかりました、邪魔しませんから！」わたしは西湖から離れて、霧切を呼び寄せる。「ねえ霧切ちゃん。この事件すごく気になるけど、あの人に任せておこうよ。仮にもゼロナンバーだし、実力は問題ないんじゃない？」
「そうね」霧切は意外にもあっさり引き下がった。「あの人が解決できるなら、それでいい」
「おーい、聞こえてるぞー」西湖が口を挟んでくる。「まんまるのちびっこ探偵団のくせに、どっから目線？　ねえ、どっから目線なのー？」
「ご、ごめんなさい、すぐ帰りますから」
「一刻も早くそうしなさい……次の事件が待ってるんでしょ？」
　西湖は腰に手を当てて云う。
「……もしかして、わたしたちのこと知ってるんですか？」
「さあ？　知らないし、知りたくもない。でもなんか面倒なことになってるのだけは推理できんのよ。そのケースの中身、銃でしょ？　さっき銃声が聞こえたけど、この事件に銃は関係ない。ってことは、さしずめ

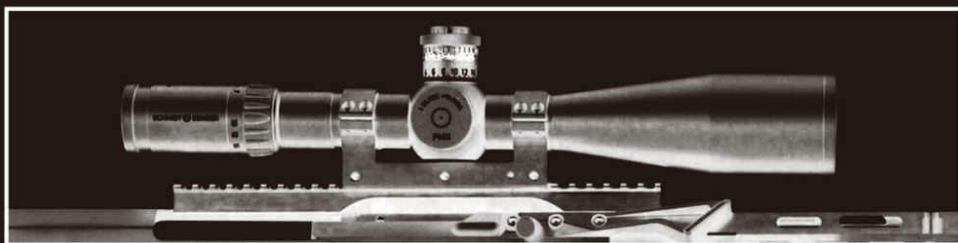
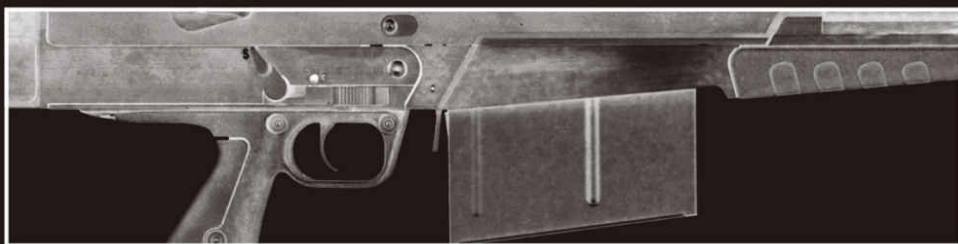
あんたたちは無関係な『黒の挑戦』を舞台に、サバゲーみたいなことをさせられてるって感じ？　ああ、いいよ答えなくて。あんたたちはあんたたちのすべきことをすればいい。私は私のすべきことをするから」
「この事件……任せても大丈夫ですか？」
「だから、どっから目線よ。元々この事件は私のものなんだから、あんたたちが背負う必要はない。これは私の事件。うるさいから早く行け」
　西湖はわたしたちを追い払うようなしぐさをする。
　いろいろと心残りだけど、もうここにはわたしたちがすべきことは何もない。
「行こう、霧切ちゃん」
　わたしは彼女の手を取る。
　霧切は黙ってついてきた。
「それじゃあ、あとはお願いします」
　わたしは頭を下げて、その場をあとにした。

　それからわたしたちは漁船で本土へ戻り、すぐに電車に飛び乗った。
　車内ではほとんど無言だった。圧倒的な実力差を見せつけられて、わたしは完全に言葉を失っていた。何をどうすれば勝てるのか見当もつかない。霧切は目を細めて、車窓をただ眺めている。
　そもそもわたしたちはジョニィと戦う必要があるのだろうか？
　さっさと負けを認めれば、彼らは満足して退場してくれるだろうか。
　……そう簡単に済むとも思えない。
　次は三回戦、最終戦になる。
　きっと想像もつかないような勝負になるはずだ。

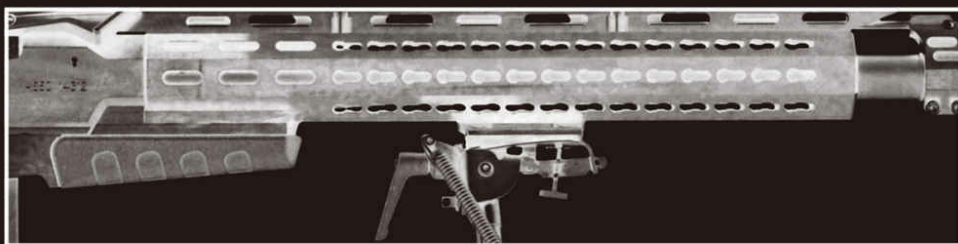
探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所　エデンサイド遊園地　1億
凶器　M4　1億
凶器　TAC50　1億
凶器　M60　1億
凶器　ドラグノフ　1億
凶器　スローイングナイフ　1億
総コスト　6億

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

第 三 章

farewell, my sweetheart

1

　寮に戻ってからすぐに、休むことなく、わたしたちは射撃場へ向かった。西湖がくれた時間を少しでも有効に使わなければならない。向上心というよりは、焦燥感から、わたしたちの足は自然と射撃場へ向いていた。
　勝ち目のない勝負だということはわかっている。だからといって、諦めたら死ぬかもしれない戦いだ。もしかしたらジョニィの最終的な狙いは、赤い弾丸で霧切響子を撃ち抜くことかもしれない。そうではないという保証は何もないのだ。だからわたしたちは全力をもって臨むしかない。
「結お姉さま、もっと高い場所へ行ってみましょう」射撃場に着くなり、霧切が云った。「ここでは300メートルが限界……もっと長距離の感覚を掴む必要があるわ」
　わたしたちはさらに山を登って、展望台を目指した。
　細い山道を抜けると、急に視界が開ける。
　眼下に町を一望できる高台だ。普段は足を運ぶ人も少なく、ひっそりと静まり返っている。夜ともなれば辺りは真っ暗になり、眼下の夜景も物寂しいだけで、最近では心霊スポットとして有名になりつつあるとか。
　わたしたちが高台に着いたのは正午頃で、分厚い雲の切れ間から射す光が、うっすら雪の残る町を白く輝かせていた。教会風の建物が小さく見える。あれがわたしたちの通う学校だ。そこに降り注ぐ糸のような光が、神秘的な弦楽器のように見えた。
「ここから教会の十字架まで――1680メートル」
　距離計で確認する。双眼鏡で覗いても、十字架は米粒大だ。もともと視力の悪いわたしには、光学機器の助けがなければ形状を把握することすらできそうにない。
「3000メートルが果てしなく遠く見える。300メートルで一喜一憂していたのが情けないわ」
　霧切は銃のスコープを望遠鏡代わりにして覗き込む。しかし数秒で銃を下ろしてしまった。重さ4キロ近くある銃を支えなしで保持し続けるのは、彼女の体格では無理だろう。
「300メートルを当てられるからこそ、1000メートルだって当てられるようになるんでしょ。わたしたちがやってきたことは無駄じゃないよ」わたしは彼女をはげますように――あるいは自分に云い聞かせるように云う。「落ち込まないで、霧切ちゃん」
「落ち込んでなんかいないわ」霧切は遠くを見つめたまま云う。「これが『ゲーム』だったからまだ命があるけど、もしそうじゃなかったら私は今頃――」
「大丈夫だって」

わたしは彼女の小さな背中にのしかかるようにして、うしろから抱きしめる。
　霧切の鼓動が感じられた。同時にわたしの鼓動が彼女にも伝わっているはずだ。
「ほら、ね？」
「でも次はわからない」
　相変わらず遠くを見たまま云う。
　彼女は震えてはいない。死への覚悟は揺るぎないようだ。折れずに前を見続けられるのは、探偵としての誇りがあるからだろう。それに、彼女は負けず嫌いなところがある。このままで終わるような霧切響子ではない。
「もちろん訓練は続けるんでしょう？」
「ええ」彼女は少しだけ顔をこちらに向けて云う。「長距離の訓練にここはちょうどいいわ。さすがに実弾を撃つわけにはいかないけど……カラ撃ちの練習にはいいと思う。実射訓練も下の射撃場で続けるわ」
「よかった。霧切ちゃん、朝からずっと難しい顔してたから、戦いに疲れちゃったんじゃないかと思ってた」
「いつもこの顔よ」霧切はそう云って、深いため息を零す。「勝つ方法を考えてたの。ジョニィ・アープ本体を狙撃するのはまず不可能だわ。真っ向勝負の狙撃戦になったら敵(かな)わない。攻略するには、常に彼の射線に入らないように身を隠したまま、速やかにトリックの方を破壊するしかない」
「一回戦目のように？」
「あれも本来ならカウンターをくらっていたわ。一度でも頭を出せばアウトだと考えるべきね」
　厳しい条件だ。
　視界を遮るもののない平原や孤島は圧倒的に不利になるだろう。ビルの並ぶ都市部が舞台なら、隠れる場所はたくさんあるけど、はたして『黒の挑戦』で選ばれるだろうか……
　あまり慎重になって、もたもたしていたら事件の被害者が出てしまう。逆に焦り過ぎて、ジョニィに狙撃されたら元も子もない。
　まったく、うんざりするようなゲームを考えてくれたものだ。過酷な戦いの中で、右往左往しているわたしたちを見ることが、ジョニィにとっての『楽しい』なのだろうか。
「次の『黒の挑戦』次第だね……できることなら、なんとか館とか、なんとか荘とかがいいな」
「そんな気の利いたサービスしてくれるとも思えないけど。新仙がこのゲームのことを把握しているのなら、次の最終戦で干渉してくる可能性もあるし」
「ええっ……やめてよほんと、ただでさえ弱ってるんだから」
　わたしは霧切から身体を離し、展望台の手すりに背中を預け、天を仰ぐ。

こんなこと、一体いつまで続ければいいのだろう……
「そういえばこの前、結お姉さまがいない時に、寮の電話にお祖父さまから連絡があったの」
　霧切が云う。
「ほんと？　もしかして、ついに帰国したの？」
「ええ」
「やった、霧切家の祖父と孫が揃えば、もう無敵だね！」
　代々探偵業を継ぐ霧切家の当主にして、霧切響子の師匠でもある霧切不比等——彼が新仙帝やジョニィ・アープたちトリプルゼロクラスに匹敵するのは間違いない。
「ところが、そう単純な話でもないの。早速何か別の事件の解決に奔走していて、手が空かないそうよ。行く先々で事件に遭遇してしまうのは名探偵の宿命ね」
「宿命ね、って……真っ先に孫の無事な顔を見に来るもんじゃないの？」
　いや——違う。
　たとえ家族に何があろうと目の前の事件を優先する。それが霧切家の人間だ。
「ごめん……余計なこと云った」
　わたしが謝ると、霧切は何を謝られているのかわからない様子で、少しだけ首を傾げた。
「新仙とはすでに接触したそうよ」
「えっ、まさかもう捕まえたとか？」
「さあ？　詳しいことはわからないけれど、『任せておけ』と云っていたわ」
　霧切不比等と新仙帝は旧知の仲で、かつては師弟関係にあったという。もしかしたら、わたしたちの知らないところで、すでに師弟対決が始まっているのかもしれない。
「とりあえず私たちは、次の『黒の挑戦』に集中しましょう」
「そうだね。まずはジョニィ・アープを退場させる。そうすればもう、委員会にトリプルゼロはいなくなる。委員会の壊滅も近い！」
「理想通りいくかしら」
「理想くらい高くもたなきゃ！」わたしは高揚して霧切にもう一度抱きつく。「だからがんばろうっ」
「重いわ、結お姉さま……」
「し、失礼だな」
　それからわたしたちは、およそ１０００メートル先にある道路標識を的に、実射さながらにカラ撃ちの訓練をした。銃を取り出すところから始めて、手すりに枕を置いて銃床を保持し、標的を確認、引き金を引いて速やかに銃をしまう。

相手は何処で待ち伏せしているかわからない。わたしたちには、定点狙撃による忍耐力よりも、ヒット＆アウェイの素早さが求められる。
傍からは単なるごっこ遊びのように見えるだろう。事実、WRクラスの相手に、こんな訓練がなんの役に立つのか、自分でもわからない。
だからといって、何もしなければわたしたちはそのまま負けるだけ。一発逆転の必殺技なんてない。訓練を積み重ねて、少しでも勝率を上げる必要がある。たとえ小数点以下の勝率でも……
展望台での訓練を二時間ほど続けたあと、わたしたちは射撃場に移動して、実射訓練を行なった。午前中にあんなことがあったあとでも、霧切の200メートル射撃は安定していた。
「オリンピックの射撃競技は最大でも50メートルらしいよ。霧切ちゃん、出てみたら？」
わたしは双眼鏡を覗き込んだまま云う。
「そんなに甘くはないわ。競技も、実戦も」
そう云って彼女はボルトハンドルを引いて、リロードする。
「そういえば訓練用の弾がもうすぐなくなりそうだね。ジョニィは弾がなくなったら云えって云ってたけど、どうやって連絡とったらいいんだろう」
訓練を終えて寮に帰ると、部屋にダンボール箱の荷物が届いていた。
送り状がないので、例によって直接ここに届けられたもののようだ。委員会の配送バイトは、はたして時給いくらだろう。
開けてみると、赤いリボンがかけられたプレゼント箱が入っていた。『ジョニィより』というカードが添えられている。
おそるおそる開けてみると、追加の弾丸がケースごと、三百発ぶん入っていた。
「気が利くなあ。敵じゃなかったら好きになってたかも」
わたしはため息を零しながら云う。
すると霧切が冷たい視線でこちらを見たので、冗談だと云ってごまかした。

それから五日間、わたしと霧切は学校と展望台、射撃場を行き来する日々を続けた。
日中、霧切は真面目に教室に通っているらしい。そもそも単身帰国した理由の一つが、学業をきちんと修めることだと前に云っていた。義務教育で常識を学ぶのも大切なことだろう。
学校にいる間は探偵であることを表に出さずに過ごしているようだ。隠し事が多いせいか、相変わらずクラスに溶け込んでいる雰囲気はない。一人ぼっちはかわいそうだから、昼休みに彼女を連れ出して一緒にごはんを食べようとしたこともあるけど、わたしが教室に顔を出すとクラスの子たちがきゃあきゃあと

騒ぎ始めるので、それ以来遠慮している。
　この先、彼女がクラスメイトと打ち解けることはあるのだろうか。一人ぼっちのまま卒業なんてことにならなきゃいいけど。
　霧切はいつもはわたしより先に寮に帰っていることが多いのだけれど、ある日、なかなか帰ってこないことがあった。心配になって、中等部の教室に行ってみようかと考えていると、何事もなかったように彼女は帰ってきた。
「今日は遅かったね、何かあった？」
「出席日数のことで職員室に呼ばれていただけよ」
「大丈夫なの？」
「どうにでもなるわ」
「いや、ならないと思うけど……」
「ずっとこの学校にいるわけじゃないから。そのうちまた海外に出ると思うわ」
「えっ、そ、そそ、そうなの？」
　動揺。同時に、急に寂しい気持ちになる。なんとなく卒業までは彼女と一緒にいられると思っていたのに……
　その一方で、わたしは頭の何処かで、彼女との別れは運命的に約束されているような気がしていた。
「仕事次第では、海外行きが先延ばしになることもあるから」
　霧切はわたしの顔色を察したのか、そう付け加えた。

　そして二月十三日――
　ついに三通目の『黒の挑戦』がポストに届いた。
　その封筒は前回までとは明らかに違っていた。今までは犯罪被害者救済委員会の封蠟が押されていなかったのに、今回は押されていた。
「霧切ちゃんっ、大変っ」
　わたしは大慌てで部屋に引き返す。霧切はすでに制服に着替えていて、ベッドに腰かけてコーヒーを飲んでいるところだった。
「予想通り、委員会が動き出したみたいね」
　霧切は冷静だった。
「これって、ジョニィのゲームとは無関係な『黒の挑戦』なのかな……？」
「どうかしら。今、ちょうど午前七時だわ。開けてみましょう」

「よし」
　わたしは決意を込めて封を破った。
　中から黒い和紙を取り出す。
　この瞬間は何度経験しても緊張する。

　探偵に告ぐ
　黒の叫び声を聞け

場所　エデンサイド遊園地　１億
凶器　Ｍ４　　　　　　　１億
凶器　ＴＡＣ５０　　　　１億
凶器　Ｍ６０　　　　　　１億
凶器　ドラグノフ　　　　１億
凶器　スローイングナイフ　１億

総コスト　　６億

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

「なんだこりゃ……」
「探偵役が結お姉さまになっているわ」
「トリックの項目が一つもない。それに凶器に書いてあるのって……」
　ちょっと前なら、その英数字は意味不明な羅列にしか見えなかっただろう。けれど今ならわかる。
　スローイングナイフを除けば、他はすべて銃器の名称だ。
「ジョニィ・アープの件と無関係というわけでもなさそうね」
「あ、そうだ、タイマー！」
　わたしはジョニィから預かっているタイマーを確認する。
　カウントダウンは今まさに始まったところだった。
　つまりこの『黒の挑戦』は、ジョニィのゲームで使われる舞台と考えて間違いない。
「また妙な手を使ってきたな……なんの意図があってわたしを探偵役にしたんだろう？　誰が探偵役でもそんなに大差ないのに……」
「そうね……向こうの意図はともかく、探偵として指名されたということは、『黒の挑戦』が他人任せでは済まなくなったということね」
「まあそうだけど……」
「いつものように現場を探すところから始めましょう」
　理解不能の事態が起きた時に、霧切の平常心はとても心強い。
　わたしたちは学校へ行き、情報処理室へ急いだ。パソコンを立ち上げて、『エデンサイド遊園地』について調べる。
『エデンサイド遊園地』は、十年以上前まで実際に運営されていた遊園地で、現在は例によって閉鎖されたままになっている。山腹に切り開かれた６００メートル四方もの広大な土地には、観覧車やジェットコースターなどの一部のアトラクションが解体されずにそのまま放置されており、物寂しい廃墟と化しているようだ。
　ここから電車で一時間、バスで三十分――現在はバスが運行していないため、タクシーを利用するしかない。
「遊園地での狙撃戦か。身を隠す場所はそれなりにありそうだね」
「運営されていた当時の地図があるわ。これを頭に叩き込んでおきましょう」霧切はモニタを指差しながら云う。「周囲５キロの地形も確認しておかないと」

「作戦は？」
「まず今回の狙撃戦についてだけど……敵はジョニィ・アープ一人ではなさそうね」
「え？　どういうこと？」
「まるでジョニィ・アープのゲームに合わせたかのような凶器の羅列……そして探偵役に結お姉さまが選ばれたこと……これらが偶然だとは思えない。間違いなく、委員会がゲームに介入しようとしている」
「それはなんとなくわかるけど」
「『黒の挑戦』の犯人に銃を持たせる意味──それを考えれば、彼らの目的が見えてくるはずよ」
「うーん……？」
「要するに──『委員会』対『ジョニィ』対『私たち』の三つ巴の戦いになるということ」
　ああ、それでこの奇妙な『黒の挑戦』なのか！
　ようやくわたしにも状況が飲み込めてきた。
　おそらく委員会はジョニィの行動に不穏な気配を感じ取ったのだろう。彼をこのまま野放しにするわけにはいかないと考える。そこで今回の『黒の挑戦』を用意し、ジョニィのゲームにぶつけてきたというわけだ。
　もしかしたら委員会は、このラストゲームを盛り上げるために、今まであえてジョニィを泳がせていたのかもしれない。
「私たちは普段、『黒の挑戦』に挑む人たちのことを犯人と呼んでいるけれど、今回は刺客と呼ぶべきかもしれないわね」
「それじゃあ、今回の『犯人＝刺客』が狙う『被害者＝標的』って──」
「私と、ジョニィ・アープ」
　ああ、なんてことだ……
「『黒の挑戦』のルールでは、犯人は標的を残らず殺害しなければクリアしたことにはならなかったわね。つまり委員会側の勝利条件は、私とジョニィ・アープを殺害すること」
「ジョニィの『弾丸は三発まで』ルールとか関係なく？」
「それは私たちが勝手に行なっているルールであって、委員会側の人間には関係ないでしょうね」
「そんなあ……」
「逆に私たちも委員会側の人間を撃つ時には、三発ルールに縛られる必要はないということよ」
「そりゃそうだけど、それで有利になるわけじゃないし……でもよく考えたら、今回の犯人がジョニィ以上の狙撃手ってことは絶対にあり得ないんだから、勝算はある？」
「そう簡単な話でもないわ」

「……どうして？」
「刺客は一人ではなく、それぞれ別々の武器を持った五人の相手だと思う」

『M4』
『TAC50』
『M60』
『ドラグノフ』
『スローイングナイフ』

「五人も相手にするのっ？　そんなのめちゃくちゃだよ！　もう殺人事件でもなんでもない、ただのコロシアイじゃないか！」
「ええ、そうね。生き残りをかけた戦いになるわ」
　霧切は涼しい顔で云う。
「こんなの探偵の仕事じゃない！」
「そうね……その意見には私も賛成だわ」
「今回は中止するようにジョニィに訴えよう。彼だってこんなの不本意でしょ」
「どうかしら。かえって『面白い』と考えそうだけど」
「う……確かに……そもそもわたしたちにはジョニィに連絡する手段さえなかった」
「中止を訴えることはできないけど、不参加を表明することはできるわ」
「え？」
「今回の『黒の挑戦』は無視する、という選択肢もありだと思うけど、結お姉さまはどう思う？　事件の被害者となる標的は、私とジョニィ・アープだけで、他に守るべき一般人はいない。放っておけば委員会とジョニィ・アープの内紛で終わるのではないかしら」
「あ、そうか、スルーか……その手もあったね」
　指名された探偵が事件現場に行こうが行くまいが、ペナルティはない。
　けれど『黒の挑戦』を投げ出すということは、ジョニィとのゲームを投げ出すということでもある。今までやってきたことはなんだったのか……むなしい気持ちになる。
　といっても、わたしの気持ちなんてどうでもよくて、霧切以外に守るべき被害者がいないのなら、そもそもゲームに参加する意味も目的もないと云える。
「よく考えてみたら、案外ジョニィが全員やっつけてくれるんじゃない？」

「私もそう思う」
「そもそもあの人に勝てる刺客なんているのかな」
「全員追っ払ってくれないと、飛び火する可能性があるから困るわね」
「生き残ったやつが霧切ちゃんを襲いに来る？」
「そうなるでしょうね」
　委員会のことだ、いくら不参加を表明しようと、わたしたちを催眠ガスで昏倒させたあと拉致して、わざわざ『エデンサイド遊園地』に連れ出し、無理やりゲームに参加させるなんてこともあり得なくはない。
「よし、決めた。『黒の挑戦』についてはスルーで！　そして万が一のことも考えて、これから一週間、私が霧切ちゃんを全力で守る。今回は私が探偵役だから、いざという時は盾にもなれるしね」
「頼もしいわ」
　霧切は表情を和らげて云った。
「あとはジョニィ・アープが刺客たちを追っ払ってくれるのを祈るだけ……」
　ジョニィとの勝負には水が差される形になったけど、最初から望んではいない戦いだ。これで終わってくれるのなら何も云うことはない。
　ただ……リコはどうなるのだろう？
　それだけが少し気がかりだった。

2

『黒の挑戦』の開封から四時間。
　御鏡霊の運転する白いセダンは、曲がりくねった山道を上っていた。
『エデンサイド遊園地』はこの先にある。今回はヘリコプターを用意する時間がなかったため、自動車での移動になった。
「僕に運転させるなら、もっといい車を用意してほしかったですね。ついでに云うなら、あの戦車がよかったんですけど」
　御鏡がすねたように云うと、助手席のジョニィ・アープは手元のライフルの薬室を覗き込みながら、肩を竦めるようにして応じた。
「この生 娘が扱いづらいって？」
「だって丸裸も同然でしょう」御鏡は小さく首を振る。「防弾性能もないのに。彼らが来たらどうするんですか？」

「料理してやるまでさ」
　ジョニィは親指で後部座席を示す。
　後部座席にはストアで買い込んだ砂糖と塩、それぞれ１キロの袋が、山ほど積んであった。
「ほら、見ろ。speak of the devil──噂をすれば七十五日」
「いちいちツッコミませんからね」
　サイドミラーを覗くと、小型トラックが後方から近づいていた。
　後部の荷台に誰か立っている。髪を短く刈りあげたタンクトップの屈強そうな男だ。二の腕がロードローラーの鉄輪を思わせるほど太い。
　御鏡が鏡越しに男を眺めていると、突然音を立てて、サイドミラーが弾け飛んだ。
　続けざまにビスビスと音を立てて、車に穴が開いていく。
　バックミラーの中でマズルフラッシュが瞬いた。
　銃声がアスファルトに反響し、山々へとこだまする。
「降ってきましたよ」
「大荒れの天気になりそうだな」ジョニィが首を竦めて、座席に深く沈み込む。「雨男って概念がこの国にはあるらしいが、レイ、お前がそれか？」
「ご冗談を」
　御鏡はハンドルを大きく切って射線から逃れる。
　トラックの男は、運転席の屋根にＭ６０機関銃をバイポッドで固定し、荷台からそれを撃ちまくっていた。由緒正しいテロリストスタイルといったところか。
　毎分５００発を越える７・６２ミリの横殴りの雨の中、御鏡は車を左右に振って弾丸を避けようとする。
「レイ、ルーフを開けてくれ」
「この嵐の中、頭を出して撃つんですか？」
「そんな危ない真似できるかよ」ジョニィは後部座席に腕を伸ばし、袋を掴む。「cooking timeだ」
　ジョニィは手元の袋を手当たり次第、屋根の窓から後方へと投擲し始めた。身体をなるべく射線にさらさないように、身をひそめたまま、袋を山なりに投げていく。
　トラックの男はそれに気づき、砂糖と塩の詰まった袋を空中で次々に撃ち落としていった。男からすれば、さながらシューティングゲームのようだっただろう。的はけっして小さくはなく、当てやすいはずだ。
　袋が撃ち抜かれるたびに、白い粉が舞い、周囲を包み込む。
「粉塵爆発狙いですか？」

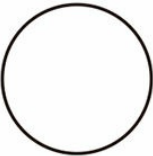
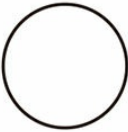
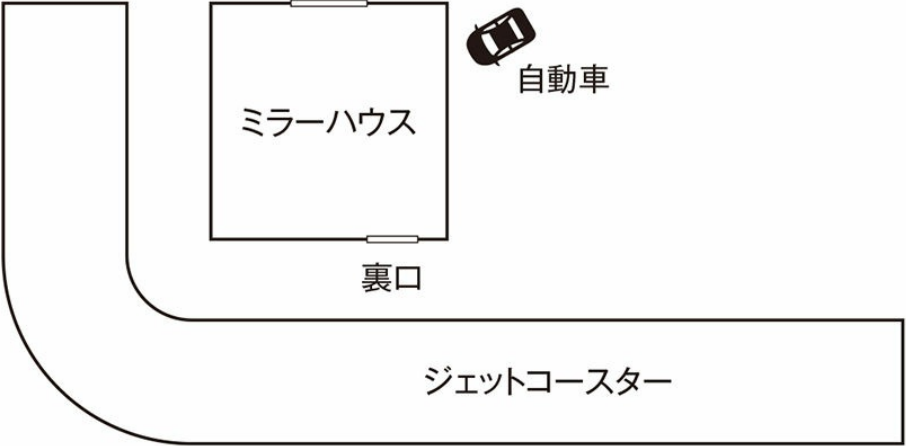
「残念ながらそこまで派手じゃない。まあ見てろって」
　唐突に、銃声がやんだ。
　荷台の男は銃の機関部を覗き込み、慌てふためいている。
　トラブル発生だろうか。
　操作に手こずっている様子だ。
　男の顔に焦りが窺えた。
「M60は制圧力に優れた分隊支援火器の一つだが、泥や砂埃ですぐにjamる」ジョニィは云いながら、手元のライフルに弾丸を装填した。「特に砂糖や塩が降る日には注意が必要だ」
　ジョニィは助手席の上に乗って、屋根の窓から頭を出し、振り返って素早く一発、トラックへ向けて撃った。
　トラックの左前輪が破裂し、車体が大きく振られる。
　道はちょうどカーブに差し掛かったところだった。
　トラックはカーブを曲がり切れずに、そのままガードレールを突き破って、崖下へと飛んでいく。驚愕に顔を引きつらせた荷台の男は、自慢の筋肉では慣性に逆らうことはできずに、宙に放り出され、トラックと一緒に落ちていった。
「Gooooood Morning,Vietnam!」
　ジョニィは手を振って男に別れを告げた。
　追跡者を葬り去り、二人を乗せた車は穴だらけのまま、何事もなかったかのように山道を進む。
「これで一人、片づきましたね」
「あれで二人目だ」
「いつの間にもう一人？」
「ホテルを出る時に狙撃されたから撃ち返した。挑戦状に記載されている現場でもないのに撃ってくるのはルール違反だと思わないか？　ルールに関して云えば、オレは隣の家のおばさんよりも厳しいぞ」
「相手の武器はなんでした？」
「ドラグノフ」
　ロシア製のセミオート式スナイパーライフルだ。AKと並び、かつてのソヴィエト連邦を代表する銃と云える。
「射手はロシア人ではなく日本人だった。腕に覚えがあるようには見えなかったな」
「委員会はどういう基準で彼らを選んだのでしょう」
「さあ？　それを聞こうと思って、そいつのいたビルの屋上へ向かったんだが、オレの目の前で折り畳まれ

て消えちまった」
「それって――」
「ミカドの得意なマジックだ。この件に彼が直接関与しているのは間違いなさそうだ」
「新仙の狙いは？　邪魔になった我々を消すつもりでしょうか」
「それにしては回りくどい。単にオレたちだけでゲームを楽しんでいるのが気に食わなかったんじゃないか？」ジョニィはそう云って大声で笑う。「云ってくれれば仲間に入れたのにな！」
「笑いごとじゃありませんよ。彼らが狙っているのは僕たちだけではなく、結さんや響子さんもでしょう。彼女たちが殺されてしまったら、ゲームが台無しですよ」
「ん？　それもそうだな」
「結さんたちに連絡しましょうか？　今回は休戦にして、敵を排除することを優先しても――」
「いや、連絡の必要はない」
「どうして？」
「その方が面白い」
「云うと思ってました」
「だったら聞くなよ」
「でも少し安心しました。ゲームに使う『黒の挑戦』の作成にジョニィさんが関わっていないことは、今回の挑戦状ではっきりしたと云えます」
「まだ疑ってたのかよ」
「僕は信じることと疑うこと、同時にできるタイプなんです」
「いい奥さんになれそうだな」
　ジョニィは皮肉っぽく云った。
　やがて車は、広大な駐車場にたどり着いた。
　周囲を山に囲まれた土地に、コンクリートの平地が広がっている。夏場にはおそらく、ひび割れた地面から雑草が伸び、辺りに生い茂っているに違いない。しかし今は、うっすらと積もった雪が、かろうじて見栄えだけは純白に仕立て上げていた。
　駐車場の向こうに、錆(さび)だらけで鮮血を浴びたかのように赤く染まった観覧車が見える。他にもメリーゴーラウンドやジェットコースターの一部が窺えた。

観覧車

事務所 売店

操作小屋

メリーゴーラウンド

噴水中央広場

入場ゲート

車を停めて、双眼鏡で周囲を確認する。
　敵(て)影なし。
「遊園地か……ガキの頃、父親によく連れていってもらったものだ」ジョニィはダッシュボードの上で指を組んで云った。「その遊園地にいるピエロが夢に出るほど恐ろしくてな。父親はそんな俺を見て笑いながら云うんだ。『大丈夫、あれはただのオヤジがメイクしているだけだから怖くない』って。今じゃもう遠い記憶さ。父親はガンで死ぬまでわかっちゃいないようだったな。あのピエロが怖かった本当の理由は、父親が仕事に行ってる間に、あいつがうちの母親によく会いに来ていたからなんだって」
「……いい話になるかと期待しました」
「ちなみにそいつはオレが六歳の時に撃ち殺した。『汝(な)、姦(か)淫するなかれ』──オレは正しいことをしたつもりだ。ああ、お前の云いたいことはわかるよ、レイ。それじゃあ『汝、殺すなかれ』と矛 盾するだろってな。もちろん、最後にオレは、自分にとって正しいことをするつもりだ」
「ジョニィさんのそういうところ、僕は好きですよ」
「わかってくれて嬉しいぜ、相棒」
「ずっと聞きそびれていたんですけど、この勝負が終わったらどうするつもりですか？　委員会とはもうお別れでしょう？」
「そうだな……次の楽しいことを探す旅にでも出るさ」
「僕もついていっていいですか？」
「やめとけ。お前にはまだ夢も希望もある。オレたちの真似なんかすることはない」
「こういう時だけ大人のふりをするんですね」
「それが大人ってもんさ」
　ジョニィの言葉に、御鏡は目を細めて、ゆるゆると首を振った。
「見たところ雪の上に足跡はありません」御鏡は話を変える。「しかし我々が一番乗りだとは考えにくいですね。『黒の挑戦』のルール通りなら、犯人はここが舞台になることを事前に把握しているはずですから」
「罠(な)を仕掛けるなり、待ち伏せするなり、やり放題ってわけだ」
「ルール通りといえば……通常『黒の挑戦』の犯人は復讐を動機にしていますが、今回の犯人たちに心当たりはありませんか？」
「心当たりならありすぎる。過去に『黒の挑戦』にチャレンジして失敗し、オレに排除された連中の家族や恋人の数を数えたらきりがない」
「なるほど──その中から委員会がふさわしい人物を選び出し、刺客として送り込んだといったところで

しょう」
「さっきの『Ｍ６０』の男みたいに、単なる素人が銃を持っただけなら、こっちは目隠しのハンディでも負ける気はしないが――」
「そんな単純な話ではないでしょうね」
　御鏡は特に『スローイングナイフ』が気がかりだった。
　狙撃手の装備はそもそも長距離の敵を相手にするものであり、近接戦闘には向かない。ましてやナイフが届く距離まで敵の接近を許した場合、死を覚悟する必要がある。
　おそらく『スローイングナイフ』は、対狙撃手を想定したものだろう。委員会もそれなりの手練を用意してきているはずだ。残りの二名も今まで通り楽な相手とは限らない。
「近接戦闘用の武器は？」
　御鏡が尋ねると、ジョニィは脇のホルスターからシングルアクションのリボルバーを抜いた。
「古臭い装備ですね……」
「さっきのＭ６０男じゃないが、ここぞという時にjamるわけにはいかないからな。信頼性でこの銃に勝るものはない」
　ジョニィは西部劇のヒーローのように、器用に銃をくるくると回してからホルスターに戻した。
「合理的とは云えませんよ。今時、高性能なマシンピストルなんていくらでもあるのに」
「お前だって、その四次元ジャケットの中に隠してるのはおもちゃみたいなもんばかりだろ。おい、その中を見せてみろ。どうなってんだ」
「ちょっと、やめてください」御鏡は身体をよじってジョニィをかわす。「こんなことしている場合じゃありませんよ。僕の推測が正しければ、このままだと響子さんたちはここには来ません。何故かと云えば――」
　そう云いかけた次の瞬間。
　ドスンと地響きを感じるほど車が揺れて、ボンネットの中央に巨大な穴が開いた。
　その穴の大きさは、『Ｍ６０』によって開けられた穴よりもはるかに大きい。
「どうやら始まったようだな」
　ジョニィが頭を下げて云う。
　おそらくは『ＴＡＣ５０』による狙撃だろう。マーカーペン並みの巨大な１２・７ミリの弾丸は、自動車のボディなど容易に貫通する。今の銃撃で、相手の狙撃手は『照準調整』したはずだ。次は車体を貫通させたうえで、確実に当ててくる。
「車を出せ！」
　ジョニィの声よりも早く、御鏡はアクセルを踏み込んでいた。

車は雪煙を上げながら、広大な駐車場を駆け抜ける。
そのままスピードを落とすことなく、正面のフェンスを突き破った。
雪上でタイヤがスリップするのも構わず、御鏡はハンドルを大きく切って、遊園地の入場ゲートの横から敷地内へと侵入する。
すると今度は、何処からともなく弾丸の斉射が浴びせられる。
こっちは『M4』か――
しかし遊園地内に人影はない。
何処から撃ってきている？
「いきなり総力戦だ」
「歓迎されてますね」
御鏡は急ブレーキを踏み、正面に迫る小さな建物に車をほとんどぶつけるようにして停めた。
ボンネットから煙が上がる。
なおも銃撃は右方向、運転席側から続けられていた。短い金属音のような銃声は、おそらくサプレッサーを装着しているからだろう。サプレッサーは銃声やマズルフラッシュを抑える効果があり、射手の位置を特定させにくくさせる。
「レイ、こっちから出ろ」
ジョニィは助手席を蹴飛ばすように開けて、先に外へと転がり出た。
御鏡は身体を屈めたまま、運転席から助手席へ移動し、外へ出ようとした。
しかしその時――
視界の隅に、かすかに動く何かを目撃した。
左方向、ほんの10メートル先。
何もない雪面が少しだけ盛り上がって、みるみるうちにそれは人の形となった。
ギリースーツ！
雪の風景に溶け込むようにカムフラージュされた戦闘服だ。かなり小柄だが、全体をふさふさとした白い毛のようなもので覆っていて、まるで雪男のように見える。10メートルの距離で見ても、輪郭（りかく）がぼやけるほど迷彩度が高い。フードを被り、白い目出し帽で顔を覆っているため、それがヒトであるとわかるのは、冷徹そうな瞳だけだった。
ジョニィはまだそいつの存在に気づいていない。
「ジョニィさん！」
御鏡が声を上げると、ジョニィは雪男に気づき、後方に飛び跳ねるようにして距離を取りながら、素早

く抜いたリボルバーを撃った。
　弾は雪男の肩に当たり、白い毛を宙に撒き散らす。
　しかし雪男はひるまなかった。ギリースーツに穴を開けただけのようだ。
　一方で、雪男は撃たれるのとほぼ同時に、両腕を振り回していた。
　ジョニィに向かって、銀色の光が一筋、二筋と襲いかかる。
　投げナイフ――
　ジョニィは続けざまにリボルバーの引き金を引き、襲いかかるナイフを弾丸で迎撃する。
　しかしその神技が通用したのは一本目だけだった。
　二本目には間に合わない！
　小さなナイフが深々とジョニィの右肩に突き刺さる。
　同時に、それまで車を狙っていた『Ｍ４』の斉射が、標的をジョニィに変えた。
「大歓迎だな、くそっ！」
　ジョニィは弾丸を避けるため、建物の向こう側に回り込む。
　地面の弾痕が、まるで生き物のように、点々と彼を追う。
『スローイングナイフ』の雪男もジョニィを追って、建物の方へ走っていった。
　――あくまでもジョニィ優先か。
　一人取り残された御鏡は、車を飛び出して彼らを追うことにした。
　足跡は建物の裏で消えていた。
　どうやら中へ入ったらしい。
　全体が紫がかった怪しげなその建物は『ミラーハウス』と呼ばれるアトラクションの一つだった。
　二つの足跡が、裏口のドアの前まで続いている。
　標的を見失ったせいか、『Ｍ４』の斉射音がやむ。
　その直後、奇妙な銃声がして――
　何かが倒れる音。
　御鏡は音を立てないように、そっと裏口のドアを開けて『ミラーハウス』の中を窺った。
　真っ暗だ。
　ペンライトをつけると、その小さな光とそっくり同じ光が同時にあちこちで灯った。御鏡はたちまち万華鏡の世界に取り込まれる。一歩足を踏み入れた途端、御鏡の姿は分解され、四方に飛び散り、世界は反転した。
『ミラーハウス』の中には合わせ鏡や凹面 鏡、凸面鏡など、無数の鏡が設置されており、ちょっとした迷

路になっている。幻想的な世界が楽しめる建物だ。
　御鏡は息を殺して、迷路の奥へと進んでいく。
　かつて人々は、正体不明の探偵・御鏡霊を『GHOST IN THE MIRROR』と呼んだが、まさにありとあらゆる鏡の中に、御鏡が存在していた。自分と鏡像との境界が次第にわからなくなっていく。
　鏡の中にジョニィの姿は見当たらない。いずれにしても歪んだ鏡の世界に、彼を探すなんてできっこない。
　実像を探さなければ。
　呼んで探した方が早いが――しかし建物の中には間違いなく敵もいる。今まさに、この薄い鏡の向こうにひそんでいるかもしれない。うかつにこちらの位置を知らせるようなことをすべきではないだろう。
　足音を忍ばせ、手探りで鏡の迷宮を進んでいくと、やがて足元に柔らかい何かが当たった。
　白いふさふさとしたもの。
　通路の角から見えているそれは――
　さっきの雪男の足だった。
　ああ、やはりジョニィはすでに雪男を倒していたのか。
　御鏡はその角を曲がり、『ミラーハウス』中央に位置する十角形の部屋に入った。
　そこで見たのは、御鏡でさえ予想していなかった惨劇だった。
　足元に倒れた雪男……
　その先。
　部屋の中央の床に、両手を広げて、まるで十字架のように仰向けに倒れている男。
　その肩に刺さった銀色のナイフ。
　乱れたジャケットの脇に覗いて見えるホルスター。
　そしてその古臭いリボルバー。
「ジョニィさん……」
　眉間に撃ち込まれた弾丸によって、頭部はほとんど破壊され、部屋の四方に飛び散っていた。その凄惨な死にざまによって、この部屋は世にもおぞましい赤い万華鏡と化していた。
「ふざけてないで、起きたらどうです？」御鏡はため息を零しながら云う。「知ってますよ、バールストン・ギャンビットというやつでしょう。顔のない屍体は別人と疑え。本家で使われたのはショットガンでしたが……」
　御鏡は雪男の方に近づく。
　つまりこういうことだ。ジョニィは雪男の顔面を銃で吹っ飛ばしたあとで、互いの服を交換し、今そこで

雪男のふりをして転がっているというわけだ。ちょっとした冗談のつもりだろう。

しかし、この時点で違和感はあった――

御鏡はうつ伏せに倒れている雪男の横に屈み、白いフードを外した。

さらに白い覆面を剝ぎ取る……

当然そこにはジョニィの顔があって――

例の子供じみた目で笑いかける――

『騙されたか？』なんて笑いながら――

御鏡はそう考えていた。

ところが、覆面の下に現れた顔は……

見知らぬ女性だった。

銀色に近い髪色で、肌が浅黒いアラブ系の顔立ち。

もちろんジョニィとは似ても似つかぬ顔だった。

御鏡は自分が冷静さを欠いていたことを思い知る。

よく見ろ。

どう見てもこいつは小柄だ。ジョニィが身代わりになるには小さすぎる。違和感はあったんだ。

信じられない光景を目の当たりにして、思わず信じたい仮説に飛びついたか――

御鏡は振り返って、部屋の中央の屍体を確認する。

頭が吹き飛び、顔面もほとんど形状を保っていないが、後頭部に残る髪の色は、ジョニィと一緒だった。そして血にまみれた顎周りに残る無精ひげ。

『まるで狼男みたいだろ？　孤高のウルフガイだ』

彼の言葉が思い起こされる。

『顔のない屍体』で偽装するには、身代わりとなる屍体が必要になるが、そもそもこの部屋に入って行ったのはジョニィと『スローイングナイフ』だけ。建物の周囲に、彼ら以外の足跡はなかったことを御鏡は確認している。雪男――実は雪女だったが――はそこに倒れているので、論理的に導かれる結論としては、この『顔のない屍体』こそジョニィ本人ということになる。

それにしても――

何処から撃たれた？

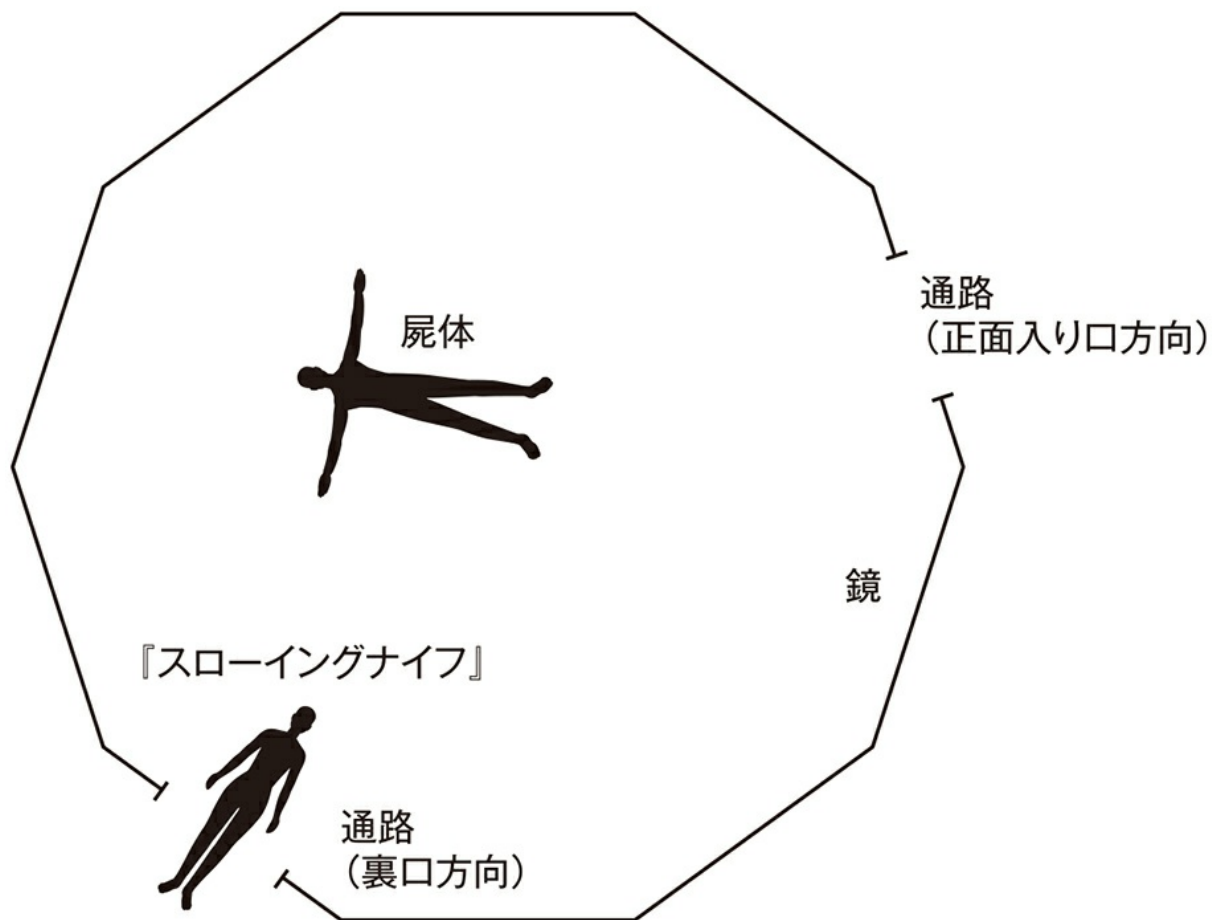
周囲の鏡は一枚も割れていない。

ぐるりと見回して、御鏡はあることに気づいた。

ジョニィのライフルがない。

持ち去られた？

ということは、第三者がここにいたということになる。

通路
（正面入り口方向）
屍体
鏡
『スローイングナイフ』
通路
（裏口方向）

御鏡は部屋を飛び出し、入り口の方へ、鏡の通路を逆順にたどる。
すぐに入り口にたどり着いた。
重そうな観音開きの扉だ。開かない。内側から鍵がかけられている。ツマミを回してロックを外す。
外で襲撃犯が待ち構えているかもしれない。御鏡は用心しながら、扉を細く開ける。
見たところ、雪上に足跡はない。
ここから外に出た者はいないようだ。
すなわち——この『ミラーハウス』は密室だった、と云えるかもしれない。
御鏡は十角形の部屋に引き返そうと、振り返った。
すると——
目の前に白い影が立っていた。
『スローイングナイフ』！
生きていたのか。
彼女は逆手に持ったナイフを振り上げていた。
とっさにそれをかわし、同時に自分のネクタイを素早く外して、女の右手に絡め、捕捉する。
しかし女の左手はまだ自由だった。
ナイフが、御鏡の首筋をかすめる。
血が壁に飛び散る音を聞いた。
御鏡は思わず後退し、背中で扉を押し開けるようにして、外へ飛び出した。
選択の余地はなかったとはいえ——
その行動は誤りだった。
『Ｍ４』の斉射が何処からともなく御鏡を襲う。
焼けた鉄で串刺しにされたような感覚が、御鏡の身体のあちこちで起こった。
純白の雪が、赤く染まる。
万華鏡の中にいるわけでもないのに、視界は歪み、ちかちかと光が瞬く。
自分の探偵人生は長くない。
その『ほとんど真実といっていい予測』は、やはり正しかったのか……
御鏡は朦朧とする意識の片隅で、そんなことを考えながら、よろよろと園内の中央に向かって歩き……そこで倒れた。

『黒の挑戦』を無視することに決めたとはいえ、いつ何が起きるかわからないので、わたしと霧切はその日学校を休み、寮の食堂で正午を迎えた。
　コンビニで買ってきたサンドイッチとコーヒーの昼食。一週間、この調子で乗り切れば、とりあえずややこしい事態はクリアできる。
　お流れになったジョニィとの勝負については、そのあとまた考えればいい。
「対委員会っていう点では利害が一致しているんだから、リコたちと共同戦線を張るっていうのもアリかもね」
　わたしは食堂のテレビをぼんやり眺めながら、独り言のように云う。
　霧切はこちらをちらりと見ただけで、特に何も云わなかった。彼女は先ほどから文庫本を読んでいる。わたしが貸したミステリだ。
　テレビでは、この前の『形代島』の事件についてのニュースが流れていた。どうやら西湖彩子は無事に事件を解決したらしい。詳細についてはまだ報道されていないけれど、島全体が海抜２メートルの位置で水平方向にスライドする仕組みになっていて、それを利用した不可能犯罪が行なわれたらしい。さすが委員会の規格外トリックだ。
　ちなみに顔がえぐり取られていたのは、バールストン・ギャンビットの変則系だったようだ。仮にもゼロを一つ持っている西湖にとっては、なんてことない真相だっただろう。
　わたしは食堂のテーブルに突っ伏して、ひたすら時間が過ぎ去っていくのを待つ。勉強しようと思って広げた教科書は、すでに落書きだらけだった。
「このまま何事もなく一週間が過ぎて、気づいたら卒業まで時間が経ってた、なんてことにならないかな……」
「結お姉さまは、卒業後はどうするつもり？」
　霧切が珍しく話題に乗ってきた。
「まだ先のことだからちゃんと考えたことないけど……とりあえず大学には行くつもりだよ。もちろん探偵をやりながらね」
「そう」
「経営関係の資格が取れるところがいいな。大学卒業後にはとりあえず何処かの探偵事務所に就職して……ゆくゆくは独立するんだ。五月雨探偵事務所なんてどう？」
「ふふっ、いいわね」
　霧切はかすかに笑った。

なんだろう、今日は珍しい日だ。
「そしたら霧切ちゃんも雇ってあげる」
「それならもう結お姉さまとは呼べないわね。結所長？」
「恥ずかしいからやめて」
　――ふと思い出す。
　彼女と初めて会った時にも同じようなやり取りをしたっけ。あれからたった二か月しか経っていないのに、なんだかもう一生分の経験をしたような気がする。
　わたしは食堂の時計を確認した。まだ正午過ぎ。挑戦状を開封してからというもの、時計の針の進みがとても遅い気がする。
「先は長いなあ……」
　その時、携帯電話が鳴った。
　わたしはのろのろと腕を伸ばして、液晶画面を確認する。
　非通知だ。
　ん？　もしかして……
「――はい」
　耳を澄ます。
　しかし相手は黙ったままだ。
　悪戯電話だろうか。わたしは首を傾げて、霧切に目配せする。
「もしもーし？　どなたですかー」

『結さん……』

「リコ？」
　やっぱりリコの声だ。
　でも何か妙だ。いつものふわふわとした調子ではない。
　ケータイをスピーカーモードにして、霧切にも聞こえるようにテーブルに置く。
『あまり長くは喋れません』
「何？　なんなの？」
『「黒の挑戦」です……最初の被害者が出てしまいました』
「被害者？」

『被害者の名前は――ジョニィ・アープ。眉間を狙撃され、遊園地内の「ミラーハウス」という建物内で死亡しました……』
「えっ、えっ？　ちょっと待って？　ジョニィが死んだ……？」
　にわかには理解できない。意地悪な冗談だろうか。しかし冗談というにはリコの声が切迫しすぎている。動揺しているというか、息も絶え絶えというか……
『そして……もうすぐ第二の被害者が出ます』
「どういうこと？　二人目は誰？」
『僕です』
「は？」
『右肩、右大腿部、左足首……たぶん他にも数箇所、被弾しました。他に……首の右側に切り傷……かなりの出血です。元々血圧が高い方ではないので、すぐにショックで死ぬということはないと思いますが……』
「リコ！　しっかりして！　何があったの？　今何処？」
　心の何処かではまだ、彼が突然くすくすと笑いだし、『冗談です』と云うだろうと考えていた。むしろそうであってほしいと思っていた。
　それなのに――
　彼は、本当に、今にも死にそうな声で続ける。
『僕はまだ「エデンサイド遊園地」にいます……挑戦状に書かれている現場です』
「刺客にやられたのね？」
　霧切が会話に割り込む。
『はい。残りは三名。「M60」と「ドラグノフ」はジョニィさんがすでに排除しました。残りは全員この遊園地にいると思われます……』
　ゲームはいつの間にか、壮絶なコロシアイに発展していたようだ。まさかジョニィとリコのコンビが追いつめられるなんて。早々に無視を決めたわたしたちの判断は正しかったと云える。
　けれどこのままリコを放っておいたら……
『事件解決のために……ジョニィさんが撃たれるまでの状況をお伝えしておきます』
　リコは遊園地で起きた出来事を淡々と話した。彼が最後の気力を振り絞って、わたしたちに連絡してきたのは、そのためだという。真相究明のために少しでも情報を伝えようとする――実に探偵らしい姿勢だ。
『結さん、響子さん……ごめんなさい……本当は連絡すべきではないと、わかってはいたんです。僕が

助けを求めれば、お二人は絶対にここに来てしまう……襲撃者たちが僕にとどめを刺さずに生かしているのも、そういう理由があるからでしょう。助けに来た仲間を撃つ……狙撃手の常套手段です。わかってはいましたが……でも……』
「それ以上云わなくていいわ」霧切はわたしの方を向いて云う。「ねえ？　結お姉さま」
「もちろん」わたしは語気を強めて云った。「リコ、そこで待ってなさい。お姉さんたちがすぐに助けに行くから」
『ごめんなさい……』
　彼の声はそこで途絶えた。回線はまだ繋がっていたけど、いくら呼びかけても返事しない。返事ができる状態ではないのか、それとも気絶してしまったか……
　向こうのケータイのバッテリーのことを考えて、やむを得ずこちらから通話を切った。
　わたしたちは部屋に引き返し、装備を整える。ジョニィとの勝負はもうなくなってしまったけど、彼が貸してくれた銃と弾丸が、きっと役に立つだろう。戦いはまだ終わってはいない。
「霧切ちゃん、ちょっと」
　部屋を出る前に、彼女を呼び止める。
　振り向いた彼女の手を取って、わたしはそこに自分の手を重ねた。
「何……？」
「無事を祈るおまじない」
　敵はジョニィたちを負かした相手だ。しかもジョニィたちとは違い、完全に殺す気で襲ってくる。もはや命の保障は何処にもない。
「おまじないなんて、非科学的よ」
　戸惑う彼女の手を、わたしは強く握り直す。
「こういうのが最後の支えになったりするものだよ。ついでにおでこにチュウしてあげようか？　もっと効果的なやつ」
「いらないわ」
　霧切はわたしの手を振り払い、部屋の扉を開ける。
　外に出ようとしたところで、思い直したように振り返った。
「やっぱり、して」
　わたしは彼女の前髪をかき上げ、額にそっとキスをした。
　彼女は額を手で押さえながら顔を伏せて、すぐに部屋を出ていってしまった。

二時間後、わたしたちは『エデンサイド遊園地』の５キロ手前の位置で、タクシーを降りた。
ここからは徒歩で向かう。たとえ５キロ離れていたとしても、用心するに越したことはない。前回のジョニィとの勝負はいい教訓になった。無闇に身体をさらさないように、掩蔽を意識して進む。
途中、雪上にタイヤのスリップ痕を見つけた。その痕跡の先には崖があり、ガードレールが派手に壊されていた。周辺には空の薬莢が散らばっている。
「リコが云っていたやつだね」
彼らは道中で『M60』を追い払ったらしい。おそらく崖下には、ひしゃげたトラックが転がっているだろう。
「もしかしたらリコの話が全部嘘ということもありえると思っていたけれど、これだけの物証を見せられたら信じるしかないわね」
霧切は腕組みして云った。
あの差し迫ったリコの声を聞いてもなお、嘘の可能性を考えるあたり、さすがは霧切響子だ。
「崖の下も確認する？」
「必要ないわ。先を急ぎましょう」
わたしたちは再び歩き出す。
霧切の推理では、今回の『黒の挑戦』の犯人は五人で、記載された凶器（武器）をそれぞれ持っているとのことだったが、リコの証言でもそれが裏付けられた。
そして犯人たちは標的の一人であるジョニィ・アープの殺害に成功した。
次の標的は、霧切響子だ。
もちろんそんなことはさせない。
わたしはあらためてそう胸に誓い、雪道を急ぐ。
いよいよ遊園地に近づいた辺りで、わたしたちは道路から山の中へと分け入った。正面から近づけば撃たれるのは間違いない。側面から回り込み、まずは高い場所から全体を把握する。
無事、狙撃されることなく高所にたどり着いた。
わたしたちは森の中に身を隠しながら、遊園地を見下ろす。
遊園地の敷地はここからおよそ４００メートル先、眼下に見えるフェンスを境に、その奥へと広がっている。フェンスの近くに見えるのはジェットコースターのレールだ。錆のせいで全体的に赤黒く、遠目からは、爆発的に成長した気色の悪いツタ植物のように見えた。
ジェットコースターのエリアの少し向こう側に紫色の四角い建物がある。建物の横に自動車が一台、停められている。双眼鏡でよく観察すると、銃撃されて穴だらけになっているのが確認できた。

「リコたちが乗ってきた車だね。ということは、あの建物が『ミラーハウス』か……」
　そこからさらに遊園地の中央へ視点を移動する。
　雪上に点々と赤いものが見えた。
　――血？
　それを目で追っていくと、そこからさらに離れた中央広場の涸れた噴水へと続く。
　噴水の傍らに、誰かが倒れていた。
　リコだ。
　彼は噴水の石垣に身を寄せるようにして横たわっていた。周囲の雪が真っ赤に染まっている。動く様子はない。右手に握り込んでいるのは携帯電話だろうか。ここからの距離、およそ700メートル――
「呼吸しているわ」霧切は倍率の大きいスコープを覗いて云った。「まだ生きてる」
「ほんとっ？　よかった……」
「自分で止血を試みたようね。腕や足に止血帯が巻かれている。それでもあの出血では、そう長くはもたない」
「早く助けなきゃ！」
「落ちついて。今行けば撃たれるわ」
「でも……」
「まず私たちがすべきことを確認しましょう」霧切はスコープを下ろす。「結お姉さま、私たちはなんのためにここに来たの？」
「それはもちろん……リコを助けるため」
「そうね。彼を助けるにはまず、安全を確保しなければならない。そのためには敵を排除する必要があるわ」
「それは……わかってるけど……」
「ジョニィ・アープとの戦いでやってきたことと同じよ。標的を見つけ、気づかれないように近づき、確実に狙撃する」
「うん」
「問題は、どうやって標的を見つけ出すか。残りの三人の刺客たちが、この遊園地の何処かにひそんでいるのは間違いない。でもうかつに動き回れば、リコたちと同じ結果になる」
「それじゃあ、わたしがオトリになる！　今回の探偵役はわたしだから、彼らはわたしを傷つけることはできない。だからわざと広場に出ていって――」
「賛成できないわ」霧切は首を横に振る。「今回の『黒の挑戦』は特殊よ。今まで通り探偵への攻撃を

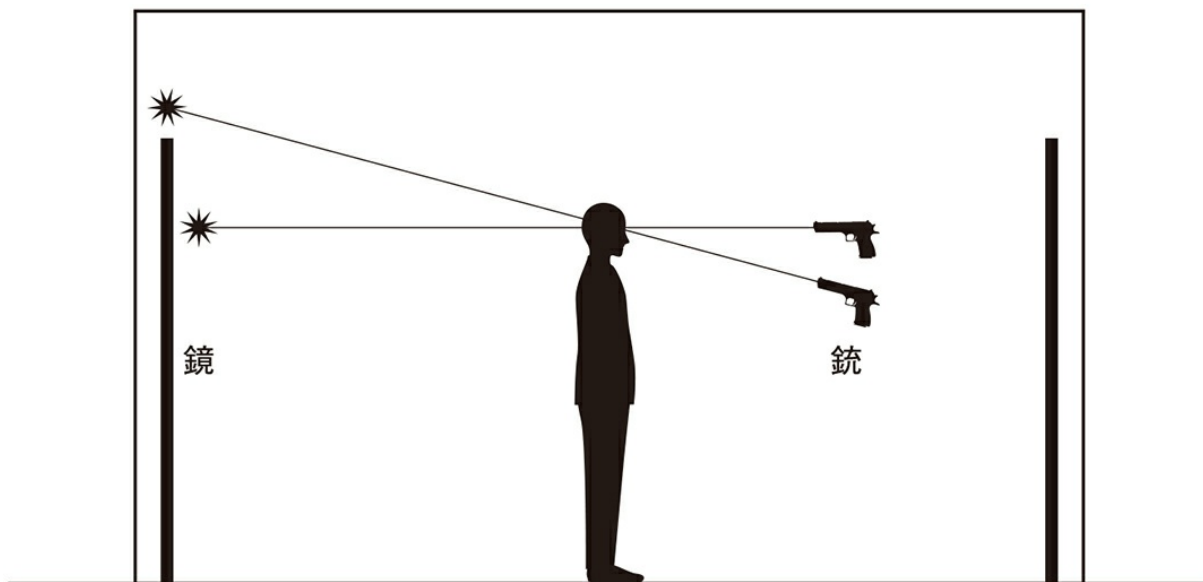
タブーにしているとは限らない」
「そうかな？　あいつらってルールにはこだわるから、そういうルール変更はしない気がするけど……」
「ルールはそのままでも、刺客たちがルールを守るかどうかはまた別の話。それに――仮にルール通り『探偵を傷つけてはならない』のであれば、そもそも結お姉さまがオトリとして飛び出したところで、彼らは撃ってくるかしら？　傷つけてはいけないんだから、撃とうとは思わないでしょう？」
「あ、そっか」
　わたしはようやく思い至る。わざと相手に撃たせて、位置を暴く作戦は成功しない。
　それならわたし一人で、堂々とリコのところまで行って、彼を安全な場所まで運べば――いや、やっぱりルール変更の可能性を考えたら、安易な行動は避けるべきか。
　うーん……どうすることもできない。
「刺客たちの居場所を推理する材料は揃っているわ」霧切が云う。「武器の特徴、リコの証言、それにジョニィ・アープが殺害された状況――それらをもとに居場所を特定して、排除するのよ」
　そうだ、わたしたちはあくまでも探偵――
　わたしたちの武器は銃ではなく、この頭だ。
「おそらく彼らは狙撃地点を移動していない。何故なら、リコを餌に使っているということは、ずっとリコの周辺に照準を合わせ続けているということだから」
「なるほど……」
「ただし『スローイングナイフ』だけはわからないわね。少なくともリコの近く、投げナイフが届く距離にひそんでいるのではないかと思うけど」
　残り三人の刺客――
　その中でリコが直接姿を確認できたのは、『スローイングナイフ』だけらしい。彼の話によると、ギリースーツで全身をカムフラージュした小柄な女性だという。雪の中にひそんでいた彼女の不意打ちにより、ジョニィは肩を負傷した。リコの首に切りつけたのも彼女らしい。
『スローイングナイフ』とは文字通り投げナイフのことで、投げやすいように加工されたものだ。狙撃手にとっては相性の悪い相手といえる。
　そのギリースーツの女が、もともと殺しのプロなのか、それとも復讐の日が来ることを願って投げナイフの訓練を積んできた素人なのか、それはわからないけど……わたしたちにとって、厄介な相手であることには変わりない。
「『Ｍ４』に関しては、狙撃というより『数撃ちゃ当たる』作戦みたいだね」わたしは云った。「手法は素人みたいだけど、このフィールドを考えたら理に適ってる。位置を悟らせないようにサプレッサーを装着してい

る辺り、いやらしい相手だな」
　リコたちに乱射を浴びせたのは『M4』で間違いないだろう。
『M4』は軍用アサルトライフルの中でも、取り回しやすくコンパクトに設計されたカービン銃の一種だ。有効射程距離は500メートル。市街地戦や屋内戦闘など、中・近距離での運用を想定している。特殊部隊向けに、サプレッサーやレーザーサイトなど、多数のオプションが用意されていることでも有名だ。
　残りの一人──『TAC50』は、車のボンネットに穴を開け、リコたちを自分たちの縄張りである遊園地へと追い込んだ張本人だ。
　銃全長約150センチのバケモノみたいなアンチマテリアルライフル。有効射程距離は1800メートルとされているが、戦場では実際に2000メートルを超す距離での狙撃が記録されている。超長距離狙撃のためのスナイパーライフルだ。遊園地の敷地外に潜伏している可能性も高い。
「リコたちが、入場ゲート手前の駐車場で、正面から『TAC50』の狙撃を受けたとすると、位置はかなり絞られてくるわ」霧切はスコープで左手奥の山を眺める。「あの辺りにいてもおかしくないけれど……」
　霧切は首を傾げている。
「向こう側を調べてみる？」
「いいえ、それよりもっと優先的に調べておくべき場所があるわ」
「何処？」
「『ミラーハウス』──殺人現場よ」

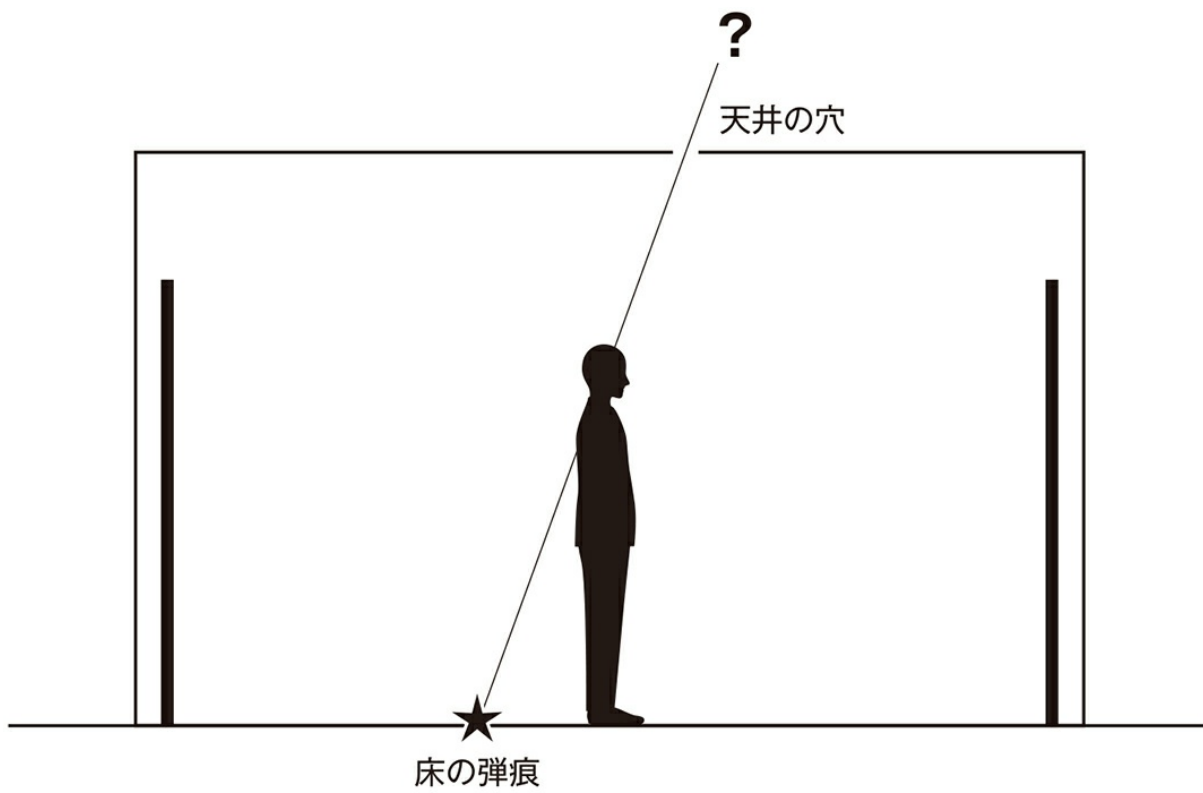
4

　わたしたちは山のふもとまで下り、フェンスを乗り越えて遊園地の敷地内に潜入した。
　今のところ周囲は静まり返っていて、銃声は聞こえてこない。霧切はすでに敵のおおよその位置を把握していて、どの方角に気をつければいいのか心得ているようだった。
　ジェットコースターの支柱の間を縫って移動し、『ミラーハウス』の裏口にたどり着く。
　ここまでは問題ない。けれどここから先は……
「わたしが先に行く」
　わたしは裏口の扉を開けて、中へ滑り込んだ。
『ミラーハウス』の名前の通り、あちこちに鏡が置かれていて、中は迷宮のように入り組んでいた。しかも照明がなく、真っ暗なため、暗視スコープで視界を確保しながら進む。

敵がここにひそんでいてもおかしくない。わたしは盾になる覚悟で、霧切の手を引いて歩く。
角を曲がるたびに、鏡に映る自分の姿に驚いて、震えあがった。これがデートなら、笑い話にでもなっただろうに……
建物に入った時から、独特な血の臭いが漂っていたけれど、その角を曲がった時、急に臭気が濃さを増した。
鏡によって作られた十角形の部屋の中央に、頭の半分ない屍体が仰向けに倒れていた。
ジョニィ・アープ――
わたしたちにとって彼は敵だし、こんなことになったのは自業自得だろうけど……こんなふうに無惨に殺されていいはずがない。
わたしたちはその場で足を止めず、一通り屋内の安全を確認してから、現場に戻った。暗視スコープから懐中電灯に切り替える。
リコの証言によると、事件当時この建物は密室だったという。裏口にはジョニィと『スローイングナイフ』の二人ぶんの足跡しかなく、表の入り口は内側から鍵がかかっていた。
「状況から云えば確かに密室だけど……『スローイングナイフ』が犯人なら、密室でもなんでもないんじゃない？」
「そうね」霧切は屍体の傍に屈みこんで云う。「でもこの致命傷になった頭部の破壊は……ナイフでどうこうできるような状態ではないわ」
「『スローイングナイフ』が実は銃を持っていて、とどめをさすのに撃ったとか？」
「それだと不可解な点があるわ」
「不可解？」
「周囲の鏡がまったく割れていないのはおかしいでしょう。被害者の状況からみて、弾丸は頭部を破壊したあと貫通しているはず。もし『スローイングナイフ』がジョニィ・アープを追って、この部屋に駆け込んだあと、彼を撃ったのだとしたら、おそらく弾丸は部屋の反対側の鏡を撃ち抜いているはず。けれど鏡は割れていない」
「ああ、確かに……」
「ただし、こうも考えられるわ。リコの話では、『スローイングナイフ』は小柄な女性だった。つまり彼女が被害者のジョニィ・アープと対面した時、相手の頭部を狙うと、射線は少し斜め上に向けられる。この部屋の鏡は天井まで繋がっていないので、弾丸は鏡から外れて壁に当たった……」
「それなら壁に弾丸がめり込んでるはずだよね？」

鏡
銃

わたしは霧切が指差した辺りを眺めた。
　見たところ、弾痕らしきものは見当たらない。部屋をぐるりと見回してみても、何処にも弾痕はなかった。
「どういうことだろう？」わたしは首を傾げる。「たとえ誰が撃ったにしろ、状況を考えたら、壁か鏡に弾丸が当たっていなければおかしいんだけど」
　ジョニィは別の場所で撃たれて、ここに運ばれてきた？　それなら部屋中に飛び散っている血痕は偽装だろうか。なんのためにそんなことを？
　霧切は相変わらず屍体を丹念に調べている。
「結お姉さま、少し手伝って」
　彼女は屍体の腕を持ち上げて、仰向けの状態からうつ伏せにしようとしている。
　わたしはなるべく砕けた頭部の方を見ないようにしながら、霧切と一緒に屍体を転がすようにして、うつ伏せにした。
「あっ」
　いくら鈍いわたしでもすぐに気づいた。
　屍体をどかした床の上に、はっきりと弾痕が残されていた。
「こんなところにあった！」
「思った通りね」霧切は腰に手を当てる。「仮に被害者が部屋の中央辺りに立っていたとして――被害者の頭部と、床の弾痕を結ぶ射線は――」
　霧切は天井を見上げる。
　懐中電灯の明かりを、黒い天井の一点に向けた。
　丸い染みのようなものが見える。
「結お姉さま、あそこに届く？」
「お安いご用」
　わたしは垂直跳びで天井の染みに触れる。
　妙な違和感があった。それは染みというより、丸い窪みといった方が正しい。
「なんか変だ。ちょっと待って」
　わたしは肩にかけていたケースを下ろして、レミントンＭ７００を取り出す。銃の肩当ての辺りを手に持って、銃身の先で天井の窪みを突いてみた。
　すると蓋が外れるような感触があって、穴が開いた。
　穴の向こうには、どんよりとした色の空が見える。

「弾丸はあそこから入ってきたってこと？」
「そのようね。狙撃するためにあらかじめ穴を開けておいたのではないかしら。ただし、ずっと穴が開きっ放しでは被害者に怪しまれる可能性があるから、リモコンで開閉できるシャッターのようになっていて、狙撃する時だけ開けるようにしておいたんでしょう」
　密室には文字通り穴があったというわけか。
「手が込んでるというか……やることが細かいな」
「委員会お手製ならともかく、これが狙撃手の自前のやり口だとしたら、嫌な性格をしていると思うわ」
「穴の直径はせいぜい5センチ程度しかないけど、犯人はこの穴を通してジョニィを狙撃したというの？　まるで針穴に糸を通すようなもの……いや実際にはそれよりはるかに難しいと思うけど……」
「信じがたい狙撃だけど、この前の彼の方がすごかったわ」霧切は足元の屍体を見下ろす。「結お姉さま、あまり穴を覗き込まない方がいいわ。また弾が飛んでくる可能性はあるから」
「わわっ」わたしは慌てて天井の穴から距離を取る。「それにしても……この射線をたどると、かなり高所からの狙撃になるはずだ」

?
天井の穴
床の弾痕

周囲を取り囲んでいる山の一つから狙撃したのだろうか。しかし山からの狙撃では、ある程度の高さは確保できても、標的までの距離が伸びるため、着弾地点は実際より壁寄りでなければおかしい。
　もっと近い場所からでなければだめだ――
「観覧車だ！」
　わたしは思いついて云う。
　霧切は最初からわかっていたような顔つきで肯いた。
「観覧車の一番上にあるゴンドラからなら、この狙撃が可能かもしれない」
「屍体の状況や、弾痕の大きさからみて、狙撃手は『TAC50』とみて間違いなさそうだね」
「そうね。『M4』の5・56ミリ弾ではここまでひどいことにはならないでしょう」
　とうとう一人の居場所を掴んだ。
『TAC50』は観覧車のゴンドラの中だ。
　そしてそいつがジョニィ・アープを殺害した犯人だ。
「さて、観覧車の一番てっぺんにいるやつをどうやってやっつけようか。そもそもあの観覧車って動くのかな……って、霧切ちゃん、さっきから何やってるの？」
　霧切は部屋を取り巻く鏡に順番に触れて歩いていた。
「これね」
　彼女は何かに気づいた様子で、鏡を壁から外そうとする。
「どうしたの？」
「これ、マジックミラーよ」
「え？」
　霧切が少し力を込めると、壁にかけられていた鏡が簡単に外れた。確かにそれはマジックミラーだった。
　そして鏡を外した奥には空洞があって、そこにビデオカメラが置かれていた。カメラは複数のコードに繋がれている。
「何これ……」
「狙撃手が用意したものよ」
「どうしてこんなものを？」
「この狙撃を成功させるためには、天井に小さな穴を開けるだけでは足りないのよ。どんなに視力がよくても、遠くからあの穴を通して、標的を目視することなんてできないでしょう？」
「あっ、そっか……」

「だから標的の位置を確認するための道具が必要なの。それはきっと室内にあるはずだと考えたのだけれど、案の定、鏡の中に隠していたわね」
「狙撃手はこのカメラの映像をリアルタイムで確認しながら、狙撃のタイミングを測っていたんだね」
　カメラは暗視モードに設定され、暗くても室内の様子がわかるようになっていた。しかもご丁寧に、撮影中を示すランプがテープで封印され、マジックミラー越しにばれないように配慮されている。やはりやることが細かい。
「この映像を今も相手が見ているんだとしたら、わたしたちの行動はバレバレだけど……」
「だとしたら――投降をお勧めするわ」
　霧切はカメラ目線で、冷ややかに云う。
　今の声が犯人に届いただろうか。

　わたしたちは殺人現場の検証を終えて、裏口から外へ出た。
　裏口は観覧車から死角になっているので、少なくともあちらから撃たれることはない。
　観覧車の中にいる狙撃手は、ビデオカメラの映像から、すでにわたしたちの存在に気づいているはずだ。すぐにでも引き金を引きたくてうずうずしているに違いない。
　わたしたちは建物の陰から、デジカメだけを外に出して、観覧車方向の写真を撮影した。頭を出さずに索敵する手法だ。もちろんフラッシュは切ってある。もしかしたらカメラを狙撃される可能性があったけれど、撃たれずに済んだ。
　霧切と一緒に写真を確認する。
　赤錆びだらけの観覧車は、終末後の世界を思わせるような、不吉な遺物に見えた。
　ゴンドラは全部で三十二台。いずれも丸い棺桶にしか見えなかった。
　一番高い位置にあるゴンドラを確認する。ゴンドラの上半分は硝子張りになっている。しかしそこに銃を構えた人物の姿は確認できない。
「あ……」霧切は小さく声を漏らす。「私はとんでもない勘違いをしていたわ」
「何？　どうしたの？」
「見て、お姉さま。観覧車のゴンドラの奥行きは、せいぜい130センチ程度……」
「あっ」ようやくわたしも気づく。「『TAC50』は全長約150センチ――もしサプレッサーを装着していた場合、もっと長くなる。これじゃあ、ゴンドラに乗せることもできない」
　より正確に云えば、斜めに持つなどしてゴンドラに乗せること自体は可能だけど、少なくとも『ミラーハウス』方向に射撃することはできない。おそらく駐車場方向に撃つことも不可能だろう。

あるいはゴンドラの窓硝子を全部割って取り除いておけば、銃を構えるくらいはできるかもしれないが、太い銃身が必ず外にはみ出すことになる。それでは自分の居場所はここだと知らせているようなものだ。しかも逃げ場がない。

針の穴に糸を通すほどの狙撃手なら、そんな不都合な場所を狙撃地点に選んだりはしないだろう。

「『TAC50』は観覧車には乗っていないってこと……？」

ゴンドラだけではなく観覧車全体に範囲を広げて調べる。外周のフレーム、メンテナンス用の足場なども注意深く探したけれど、人の姿は見当たらない。

何が間違っていたのだろう？

そもそもジョニィ・アープの頭部を粉砕したのが『TAC50』ではなかった？　そんなはずはない。あの悪魔的な破壊は五十口径によるものと考えていい。

それなら、わたしたちが推理した狙撃ポイントが間違っていた？

室内に残された痕跡から導き出される射線は、高所から撃たれたものであることは間違いない。監視用のカメラが設置されていた事実から考えても、天井の穴が狙撃に使われたのは確かだろう。

観覧車以外に、狙撃ポイントは存在しないはずだ。

しかし観覧車の狭いゴンドラでは、『TAC50』を使用することはできない。

密室狙撃の謎は振り出しに戻ってしまった……

「これを見て」

霧切がデジカメの写真を指差す。

観覧車の一番下にあるゴンドラをアップにすると、そこに意外なものが映っていた。

黒いライフルだ。

これは……『M4』に違いない。

『M4』カービンは全長85センチ。サプレッサーを足しても100センチに満たないだろう。ゴンドラ内でも充分に取り回すことができる。

「どうしてここに『M4』が……」

射手の姿は映っていない。

よく見ると、少し不自然な写真だった。『M4』はゴンドラの中央に、まるで宙に浮くような形で置かれている。たとえば座席にベンチレストなどで銃を固定すれば、このように見えなくもないだろう。けれどゴンドラの中央は人が出入りする場所なので、そもそも座席はない。ということは、何か台のようなものをそこに置いて、その上に銃を設置していることになる。

けれどそれでは、射手の居場所がない。

「結お姉さま、観覧車の近くまで行ってみましょう」
「でもどうやって……？　この建物の死角から出た途端、観覧車から撃たれるんじゃない？」
「それは大丈夫よ」
　霧切は云う。何か確信があるのだろうか。
「でも正面から近づくのは危険だわ。いったん敷地を出て、外から回り込んで、観覧車の裏側から近づきましょう」
「わかった」
　わたしたちは『ミラーハウス』を離れ、フェンスを乗り越え外に出た。木々の多い山の中腹まで移動し、そこから遊園地の敷地の外を迂回して、観覧車へ向かう。
　途中、何度か足を止めて、双眼鏡で周囲を観測する。
　敵はいない。
　それどころか、足跡一つ確認できない。
　まるで無人の中、見えない敵と戦っているみたいだ。
　噴水近くのリコを確認する。さっきと変わらず横たわったままだ。一刻も早く彼のもとにたどり着かなければ……
　わたしが探偵になったのは、救いを求める人を助けるためだ。今まさに死にかけている彼を助けられなきゃ、探偵をやってきた意味なんかない。
「結お姉さま」
　霧切に呼ばれて我に返る。
「ごめん、急ごう」
　わたしたちは観覧車の裏側へ回り込んだ。
　木々の間に身を隠しながら、再度デジカメで周囲を撮影する。
　写真を確認して、わたしたちは戦慄した。
　観覧車の三十二台のゴンドラすべてに、『M４』カービンが搭載されていた。
　写真を見て思わず鳥肌が立ったほどだ。
　得体の知れないモンスターに出会ったような気分だった。
「なんなのこれ……」
「思った通りだわ」霧切は観覧車へ近づいていく。「結お姉さまも来て」
　わたしたちはフェンスを越えて、再び遊園地の敷地に侵入した。
　観覧車の巨大な支柱はすぐそこだ。

音を立てないように、慎重に近づく。
途中、うっかりつまずいて、足元にぽっかりと開いた丸い穴に落ちそうになり、わたしは悲鳴を上げそうになった。蓋が割れて開いたままになっているマンホールだった。なんとか口元を押さえて、悲鳴を飲み込む。
霧切はそんなわたしのことには気づかず、一人先に観覧車の真下にもぐり込み、作業台に足をかけて、背伸びする。一番下にあるゴンドラを覗き込もうとしているようだ。わたしもすぐに彼女に続いた。
ゴンドラの中を覗くと、中央に『M4』が三脚で固定されていた。引き金にスイッチのようなものが設置され、さらにそこからコードが延びている。
コードの先にはノートパソコン。二台、座席の上に並べられている。どちらも蓋が閉じられているが、起動はしているようだ。
「これってまさか……」
「コンピュータ制御された無人兵器ね」
刺客の一人、『M4』は無人兵器だったのか――
タレットやセントリーガンと呼ばれる自動砲塔は、センサー技術の向上によって実戦レベルにまで進化している。これからの時代の探偵は、無人の凶器の存在も視野に入れていかなければならなくなるだろう。
「168時間いつでも撃てるように、三十二台必要だったんでしょう。発砲するのは常に一番上の銃で、弾丸やバッテリーが尽きたら、観覧車を回転させて、次のゴンドラを一番上に移動させる。まるで巨大なリボルバーね」
「またとんでもないものを作ったもんだ……」
「中を調べてみましょう」
「近づいて大丈夫？」
「この機械、背中が弱点みたい」
霧切は足場を伝って、ゴンドラの割れた窓から、中に飛び込んだ。わたしも急いであとに続く。その拍子にゴンドラがぐらぐらと揺れて、ちょっとしたアトラクション気分を味わえた。
「君と観覧車に乗るんなら、こんな日じゃない方がよかった」
「私もそう思うわ」霧切はそっけなく云って、座席の上のノートパソコンを開く。「ふうん……そう……これは動体検知ではなく、顔認証で作動するみたいね」
「どういうこと？」
「銃のマウントレールに小型のカメラが取り付けられているでしょう。そのカメラで、登録された標的の顔

を検知した場合、発砲する」
「ジョニィとリコは、これにやられたんだね」
「私の顔写真も登録されているわ。最近撮られたものみたい。いつ撮られたのかしら」
「でも『ミラーハウス』に近づく時に、霧切ちゃんは撃たれなかったよ」
「ええ、観覧車に狙撃手がひそんでいる可能性は常に考えていたから、なるべく射線に身体をさらさないように気をつけていたわ。フェンスを越える時が一番危なかったけど、ここからだいぶ距離があるし、私を認識できなかったのかもしれないわね」
「観覧車に敵がいるってわかってたの？」
「敷地内で一番高い場所だもの、普通はそう考えるでしょう。まさか無人兵器だとは思わなかったけど」
　云われてみれば確かに、もっとも怪しい場所の一つかもしれない。
　デジカメの写真を確認したところ、一番上のゴンドラの窓は割れていないけれど、一つ右隣のゴンドラの窓は、正面の一部が円形にくりぬかれたようになっていた。おそらくジョニィやリコを狙った銃撃の際に、無数の弾丸が窓を撃ち抜いた痕跡だろう。そしてそのあと、観覧車は一度リロードした。円形にくりぬかれた窓は、霧切の説を裏付ける証拠といえるだろう。
「さて……この巨大リボルバーをどうしようか？　パソコンを一つ一つ壊していたら時間がかかるけど、かといって放置していたら危ないし、このままじゃリコを救出しに行けない。何かいいアイディアはない？　霧切ちゃん」
「そうね……」彼女は五秒ほど考えて、続けた。「観覧車を動かして、一番上にゴンドラがない状態で停止させておいたらどうかしら」
「なるほど、頭いい！」
「問題はどうやってゴンドラを動かすか、だけど……」
「乗り口の横に、操作小屋があるよ」わたしは指差して云った。「よく係員がああいうのを操作しているのを見るけど、簡単にできるものなのかな」
「たぶん鍵が必要だと思うわ」
「鍵か……ないだろうな……」
　あったとしても、委員会が放置しておくとは思えない。それとも、委員会ならフェア精神に則(のっと)って、鍵を置いておくだろうか。
「わたし、ちょっと小屋の中を見てくるよ」
「平気？」
　霧切が心配そうにわたしを見上げる。

「わたしの顔写真は登録されてないんでしょ？　それなら心配することもないよ」わたしはゴンドラから飛び降りた。「霧切ちゃんも、そこから降りといてね」
「うん」
　わたしはおそるおそる操作小屋へ近づく。三十二台すべての銃がこちらを向いているような気がして、冷や汗が止まらなかった。
　危険なのは『M4』だけではない。『TAC50』が何処にひそんでいるのか結局わからずじまいだし、『スローイングナイフ』に至っては、まるで見当もつかない。
　わたしは身を屈めた状態で、操作小屋に駆け込んだ。
『操作盤』と記されたプレートを見つけたが、肝心のその場所はキャビネットになっていて、当然のように鍵がかけられていた。
　けれどここで折れるわけにはいかない。
　わたしは自前のリュックの中から、七つ道具の一つ、マイナスドライバーを取り出した。
　ドライバーの先端を、キャビネットの蓋の隙間に差し込んで、てこの原理でこじ開ける。
　意外にも簡単に蓋が開いた。
『操作盤』には無数のスイッチや計器類が並んでいた。一瞬戸惑ったけど、蓋の裏側に、操作の手順が丁寧にメモ書きされていた。おそらく緊急時に、経験の浅い係員でも操作できるようにとの配慮だろう。
　手順に従って、ボタンを押していく。
　すると、地獄から響く悲鳴のような軋みを上げながら、観覧車が動き出した。無人兵器なりの断末魔だろうか。
　それからすぐに停止ボタンを押す。確認すると、一番上にゴンドラが不在の状態になっていた。
　リモートコントロールができないように、主電源を落とす。
「これでよし」
　ついでに、あとから誰かが操作できないように、いくつかのスイッチを壊して、手順のメモ書きも回収しておいた。
　急いで霧切のところに戻る。
「これで『M4』の排除完了！」
「残りは二人ね」

わたしたちは遊園地の敷地をいったん出て、白樺の木の傍に身を寄せ合って、作戦会議を開く。
　霧切は解析のために、ゴンドラの中からノートパソコンを一台持ち出していた。それによると、自動兵器プログラムを作ったのはジョシュア・リンドバーグという男で、日本の中学生が作ったとされる優秀なAIプログラムを盗作して、独自に悪用したものらしい。プログラムには、顔認証による自動追尾機能が設定されているが、『ミラーハウス』にあったカメラ映像とはリンクされていなかった。
『M４』が『ミラーハウス』内のジョニィ・アープを狙撃するには、銃に設置されたカメラで室内のジョニィを認識するしかないが、天井の小さな穴からでは、ほんの鼻先しか検知できないだろう。それでは狙撃は不可能だ。
「弾丸の破壊力からみても、『M４』の５・５６ミリ弾じゃないことはわかりきっていたけど……むしろ問題なのは、あるべきはずの場所に『TAC５０』がなかったことだよね」
「射線から考えて、狙撃が可能な位置は観覧車の一番上しかない……けれどそこに『TAC５０』がないことは、疑いようのない事実……」
　霧切は独り言のように呟く。
「ジョニィの銃がなくなっていたことについてはどう考える？　ジョニィを撃った人物がそれを持ち出したのだとしたら、少なくともそいつは現場に出入りしているってことになるよね。もしかしたら、そいつが近距離からマグナムをぶっ放したのかもしれない。床の弾痕や天井の穴は、外部からの狙撃と思わせるためのフェイクで——」
「その手の推理については、周囲の壁や天井に弾痕がないことから、すでに否定されているわ」
「あ、そういえばそうだ……」
「床の弾痕がフェイクだとするなら、実際にジョニィを殺害した際の『本物の弾痕』が何処かになければならない。けれど、そういうのは何処にもなかった」
「じゃあ、こういうのはどう？　わたしたちが想定している射線を逆にしてみるの」
　霧切は首を傾げる。
「つまりね、天井の穴は弾丸を外から入れるためのものではなくて、外に出すためのものだった」
「結お姉さま……いいアイディアね」
「でしょ？　たとえばこう。犯人は床に寝転がった状態で、傍に立っているジョニィの頭部を狙って撃つ。普通なら、弾丸は天井に当たって弾痕になるんだけど、そこには例の秘密の穴があって、そのまま外へ飛び出していっちゃう。これなら『本物の弾痕』がないことの説明がつくでしょ」
「ええ、確かに」

「リコの証言では、彼が部屋に入った時、何故か『スローイングナイフ』は床に倒れていたんだよね。これって、射線を逆にするためのトリックを実行していたからなんじゃない？」
「理に適ってるわ」
　霧切は唇を指でなぞりながら云う。
　けれど彼女の表情には、何処か陰りがあった。
「何か気になる？」
「ええ……結お姉さまの推理はとてもいいと思うんだけれど……」
「いいよ、云って、霧切ちゃん」
「『スローイングナイフ』は、そのトリックで何を欺きたかったのかしら」
「ん？　どういうこと？」
「そもそも彼女はジョニィ・アープを最初から殺害するつもりで現れているし、殺意を隠そうともしていない。最初のナイフの投擲だって、当たりどころが悪ければ、ジョニィ・アープは死んでいたわけだし……『ミラーハウス』に入ったのも、標的を追いかけて殺すためでしょう？」
「うん」
「それなのに、いざジョニィ・アープの屍体が発見された段階で、『自分は殺していません』と装うようなトリックを実行する意味があるのかしら」
「それは……ほら、これってあくまでも『黒の挑戦』でしょ。犯人は探偵役に告発されたらゲームオーバーなんだから、トリックでごまかすのはセオリーじゃない？」
「それなら最初の襲撃から矛盾しているわ」
「それはそうだけど……」
「今回の『黒の挑戦』は、いつものように犯人を告発して終わりではないと思うの。彼らは告発されようがされまいが、とにかく標的であるジョニィ・アープと私を殺すことで勝利を得る。そういう基準で動いていると考えられるわ」
「うん……確かに今回の『黒の挑戦』は、発端からして委員会の陰謀によるところが大きいしね。結局のところ、ゲームに勝つ条件とは、生き残るということだけなのかもしれない」
「ええ。ただしいつものように『探偵を傷つけてはいけない』というルールだけは守られているのかもしれないわね。パソコンに結お姉さまの写真が登録されていなかったのが、その根拠よ」
「それはありがたい。君を守る盾になれる」
「そればっかり云うのね」
「委員会の考えてることは何もかも嫌だけど、このルールだけは気に入っているんだ」

だって、わたしの理想とする探偵になれるから。
　誰かを守る。誰かを救う。誰かのヒーローになる。
「だからって無茶はやめて」霧切は困ったように云う。「追いつめられた犯罪者が、ルールを守るなんて思わないで」
「わかってるよ」
　ルールなんて関係ない。
　ルールがあろうがなかろうが、わたしは誰かを守る探偵になれるはずだ。
「それで話を戻すけど……」霧切が云った。「『スローイングナイフ』がジョニィ・アープを殺害したとは考えられないわ。彼女がジョニィを銃で撃ったのなら、結お姉さまが推理したように、寝転がった状態から天井の穴に向けて撃つしかないけれど、彼女にはそれをする理由がない」
「わかった、それは認めるよ。じゃあ犯人は消去法で、残りの『TAC50』ってことになる」
「そうね」
「でも何度も云うけど、観覧車よりも近くて高い場所なんて遊園地内にはないんだよ？　現場に残された射線は、やっぱりフェイクと見るべきなんじゃないかなあ」
　しかしフェイクだとすると、誰がなんのためにそんな偽装を施したのかという話に戻ってしまう。刺客たちにとって、犯人であることを隠す意味はほとんどない。
『TAC50』は、はたして何処からどのようにして、ジョニィを狙撃したのか……？
「ねえ、霧切ちゃん」わたしはふと気になって尋ねる。「刺客たちは協力関係にあったのかな？　それとも個人戦なんだろうか。リコとジョニィが追いつめられていく流れは、まるで協力関係があったように思えるけど……」
「『M60』とか『ドラグノフ』のことを考えると、彼らが協力していたとまでは云えないんじゃないかしら。それぞれが好き勝手にやっていたとみるべきね」
「そっか……それならもし、ジョニィが『ミラーハウス』に逃げ込まなかったら、殺されずに済んでいたのかな」
「そうね……」
　霧切は少し考え込んでから、ふと思い立ったように、スコープで遊園地内を観察し始めた。
「どうしたの？」
「あの黄色い建物……」
　入場ゲート近くにある建物を指差す。
「事務所と売店だね」

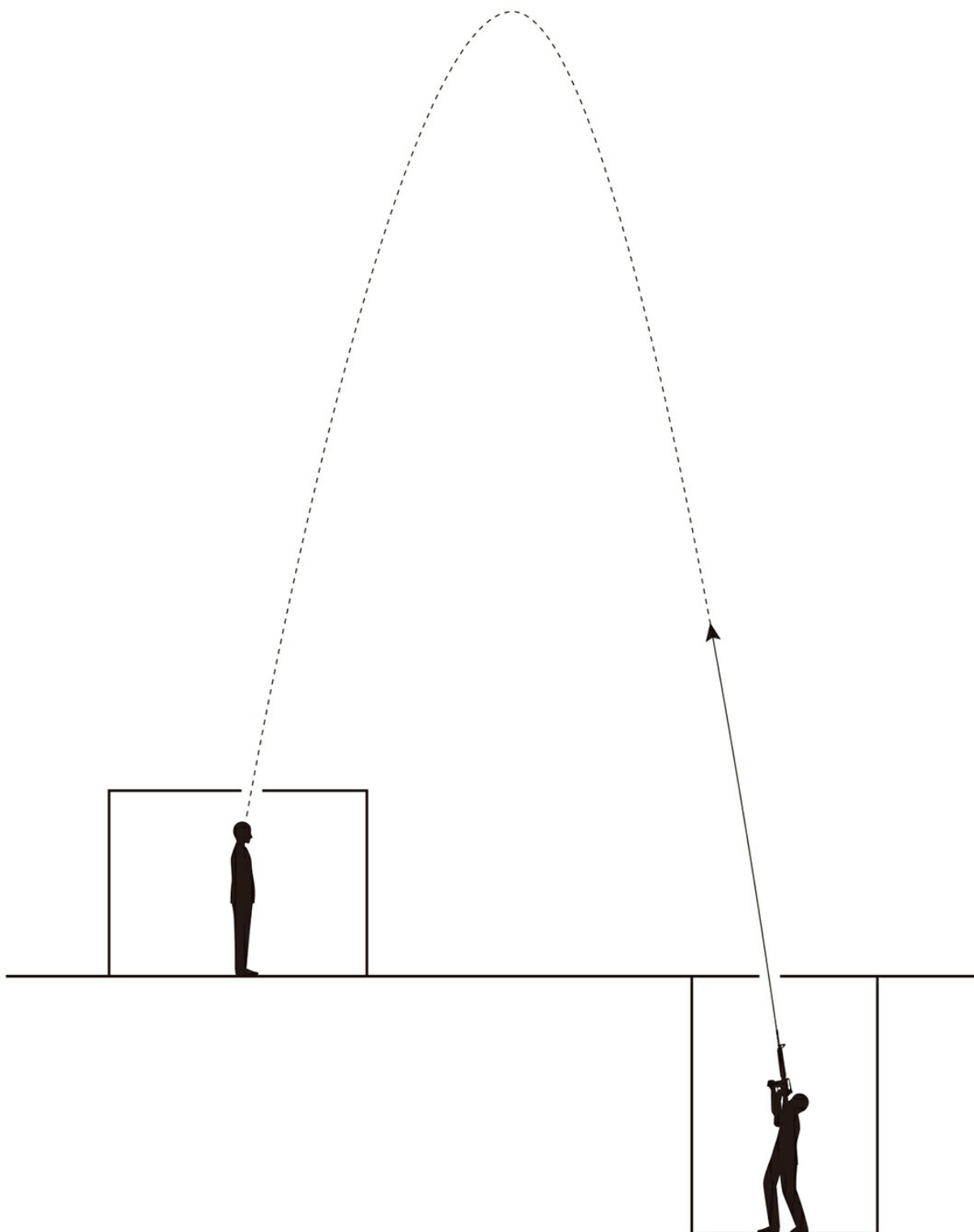
「行ってみましょう」
　霧切は突然、山を下りていく。
「ちょ、ちょっと待ってよ」
　わたしたちは例によってフェンスを乗り越え、裏口から建物に近づいた。扉には鍵はかかっていない。わたしが先に中へ入った。
　がらんとしたオフィスフロアに出た。遊園地の職員や係員が事務仕事をしていたところだろう。机や椅子が点々と散らばっている。いかにも廃墟らしく、壁はひびだらけで、貼ってあるポスターの日づけはいずれも十年以上前のものだった。
「結お姉さま、足元を見て」
　霧切が云う。
「ん……？　特に何もないけど……」
「埃がほとんど積もってないわ」
「あ、ほんとだ」
「外の雪ならまだ偽装しやすいけど、一度踏み荒らした室内の埃を元に戻すのは難しい。だから一通り綺麗に清めたのね」
「最近誰かがここに来たってこと？」
「ええ」
　当然、今回の『黒の挑戦』の関係者だろう。
　霧切はぐるりと部屋を見回し、壁の黒板で視線を止めた。おそらくスケジュール表として使われていたものだろう。一メートル四方ほどの大きさで、あらかじめ枠線がプリントされているタイプだ。特に書き込みなどはない。
「結お姉さま、こっち」霧切はわたしに、壁際に寄るように手で合図する。「あまり部屋の真ん中に出ると、撃たれるかもしれないわ」
「撃たれるって……何処から？」
「見て」
　霧切は突然、黒板の枠を摑むと、何度か上下に揺さぶった。
　すると黒板が壁から外れた。
　黒板がかかっていた壁に、妙な窪みがある。そこにビデオカメラが置かれていた。『ミラーハウス』で見たカメラと一緒だ。
　よく見ると、黒板に小さな穴が開いている。この穴を通して、カメラで室内を撮影していたということ

か。
「これって……一体何？」
「説明するわ。隣の部屋に移動しましょう」
　扉を開けて、移動する。
　小さな室内に、カウンターや商品棚が設置されている。かつての売店だろう。わたしたちはその隅に身を隠すように、顔を寄せ合う。
「結お姉さまはさっき、『もしジョニィ・アープが「ミラーハウス」に逃げ込まなかったら』と訊いたわね。それについて考えてみたの」
「うん」
「仮に『ミラーハウス』に逃げ込まずに、たとえばこちらの事務所の建物に逃げ込んでいたら……それでもやはり、彼は狙撃されていたと思うわ」
「あのカメラだね。あれは『TAC50』が標的の位置を確認するために仕掛けたもの？」
「そうよ。つまり『TAC50』は、あちこちにカメラを仕掛けていて、いずれの場所に標的が訪れても狙撃できる位置にいるということになる」
「そんな場所……ある？」
「『ミラーハウス』での射線のことを考えると、弾丸は間違いなく高所から撃たれているわね。けれど周囲に狙撃可能な高所なんて存在していない」
「もしかして霧切ちゃん、狙撃手が何処にいるかもう見当ついてるの？」
「ええ」
「う、嘘でしょ、いつの間に……」
「園内にヒントはあったわ。それに事実を一つずつ積み重ねていけば、答えが見えてくるはずよ」

ョニィは天井の穴を通して、高所から狙撃された。
測される射線をたどっても、狙撃可能な高所は周辺には存在しない。
撃手はあちこちにカメラを仕掛け、標的の位置を確認している。

「……わかんない。たとえば上空をヘリが旋回していて、そこから撃ってるなんてことは？」
「面白いアイディアだけど、ヘリの姿は見えないし、音も聞こえないわね」
「じゃあもっと上空、高度８０００メートルあたりから……」

「その距離で、12・7ミリの弾丸を標的の頭部に命中させるのは、まず無理ね」
「ごめん、云ってみただけ」わたしは口を尖らせる。「でも高所の狙撃ポイントなんて何処にもないっていうのは、変えようのない事実でしょ？」
「ええ。その点はどうにもならないから、別の視点で考えるしかないわね」
「別の視点……視点といえば、狙撃手はわざわざカメラを置いて、標的の位置を確認しているんだよね。それってつまり、狙撃手はスコープや肉眼では標的が見えない位置にいる……ということ？」
「そうよ」
「それはおかしいよ。見えない位置にいるのに、どうやって弾丸を当てられるの？　弾丸は直線で飛ぶんだから、当然、その直線上に標的を目視できていなければ……」
　わたしはそこまで云って、ふと思い当たった。
　弾丸は直線で飛ぶ？
　今までの訓練で、わたしは何度も何度も見てきたはずだ……弾丸が一直線に飛ぶなんていうのはイメージにすぎない。実際には、風や空気抵抗、重力などによって弾丸は上下左右に大きく振られるのだ。
　弾丸は直線で飛んだりはしない。
　その事実にようやく思い至り——
　わたしにはジョニィを狙撃した犯人、『TAC50』のいる場所が想像できた。
「霧切ちゃん、わたしにもわかったよ！」わたしは霧切の手を取って云う。「『TAC50』は高所になんかいない。高いところにいなくても、『ミラーハウス』の射線を描くことができるんだ！　上空へと撃ち上げた山なりの曲射で！」
「さすがだわ、結お姉さま」
　霧切の表情がほころぶ。
「ってことはやっぱり、『TAC50』はこの付近の山に潜伏しているのかな？」
「いいえ。それだとリコたちはもっとはっきりと銃声を聞いていてもおかしくない。サプレッサーを装着しているにしても、かなり音がするものね」
「じゃあ……何処？」
「さっき一度、結お姉さまがマンホールに落ちそうになっていたけど、園内には他にもいくつか、蓋が開きっ放しになっているマンホールを見かけたわ。おそらくアトラクションの電源ケーブルなどはすべて地下で管理していて、それぞれのマンホールから管理通路に下りられるようになっているのだと思う」
「そうか——地下だ！」

『TAC50』は地下通路にひそみ、カメラで標的の位置を確認しつつ、園内にあるいくつかのマンホールを射出口として、曲射狙撃を行なっていたのだ。

「それにしても……場合によっては３０００メートルも４０００メートルも飛ぶ五十口径の弾丸で、弓なりの狙撃なんて普通、思いついてもできないでしょ……」
「ええ、ジョニィ・アープと同等か――それ以上の狙撃手だと思う」
「実際のところ、上空に撃った弾丸で地上にいる人間を殺せるほど、エネルギーは失われないものなの？」
「祝砲によって撃ち上げられた弾丸が、落ちてきた際にたまたま人に当たって亡くなるケースも、少なからず確認されているそうよ」
「へえ……そうなのか」
　五十口径の弾丸ともなれば、撃ち上げてから落下するまで、数秒はかかるだろう。それも計算したうえで狙撃しなければならないのだから、通常の水平射撃よりはるかに難しい。
「これでだいたい密室狙撃事件についてはわかったけど、ところで『スローイングナイフ』はどうして『ミラーハウス』の中で倒れていたんだろう？」
「ジョニィ・アープを追いかけていったはいいけど、彼によって返り討ちにされたんじゃないかしら。それで一時的に気を失っている間に、ジョニィ・アープが狙撃された。何が起こっているのか、彼女にもよくわからなかったでしょうね」
「気の毒といえば気の毒かな……」同情するつもりはないけど。「それで……『ＴＡＣ５０』をどうする？　放っておくわけにもいかないよね……リコを助けに来た人間を狙撃できるように今も準備しているだろうし」
「攻勢に出ましょう」霧切は凜々しい顔つきで云う。「私にアイディアがあるの。乗ってみる？」
「もちろん！」

6

　わたしたちは敷地の外を大きく迂回して、再び『ミラーハウス』まで戻った。
　遊園地の地下には、ケーブル管理のための通路が張り巡らされていて、それぞれのマンホールから出入りできるようになっている。わたしたちはいくつかあるマンホールの中から、一つを無作為に選び出した。
　紐にくくりつけたデジカメをその中に下ろして撮影し、安全を確認する。
　どうやら誰もいないようだ。
　わたしと霧切は無言のまま肯き合って、わたしから先に、地下への梯子に足をかけた。

地下通路は思ったより広くて、屈まずに立って歩けるほどだった。ただし通路の面積の半分以上がケーブルや配管によって占められているので、窮 屈な印象は拭えない。そのうえ、長い間廃墟として放置されていたせいもあってか、淀んだ空気が層をなして渦巻いているような、ひどい臭気がした。
　通路の先には、点々と作業用ライトの明かりが見える。地上より暖かいので身体は楽だけど、じめじめとした空気が肌に合わない。ここに何時間もこもり続けるのは苦痛だ。
「急ごう」
　わたしたちは足音を立てないように通路を進む。
　通路の角に差し掛かるたびに、わたしたちは一度立ち止まり、用心深くデジカメで先方を確認した。
　いくつめかの角に差し掛かり、カメラでその先を確認すると、液晶画面の中にうごめく人影を確認できた。
　いる！
　わたしは霧切に目配せする。
　そこは地下通路の行き止まりだった。大柄なその男は、椅子に座ってドーナツを食べながら、テーブルに並べたモニタを眺めている。まるで地底人の住居だ。
　こちらには気づいていない。
　距離は１５メートル程度か。
　気づかれていないうちに、角から通路に躍り出て、男を素早く狙撃する――はたしてそれが可能だろうか。相手は間違いなくジョニィ級のスナイパーだ。こちらが狙いを定めているうちに、おそらく向こうは引き金を引き終わっているだろう。
　下手な手は打てない。慎重に、かつ的確に狙いを定める必要がある。
　絶対に外さないという状態で対峙することが、勝利への条件だ。
　わたしは霧切の手を取る。
　彼女が何か云いたそうにしていたので、彼女の前髪をかき上げて、額にキスした。
　霧切の考えた作戦を予定通り行なえば、何も問題ない。すべては単純作業だ。
　さあ、決着をつけよう――
　その時。
　わたしの靴の先に、何かが当たった。
　それは何処にでもあるような、なんの変哲もないネジか何かで……金属音を立てながら、ころころと転がっていった。
　大男がはっとしてこちらを見る。

ネジを慌てて捕まえようと、うっかり角から姿を見せたわたしと――
視線が交錯する。
「お前……」
男は乾いた声で云う。何年間も人と話す機会がなくて、すっかりかすれてしまったような声だった。
男の手には、『TAC50』ではなく、ピストルが握られていた。銃口は当然、こちらに向けられている。いつでもすぐ撃てるように用意しておいたのかもしれない。
わたしは足を止めたまま、動くことができなかった。
「あなたが……『TAC50』？」
震える声で尋ねる。
「おい、お前……メガネブス……もう一人のカワイイ方はどうした？」
メ、メガネブス？
ひどいことを云う。別にいいけど……どうやら彼は、霧切がここにいることには気づいていない。それがわかっただけでも上出来だ。
わたしは破れかぶれで説得を試みる。
「これは本当にあなたが望んだゲームですか？　こんなことのために、委員会にいいように利用されて、あなたは悔しく――」
「うるせえブス。早くもう一人を連れてこい。お前の目の前であの子をレイプしたあとで、お前だけを先に殺して、お前の屍体の前でもう一回あの子をレイプしてやる」
「ふざけるな、バカ！」
わたしは思わず叫んでいた。
だって仕方ないでしょ、あんな男！
「……何？　何か云ったか？」大男の顔色が明らかに変わった。「お前、自分の立場がわかっているのか？」
銃口を突きつけるようなしぐさをする。
「いや、あの……つい悪口云っちゃいましたけど……悪気は全然……」
「探偵だから撃たれないと思ってるんだろ？　俺がそんな小せえルールに縛られる男だと思ってるのか？」
「――撃てるの？」
わたしは正面に向き直り、胸を張る。
大男は一瞬、眉間に皺を寄せた。

「なんだと？」
「撃てるんだったら、最初から撃てばよかっただろ！　お前は、絶対に、わたしを撃てない！」
「撃てるんだよ、ブス！」
　大男はあっさり引き金を引いた。
　銃口からガスが噴き出し、同時に弾丸が回転しながら飛び出す。
　スライドがブローバックして空薬莢が跳ねる。
　目を焼くほどのマズルフラッシュ。
　狭い通路に反響する銃声——
　わたしには、その一連の出来事がスローモーションに感じられた。
　そして悲鳴を上げる間もなく——
　弾丸はわたしの額を撃ち抜いた。
　飛び散る破片。
　それはとてもきらきらとしていて……
　破片の一つ一つに、大男の動揺した表情が映し出されていた。
「あん？」
　大男の目の前からはわたしが消え去り——
　代わりに床に伏せて銃を構える霧切が、魔法のように目の前に現れる。
　大男が撃ったのは、大きなマジックミラーだった。『ミラーハウス』にあったやつだ。これを通路の角に、四十五度の角度で立てて、わたしは角の手前に立つ。すると男の目からは、わたしが通路に立っているように見えるという、古典的な鏡のトリックだ。薄暗くて狭い通路が、トリックを成功させる条件として最適だった。精一杯おっちょこちょいな演技で挑発し、相手の隙を作る。
　その間、マジックミラーの裏側では、霧切が伏せた状態でレミントンＭ７００を構えていた。
　もちろん、わたしの枕を銃床の支えにして。
　すでに狙いは完璧なほど大男を捉えている。
　事態に気づいた大男はピストルの引き金を引こうとするが、霧切が事もなげにそれを撃ち落とし、流れるような動作で素早く次の弾丸をリロードしていた。
「動かないで。殺すしかなくなる」
　霧切は冷たい声で云い放った。
　大男は諦めたように両手を上げる。
　ちょうどテーブルの上に手錠があったので、それで大男を配管に繋ぎ止めた。手錠で何をするつもり

だったのか考えるとおぞましい。
「委員会があなたを回収に来るのが早いか、それとも警察が先か、祈ってるといいわ」
　霧切は大男を見下ろして云った。
「危ないから銃は回収しておこう」わたしは重さ12キロもある『TAC50』を抱える。「こっちも」
　床に落ちたピストルを拾った。
　その時、ふと横の壁に小さな扉があるのに気づいた。『電源管理室』と書かれている。
　気になって開けてみると……スイッチの色とりどりなランプが灯る暗闇の中に、白いふわふわした服を着た女性が横たわっていた。
「霧切ちゃん、もしかしてあれ……」
『スローイングナイフ』だ。
　ギリースーツはぼろぼろで、胸元がはだけ、床には血痕が点々と散っていた。
　彼女はかっと目を見開いたまま、天井を見つめていた。
「……彼女に何をしたの？」
　霧切は大男を睨（にら）みつけて尋ねる。
「事細かに聞きたいか？」
　大男はそう云って笑った。
　霧切は黙ったまま、大男に背を向けた。

7

　わたしたちはマンホールの梯子を上って、外に出た。まるで何十年も地下にこもっていたような気分だ。さわやかな空気が身体にしみわたる。曇り空もこころなしか晴れ間がさしてきたような気がする。
　やはり精神的な気分の問題だろうか。
　何しろ、もうこの遊園地は安全なのだ。
　わたしたちは急いでリコの元へ駆け寄る。
　途中で、ビーコンが鳴り始めた。ああ、そうか。そんなものもあったっけ。わたしはポケットからビーコンを取り出してスイッチを切った。
「リコ！　助けに来たよ！」
　声をかける。
　リコは血の海に横たわったままだった。彼のお澄ましさんの恰好も、血で赤黒く染まり、ところどころ銃

弾によって破け、見るも無残な状態だった。顔色はほとんど雪と変わらないほど真っ白で、前髪が汗で額に張りついていた。

　霧切が脈を確認する。

「かなり弱いけど、脈はある」

「リコ、終わったよ！」

　わたしが大声で呼びかけると、リコはうっすらとまぶたを開いた。

「結さん……響子さん……」

　彼は目をしばたたかせながら、わたしたちを見上げる。

「もう大丈夫だからね」

　わたしはコートを脱いで、彼の身体にかけてあげた。

　携帯電話で警察と救急を呼ぶ。救急隊に化けた委員会の連中が来る可能性もあるけど、ゲームが終わったあとで彼を連れ去るなんてアンフェアなことはしないだろう。

「結さん……」

　リコが苦しそうに声を上げる。

「どうしたの？　苦しい？」

「人工呼吸……ずっと待ってるんですけど……」

「呼吸止まってないんだから必要ないでしょ」

「じゃあ今から……一瞬死んで呼吸を止めますので……」

「やめて！　もういいから、大人しく寝てなさい」

　いつものリコだ。まだ元気はありそう。

　これだけの傷を受けて、死なずに済んだのは、素早い自己処置がよかったのか、それとも単に運がよかっただけか……たぶんそのどちらもだろう。

　ふと霧切の方を見ると、彼女は深刻そうな顔つきで、手の中の何かを見つめていた。

「どうしたの？　霧切ちゃん」

「これ……」

　彼女が手に持っているのは、ビーコンだった。

「それがどうしたの？」

「一つ気がかりなことが……」

　顔色がよくない。

　その時、わたしは恐るべきものを目の当たりにした。

霧切のすぐ背後の雪が――

静かに膨らみ始めたかと思うと――

気づけばそれは人の形になっていた。

ふわふわとした毛の塊のようなものを羽織ったその人の手には、銀色に光るナイフ。

『スローイングナイフ』だ！

生きてたのか！

霧切ちゃん――

すぐうしろに！

声すら間に合わない。

霧切はわたしの表情に気づいて、うしろを振り返る。

彼女の三つ編みがふわりと舞って――

振り上げられたナイフがきらめく。

振り下ろされるのは一瞬だ。

一瞬で途絶える命。

わたしは絶望のあまり膝をついた。

するとその瞬間、『スローイングナイフ』の額が音を立てて弾けた。

鮮血が飛び散る。

撃たれた？

彼女はゆっくりと仰向けに倒れていく。

まるで雪から生まれて、雪の中に消えていくようだった。

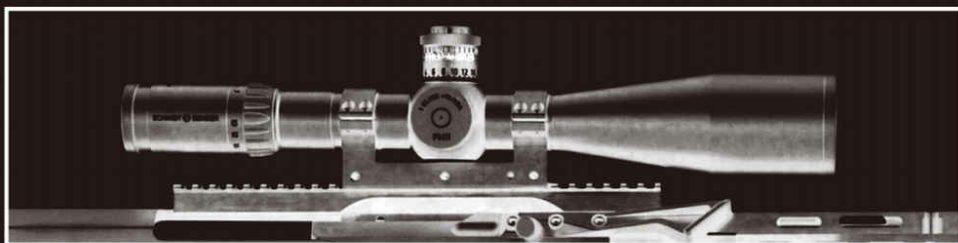
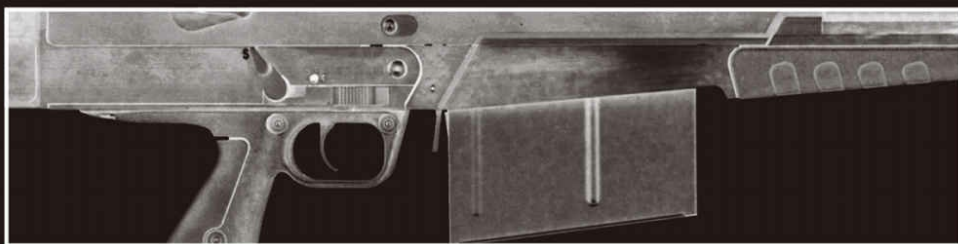
わたしはリコを見る。彼は半ば意識を失い、横たわったままだ。手にはケータイが握られているだけ。

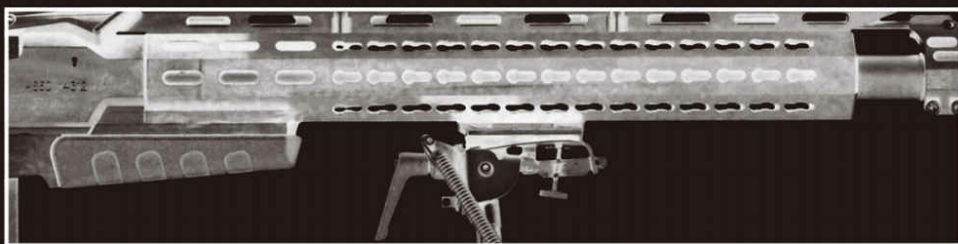
彼じゃない。

それなら誰が？

霧切は薄く口を開いたまま、言葉を失っている。

彼女が何か云おうとした瞬間――

右のリボンがはらりとほどけた。

第四章

Life is what you make it

翌日、午前十時。
　わたしと霧切は電車を乗り継いで、大学病院に足を運んだ。待合室には、診察の順番を待つ人たちがソファを埋め尽くしていた。
　受付で一般病棟への面会を申請する。
「入院されている方のご氏名は……」
　御鏡霊、と答えると、そのような方はいらっしゃいませんと云われた。
「えっ、でも……」
「結お姉さま」
　霧切がわたしのコートの裾を引っ張る。彼女は無言で、待合室のソファの方に目線を送っていた。
　そこには例のお澄ましさんが座っていた。
　周りの風景に溶け込んでいるつもりかもしれないけれど、彼の独特な雰囲気はやはりごまかせるものではない。
　わたしたちは受付を離れ、彼のところへ向かった。
「リコ、もう退院できたの？」
　声をかけると、彼は肩を竦めた。
「とりあえずここを出ませんか」
　彼は云って、立ち上がる。いつものように腕に上着をかけたまま、一人で先に病院を出ていってしまった。
　わたしたちは彼のあとを追った。
　病院のすぐ隣にある公園で、並んでベンチに座る。
　冬の柔らかい陽射しが、木陰に残った雪を少しずつ溶かしていた。入院患者と思われる老人と付き添いの看護師が公園内を散歩し、子供たちが雪玉を投げ合っている。
「お見舞いにいろいろ持ってきたのに」わたしは紙袋をごそごそと漁る。「えっと……お花でしょ、知恵の輪でしょ、中学校の教科書でしょ、あと宇宙の本とか……」
「いろいろとややこしい立場なので、病院を抜け出したんです」リコは苦笑する。「ほら、何処かの国のなんとか機関とか、マフィアのなんとかグループだとか……」
「そっか……君っていろんなところから追われてるレアキャラだもんね。傷の方は大丈夫なの？」
　首に巻かれた包帯が痛々しい。他の治療箇所は服に隠れて見えないため、一見すると平気そうだ

けど、やはり顔色はよくない。やむをえないとはいえ……あれだけ負傷しておいて、一晩で病院を抜け出すなんてどうかしている。
「まだ痛みますけど、傷口そのものはいずれ治ります。それよりもだいぶ血を失ったので、ふらふらしますね。結さん、首のとこ、少し吸ってもいいですか？」
「輸血ならいいけど吸うのはやめて」
　わたしはマフラーで自分の首を隠す。
　リコは静かに笑ったあと、隣に座る霧切の横顔を覗き込んだ。
「響子さん、なんだか怒ったような顔をしていますね」
「いつもこの顔よ」彼女はそう云って目を細める。「リコ、一つ聞きたいんだけど、いいかしら」
「どうぞ」
「助けに来た仲間を撃つ……それが狙撃手の常套手段。あなたまさか、ジョニィ・アープが生きているのを知っていたわけではないわよね？」
　霧切が尋ねると、リコは感情を心の奥深い場所に隠したような笑みを返した。
「まさか。僕がそこまで、彼に献身的になる理由がありますか？」
「そうね……でも結果的に、ゲームを放棄しようとしていた私たちを、引っ張り出すことに成功した。鋭いあなたなら、あの『黒の挑戦』を一目見て、私たちがゲームを放棄することは予測できたはずよ」
「そこまで察しがよくはありませんよ」リコは膝の上で指先を組んで、うつむきがちに云った。「でも、お二人が助けに来てくれて、本当に嬉しかったですよ。ヒーローに助けられるお姫さまの気持ちがよくわかりました」
「お姫さま、ねえ……」わたしは彼をまじまじと見つめる。「君、ほんとはどっちなの？」
「どっちだっていいでしょう」
　そう云って、悪戯っぽく笑う。
「虚無感を埋めるのに、無茶をしたり、誰かを利用したりするのは、これで終わりにすることね」霧切は呆れ顔で云う。「それから、二十歳までに死ぬ理由を見つけようとするのも、子供じみているからやめた方がいいわ」
「……今日はやけに辛辣（しらつ）ですね」
「昨日の夜くらいからずっとこんな調子」わたしは声をひそめてリコに云う。「ジョニィとの勝負に負けたからかな？」
「結お姉さま」
「ごめん、なんでもない」

「ちなみに——」リコが云った。「『ミラーハウス』に転がっていた屍体は、ジョシュア・リンドバーグというアメリカ人のプログラマーらしいです。DNA鑑定で判明しました」
「あっ、それって……」
「『M4』の無人兵器プログラムを組んだ人物のようですね。彼も刺客として現場にいたんですよ。ジョニィさんがそのことを知ったのは、あとか先かわかりませんが、見た目が似ていたので身代わりの屍体に使ったというわけです」
「偶然にしてはできすぎじゃない？」
「でもジョニィさんが『黒の挑戦』の選別に関わっていないのは事実ですよ。そのへんの公正さについては僕が保証します。特に最後のやつは、委員会がジョニィ対策を想定して、意図的に変則的な挑戦状をぶつけてきていますしね」
「ふうん……まあリコが云うんなら信じるけどさ」
　リコの情報をもとに、『ミラーハウス』で起きたことを推測すると、こうなる。
『スローイングナイフ』と『M4』の斉射に追い立てられて『ミラーハウス』に逃げ込んだジョニィは、たまたまそこにひそんでいたジョシュアと鉢合わせする。追ってきた『スローイングナイフ』もそこに加わり、乱闘になった。
　結果的に、勝ったのはジョニィ一人だった。
　バールストン・ギャンビットを実行しようとしたのは、おそらくこの辺りだろう。あるいは天井の奇妙な穴か、マジックミラーの存在に気づいてからかもしれない。
　ジョニィはわざとカメラに自分をさらし、『TAC50』が引き金を引くのを待つ。そして地下から響く銃声を聞き、そのあとで所定の位置にジョシュアを立たせた。弾丸の滞空時間は五秒以上あっただろう。銃声を聞いてからでも行動が可能だ。ちなみにこの時点で、ジョシュアは気絶しているか、あるいはすでに殺されている。
　曲射によりジョシュアの頭部が粉砕され、ジョニィの身代わり屍体ができあがった。ジョニィは自分の服を屍体に着せて、その場を立ち去る。
　その際に、自分の銃を持っていくことを忘れなかった。ジョニィの銃が現場になかったのは、本人が持ち去ったからだ。
　そのあと、『ミラーハウス』に駆け込んできたリコに見つからないように姿を隠す。鏡の迷宮は隠れる場所に事欠かなかっただろう。
　リコが立ち去ったあと、ジョニィは裏口から外へ出て、それからずっと付近に潜伏していたと考えられる。
　仲間のリコに対しても、自分が死んだと思わせようとしたのは、やはりわたしたちを現場に引っ張り出す

意図があったからではないかと思う。ジョニィが死んだとなれば、当然リコはその旨をわたしたちに連絡するだろう。
　リコが負傷して死にかけることまで、ジョニィが予測していたかどうかはわからない。でもまあ、たぶん予測はしていただろう。
　そこまでのことを、リコ自身が何処まで把握していたのか……
　その答えは、きっと永遠にわからない。
「響子さんはいつ、ジョニィさんが生きていることに気づきました？」
「残念だけど……ビーコンが鳴った時よ」
「ビーコン？」わたしは首を傾げる。「そういえばリコのところへ駆け寄った時に、ビーコンが鳴り出したけど……」
「その時に鳴ったのはいいの。問題は、ジョニィの屍体に近づいた時に鳴らなかったこと。このことにもっと早く気づいていれば……」
「ん？　よくわからないんだけど……」
「ほら、結さん。ジョニィさんが云っていたルールを思い出してください。特にビーコンについて——」

『一人一つずつ、ゲーム中は常に携帯すること。手放したり、何処かに隠したりするのはルール違反とする』

「私たちがジョニィの屍体を調べている時に、ビーコンが鳴らなかったでしょう。つまり屍体周辺にビーコンはなかった。誰かが持ち去ったのよ」
「うん……で？」
「現場からなくなっているものは二つ。ジョニィの銃と、ゲームに使うビーコン。ここまで云えばわかるでしょう。ジョニィは生きていて、まだゲームを続けるつもりだった。ビーコンを持ち去ったのは、ルール違反にならないようにするためよ」
「ああ！　そういうことか……」
「僕はビーコンのことは失念していましたけど、チーム同士では鳴らないから、気づかなくても仕方ないですよね」
　リコは笑顔で云う。
「ジョニィからは、その後連絡は何もないの？」
　わたしは尋ねる。

「ええ、何も。彼も今となっては委員会から追われる身ですし、これでお別れでしょうね。今頃、飛行機で何処か遠い空の上にでもいるんじゃないでしょうか。旅に出るって云ってましたから」
「勝ち逃げかあ……まあいっか。もう二度とこんなゲームに巻き込んでほしくないし。ほんと迷惑だ」
「でも、楽しかったでしょう？」
「楽しくなんかない！」わたしは声を大にして云う。「君だって、そんな傷だらけになって、よく楽しかったなんて云えるね」
「実際、楽しかったですから。でも、二度とごめんだという意見には賛成ですね。僕もしばらくは治療に専念するため、大人しく姿を消して生活することにします」
「何処か行っちゃうの？」
「ええ、当初の予定通り、この世の謎に迫るためアメリカに行こうと思っています」そう云うと、リコはわたしを見つめた。「寂しいですか？」
「うん……まあね」
「僕も寂しいです」
「どうせ本音じゃないんでしょ」
「ふふっ……どうでしょうね」
　リコは笑ってごまかした。
　できることなら彼を引き止めたかった。探偵として彼ほど心強い仲間は他にいない。
　けれどこれ以上彼を巻き込めば、彼は自爆に近い破滅の仕方をするような気がしてならなかった。そんな姿よりも、いずれ大人になった時に、今回の事件のことを恥ずかしそうに笑って話す彼の姿を見てみたい――わたしはそう思う。
「じゃあ、そろそろ帰るよ」わたしは立ち上がって云った。「これ、お見舞いのつもりだったけど、餞別ってことで」
　紙袋をリコに渡す。
「ありがとうございます」リコは足をかばいながら立ち上がる。「タクシーを呼んでありますので、使ってください」
　公園の脇にタクシーが一台停まっていた。
　さすが手際のいい子だ。
　霧切はコートのポケットに手を突っ込んだまま一言――
「それじゃあ、さようなら」
　そう云って、タクシーの方へ向かう。

「さようなら……って、帰るの早くありません？」リコは呆れ顔で云った。「相変わらずクールな人ですね」
「ほんとはもっとかわいげがあるんだけどね」
　わたしは笑って云う。
「でもちょうどよかった」リコは声をひそめる。「どうやって結さんと二人きりになろうかと考えていたところだったんです」
「なんなの？」
「実はジョニィさんから、勝負が終わったあとに結さんにこれを渡せって云われているんです」
　リコは腕にかけた上着の中から、小さな鍵を取り出した。何かのプレートがついている。
「ゲームに勝ったら賞品が出るという話でしたけど、これは参加賞らしいです」
「いらない」
「……ふふっ、確かに、どうせろくなものではないでしょうね」リコは肩を竦める。「僕が捨てておきましょうか？」
「いや、一応もらっとくけど……わたしだけなの？」
「ええ、参加賞は結さんだけに、と聞いています」
「変なの」
　わたしは鍵を受け取る。
　リコの冷たい指先が一瞬、わたしの手に触れた。
　するとリコは急にわたしに抱きついてきた。
「ハハッ、やっぱり寂しいんでしょ？」
「──もう委員会には関わらないでください」
　彼はわたしの胸に顔を埋めたまま云う。
「何？」
「このままだと結さんは戻ってこられない場所に行ってしまう」
「何を云っているの。わたしは大丈夫だよ。それより霧切ちゃんの方が……」
　リコはゆっくりとわたしから身体を離した。
「ごめんなさい、今のは忘れてください」
「リコ……」
「お二人と会えてよかった」
　最後に握手して、わたしたちは別れた。
　さよなら……リコ。

タクシーに乗り込むと、霧切は不審そうな顔でわたしを見た。
「随分遅かったわね」
「うん……まあね」
霧切は膝の上に紙袋を抱えていた。
「あれ？　それリコに渡さなかったの？」
「これは自分用」
「そう……」
わたしはそれ以上、その紙袋については何も尋ねなかった。それよりもリコが最後に云っていたことが、頭の中から離れなかった。
『このままだと結さんは戻ってこられない場所に行ってしまう』
鍵のことは、霧切には云えなかった。
何故か云うべきではないという気がしていた。

寮に帰ってきてすぐ、わたしは部屋に霧切を残し、食堂に移動した。テレビを見るふりをしながら、手元の鍵を確認する。
鍵のプレートには、数字とアルファベットがかかれていた。裏を見ると、近所の駅の名前が刻印されている。
どうやら駅のコインロッカーの鍵のようだ。
鍵をポケットにしまい、部屋に戻る。
「ちょっとわたし、買い物行ってくるね」
霧切に一言伝えて、外に出た。
霧切は特に口を挟まなかった。

駅では学生やサラリーマンが多く行き交っていた。ちょうどお昼時で、ランチメニューの看板が店の前に並んでいる。
わたしは人々の間を縫って、構内の隅にあるロッカーの前にたどり着いた。
プレートの番号の扉は……
あった。
鍵を差し込んで回す。

おそるおそる扉を開ける。
　何かとんでもないものが入っているのではないかと思いきや……小さな黒い封筒が一枚、入っているだけだった。
　黒い封筒——
　いつもの挑戦状の封筒とは違うようだけど、なんだか黒いというだけで嫌な予感がする。
　封筒の上にはメモ用紙が一枚、張りつけられていた。英語で何か走り書きされている。

　『Life is what you make it! ——Johnny』

　人生はお前次第——みたいな意味だろうか。
　わたしは周囲を見回してから、黒い封筒を取り出し、ロッカーを閉めた。
　その場で封筒の中身を確認する。
　中身は——
　なんだこれ？

　近くのコンビニでコーヒーを買って寮に帰った。
　部屋に戻る。扉を開けようとすると、突然、中から霧切が扉を押さえ始めた。
「結お姉さま、五分待って」
「な、何？」
「いいから」
　云われた通りわたしは扉の前で五分待った。
「もういい？」
「どうぞ」
　霧切の声が聞こえたので、わたしは扉を開けて部屋に入った。
　霧切はローテーブルの前で、緊張したような面持ちで正座している。
　ローテーブルの上には、立派なチョコレートケーキが置かれていた。テレビや雑誌で何度か取り上げられたことのある有名店のケーキだ。前に一度「食べてみたいなあ」なんて霧切と話をしたことがあった。
「わあ、これどうしたの？」
「予約しておいたの。さっき受け取ってきたのよ」
「わたしがお見舞いの品を物色している時？　でもよく予約取れたね。大変だったでしょ」

「余裕をもって何日か前に予約しておいたわ」
「いつの間に……」
　そういえば学校からの帰りが遅い日があったっけ。
　もしかしてあの日に……
「早速、食べましょう」
　霧切はフォークとお皿を並べる。ちょうどコーヒーを買ってきたので、彼女に渡した。
「でもどうして急に？　君、ケーキとか興味あったっけ？」
「それほど興味はないわ」
「じゃあどうして？」
「結お姉さま、今日が何日かわかる？」
「えっと……何日だっけ」
「二月十四日。バレンタインよ」
　霧切はそう云って、切り分けたチョコレートケーキをわたしに差し出した。
「これは、私から──」
　絵に描いたような、幸せな時間。
　それなのに。
　わたしの胸のポケットには今、黒い封筒がある。
　うしろめたい気分だった。
　封筒の中に入っていたもの、それは──

犯罪被害者救済委員会

第12地区代表

円藤　藤吉郎

TEL XX-XXXX-XXXX

—— to be continued.

星海社 FICTIONS
キ1-06
ダンガンロンパ霧切
6
北山猛邦
Kitayama Takekuni
星海社
今回のゲームのテーマはあくまで狙撃だ。
一発の銃弾によって、運命を決める戦いにしたい。
最強のトリプルゼロクラス探偵ジョニィ・アーブとの狙撃戦に霧切あやうし!
命をかけた死亡遊戯の先に、宿敵「犯罪被害者救済委員会」が立ちはだかる!
原作ゲーム『ダンガンロンパ』のシナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の　霧切響子の過去――。
これぞ"本格×ダンガンロンパ"!!
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『『クロック城』殺人事件』（講談社ノベルス）で第24回メフィスト賞を受賞しデビューする。
代表作として、デビュー作に端を発する『『瑠璃城』殺人事件』（講談社ノベルス）などの一連の〈城シリーズ〉や、
『踊るジョーカー』（東京創元社）などの〈名探偵音野順の事件簿シリーズ〉、
『猫柳十一弦の後悔』（講談社ノベルス）などの〈猫柳十一弦シリーズ〉がある。
小松崎 類
Komatsuzaki Rui
デザイナー・イラストレーター。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。

星海社FICTIONS
キ1-06
ダンガンロンパ霧切 6
今回のゲームのテーマはあくまで狙撃だ。
一発の銃弾によって、運命を決める戦いにしたい。
最強のトリプルゼロクラス探偵ジョニィ・アープとの狙撃戦に霧切あやうし!
命をかけた死亡遊戯の先に、宿敵「犯罪被害者救済委員会」が立ちはだかる!
原作ゲーム『ダンガンロンパ』のシナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の探偵・霧切響子の過去――。
これぞ"本格×ダンガンロンパ"!!
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『『クロック城』殺人事件』(講談社ノベルス)で第24回メフィスト賞を受賞しデビュー
代表作として、デビュー作に端を発する『『瑠璃城』殺人事件』(講談社ノベルス)などの一連の〈城
『踊るジョーカー』(東京創元社)などの〈名探偵音野順の事件簿〉シリーズ、
『猫柳十一弦の後悔』(講談社ノベルス)などの〈猫柳十一弦〉シリーズがある。
小松崎類
Komatsuzaki Rui
デザイナー・イラストレーター。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。
ファン必読の"星海社FICTIONS×『ダンガンロンパ』"シリーズ!
ダンガンロンパ/ゼロ (上)(下) 小高和剛
ダンガンロンパ霧切 1〜6 以下続刊 北山猛邦
ダンガンロンパ十神 (上)(中)(下) 佐藤友哉
北山猛邦
Kitayama Takekuni
星海社
キ1-06

在　　　　　　　な　と　ー　　　り

されて　　　、　　　年　　された　　　し、　　　時　　　して

ー

、2018年2月、　　り　　　　　として　　された　　-　　　として　　　した
-　　　　　、　　　　　数な　　な　　　り

に　って　、　　　　　され　し　　しな　　　り　　た、　　　　　　、　　　　、
、　前　　　な　　　　　され　と　　　　　　　　さ

6

2020年10月1日 01

. . A .

112-0013
1-17-14
4
:// . . .

112-8001
2-12-21
:// . . .

、 た に 、 されて
、 られて